

保存用

まくら

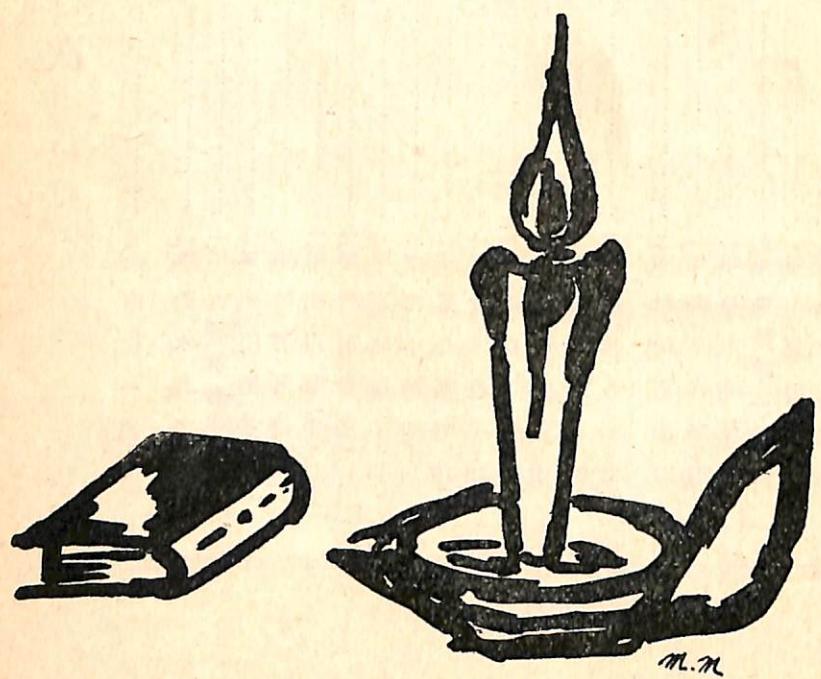


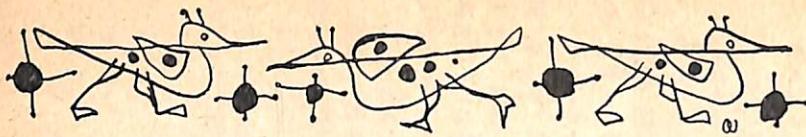
都立松原高校図書館蔵書

8

東京都立松原高等学校生徒会

る・くーる





詩 あ
の
純 時

目次

詩	あ	の	時	校長	中村	一男
隨想	純あと秘坂野	春の	れれ	一年	船古谷季影	子洋
死夜母一詩	おとづれ	道密	一年	栗渡辺川田	子	子
エリザとナ	記間	き	二年	矢岩畠中崎	枝	5
死をみつめ	記國	心	三年	加落甘山	枝	7
エリザとナ	霧國	れ	二年	木口木合	子	11
死をみつめ	國間	れ	一年	木珠正貞	子	12
エリザとナ	記國	れ	二年	嘉徳綾秀	子	13
死をみつめ	霧國	れ	一年	嘉徳綾秀	子	14
エリザとナ	國間	れ	二年	嘉徳綾秀	子	15
死をみつめ	記國	れ	一年	嘉徳綾秀	子	16
エリザとナ	霧國	れ	二年	嘉徳綾秀	子	17
死をみつめ	國間	れ	一年	嘉徳綾秀	子	18
エリザとナ	記國	れ	二年	嘉徳綾秀	子	19
死をみつめ	霧國	れ	一年	嘉徳綾秀	子	20
エリザとナ	國間	れ	二年	嘉徳綾秀	子	21
死をみつめ	記國	れ	一年	嘉徳綾秀	子	22
エリザとナ	霧國	れ	二年	嘉徳綾秀	子	23
死をみつめ	國間	れ	一年	嘉徳綾秀	子	24
死をみつめ	記國	れ	二年	嘉徳綾秀	子	25
死をみつめ	霧國	れ	一年	嘉徳綾秀	子	26
死をみつめ	國間	れ	二年	嘉徳綾秀	子	27
死をみつめ	記國	れ	一年	嘉徳綾秀	子	28
死をみつめ	霧國	れ	二年	嘉徳綾秀	子	29
死をみつめ	國間	れ	一年	嘉徳綾秀	子	30
死をみつめ	記國	れ	二年	嘉徳綾秀	子	31
死をみつめ	霧國	れ	一年	嘉徳綾秀	子	32
死をみつめ	國間	れ	二年	嘉徳綾秀	子	33
死をみつめ	記國	れ	一年	嘉徳綾秀	子	34
死をみつめ	霧國	れ	二年	嘉徳綾秀	子	35
死をみつめ	國間	れ	一年	嘉徳綾秀	子	36
死をみつめ	記國	れ	二年	嘉徳綾秀	子	37
死をみつめ	霧國	れ	一年	嘉徳綾秀	子	38
死をみつめ	國間	れ	二年	嘉徳綾秀	子	39
死をみつめ	記國	れ	一年	嘉徳綾秀	子	40
死をみつめ	霧國	れ	二年	嘉徳綾秀	子	41
死をみつめ	國間	れ	一年	嘉徳綾秀	子	42
死をみつめ	記國	れ	二年	嘉徳綾秀	子	43
死をみつめ	霧國	れ	一年	嘉徳綾秀	子	44
死をみつめ	國間	れ	二年	嘉徳綾秀	子	45
死をみつめ	記國	れ	一年	嘉徳綾秀	子	46
死をみつめ	霧國	れ	二年	嘉徳綾秀	子	47
死をみつめ	國間	れ	一年	嘉徳綾秀	子	48
死をみつめ	記國	れ	二年	嘉徳綾秀	子	49
死をみつめ	霧國	れ	一年	嘉徳綾秀	子	50
死をみつめ	國間	れ	二年	嘉徳綾秀	子	51
死をみつめ	記國	れ	一年	嘉徳綾秀	子	52
死をみつめ	霧國	れ	二年	嘉徳綾秀	子	53
死をみつめ	國間	れ	一年	嘉徳綾秀	子	54
死をみつめ	記國	れ	二年	嘉徳綾秀	子	55
死をみつめ	霧國	れ	一年	嘉徳綾秀	子	56
死をみつめ	國間	れ	二年	嘉徳綾秀	子	57
死をみつめ	記國	れ	一年	嘉徳綾秀	子	58
死をみつめ	霧國	れ	二年	嘉徳綾秀	子	59
死をみつめ	國間	れ	一年	嘉徳綾秀	子	60
死をみつめ	記國	れ	二年	嘉徳綾秀	子	61
死をみつめ	霧國	れ	一年	嘉徳綾秀	子	62
死をみつめ	國間	れ	二年	嘉徳綾秀	子	63
死をみつめ	記國	れ	一年	嘉徳綾秀	子	64
死をみつめ	霧國	れ	二年	嘉徳綾秀	子	65
死をみつめ	國間	れ	一年	嘉徳綾秀	子	66
死をみつめ	記國	れ	二年	嘉徳綾秀	子	67
死をみつめ	霧國	れ	一年	嘉徳綾秀	子	68
死をみつめ	國間	れ	二年	嘉徳綾秀	子	69
死をみつめ	記國	れ	一年	嘉徳綾秀	子	70
死をみつめ	霧國	れ	二年	嘉徳綾秀	子	71
死をみつめ	國間	れ	一年	嘉徳綾秀	子	72
死をみつめ	記國	れ	二年	嘉徳綾秀	子	73
死をみつめ	霧國	れ	一年	嘉徳綾秀	子	74
死をみつめ	國間	れ	二年	嘉徳綾秀	子	75
死をみつめ	記國	れ	一年	嘉徳綾秀	子	76
死をみつめ	霧國	れ	二年	嘉徳綾秀	子	77
死をみつめ	國間	れ	一年	嘉徳綾秀	子	78
死をみつめ	記國	れ	二年	嘉徳綾秀	子	79
死をみつめ	霧國	れ	一年	嘉徳綾秀	子	80
死をみつめ	國間	れ	二年	嘉徳綾秀	子	81
死をみつめ	記國	れ	一年	嘉徳綾秀	子	82
死をみつめ	霧國	れ	二年	嘉徳綾秀	子	83
死をみつめ	國間	れ	一年	嘉徳綾秀	子	84
死をみつめ	記國	れ	二年	嘉徳綾秀	子	85
死をみつめ	霧國	れ	一年	嘉徳綾秀	子	86
死をみつめ	國間	れ	二年	嘉徳綾秀	子	87
死をみつめ	記國	れ	一年	嘉徳綾秀	子	88
死をみつめ	霧國	れ	二年	嘉徳綾秀	子	89
死をみつめ	國間	れ	一年	嘉徳綾秀	子	90
死をみつめ	記國	れ	二年	嘉徳綾秀	子	91
死をみつめ	霧國	れ	一年	嘉徳綾秀	子	92
死をみつめ	國間	れ	二年	嘉徳綾秀	子	93
死をみつめ	記國	れ	一年	嘉徳綾秀	子	94
死をみつめ	霧國	れ	二年	嘉徳綾秀	子	95
死をみつめ	國間	れ	一年	嘉徳綾秀	子	96
死をみつめ	記國	れ	二年	嘉徳綾秀	子	97
死をみつめ	霧國	れ	一年	嘉徳綾秀	子	98
死をみつめ	國間	れ	二年	嘉徳綾秀	子	99
死をみつめ	記國	れ	一年	嘉徳綾秀	子	100

表紙 熊谷直彦

あの時

學校長 中村一男

中
村

一

その年の一月十二日は、珍しく晴れ渡つた波静かな小春日和で、あつた。二、三日来、揺れ通した地震にも、もう感覚が鈍つっていた。

船に乗つて間もなく、九時過ぎに、桜島の南岳から積雲のよう
にモク／＼と噴煙が凄まじい勢で青空高く昇つて間もなく頭上に
かぶさつて来るようと思われた。火口附近には、落ちた溶岩で山
火事がおきている。船頭は力一杯に櫓を漕ぎ続けた。商船学校前
に船が着いた時は、もう灰が落ちはじめて、あたりは灰色の世界
と化した。避難者は思い／＼に散つて行つた。私達は親戚の家を
目指して急いだが、灰が降つて寸尺も見えない。やつとたどりつ
いて、内心不安ながら噴火の静まりを待つことにした。その日の午後六時過ぎ、今までにない大地震があつて、私は一人で外に飛
び出したが、門柱においてが当つて生きた氣もしなかつた。通り
に出ると海岸の方から「津浪が来た」と悲痛な叫びをあげて走つ
て来る人がある。義弟も飛び出して來たので、恐しくなつてそのまま山手の方向に走つた。電灯も消えた薄暗い路をどう通つたか
わからぬうちに城山の麓についた。登りの路からは通れない、
と云つて多くの人々は降りて来ている。困つた、このままでは済

浪にさらわれるばかりである。その人々をかきわけて、二人はとん／＼登つて人々のわめいている平地についた。竹籠の中にはたくさんの人々が座りこんでいる。眼もくらむ程の稻妻と、耳もつんざく鳴動が絶え間なくし、恐しい。隣りに座っている人が「ここ迄来て死んだらもう運命だ」と云うのを聞いて、二人は一層恐しくなつてもつと安全な場所を求めて歩き出した。公園の裏手の奥の細路を突き進んだ。練兵場についてやつと安心したが、稻妻と鳴動は絶間なく続いている。兵営の門前に来たら銃を持った衛兵が立つていて。二人はすつかり疲れきつて、眼下の田圃の稲の穂をとつて身に着て一夜を明かす事にした。眼を覚ますともうすっかり夜も明けて、あたりは灰だらけになつていて。衛兵も立つたまま見ていた。さあ、帰ろう、として本通りに出たところ、川に沿つた道を昨夜避難した両親、弟妹達が帰つて來るのに出合つた。よかつたよかつたと無事を喜んだものの、逃げている最中には親、弟妹の事を考える余裕もなかつた。人間の、命を愛する事が、今は全く本能であると知つた。この他多くの奇蹟珍談も尽きないが、今は貢が許されない。時は半世紀も前の大正三年の出来事で

純
心



一年船水洋子

遠くの海へ
何かを求め

遠くの山に
何かを求める

山から
山びこと
雪崩の音が
海からは
千鳥の鳴き声と
波の音が
返ってきた

消えたと思っていた火は、まだ
心の中でぶすぶすといぶつていた

あ
こ
が
れ

一年古谷李影子

雪崩は絶望を
千鳥は人間の悲しさを
波の音は無を
感じさせた

北海の砂丘に立て
すべてをあらい流した
後には何も残らなかつた
だが

そんなことがあつてはならない
自分を失つてはいけないのだ

だが、だが……

どうしたことだろう
私はそれを望んでいるのだ

はじめはあんなに
甘くやさしく小さかったのに

しかし、ついにそれは音をたてて
燃えかかる一点の火になつてしまつた
炎がゆれると私は暗闇にかくれた
身をひそめてゆらめく火をみつめた
ゆらめく火は自分の中にあるのに！

一生懸命ふき消そうとした

北風の中をひとり歩いた
青葉の枝でビシビシたたいてみた
ようやく八分どおり火を消した

もうひといき！

一生懸命ふき消そうとした
北風の中をひとり歩いた
青葉の枝でビシビシたたいてみた
ようやく八分どおり火を消した

もうひといき！

私は自分を失うのはいやだ

だが、だが……

どうしたことだろう
私はそれを望んでいるのだ

私は自分を失うのはいやだ

だが、だが……

どうしたことだろう
私はそれを望んでいるのだ

私は自分を失うのはいやだ

どうしたことだろう
私はそれを望んでいるのだ

私が云う言葉に

何か、絹糸のようなものに
強くひかれる

ヒミツと云う言葉に
何か、息苦しさを
私は感じる

秘 密

二年 栗田節子

夕暮の誰もいない浜に
私の熱い吐息を
感じながら
震える指で
そつと
砂の下に隠そう

三日月が 青白い光で
それをおおう

波がさゝやく
二人の間に秘密を持つこと
それは愛情の現われだと
いつか聞いたことがある

と き

三年 渡辺静枝

だが私はためらつた
火は消えそぞに泣いていた
まよつてはならない

消してしまえ

消してしまえばいいんだ

思いきり水をぶっかけた
私はへなへなに疲れちまつた
なんだか目の前が暗くなつたようだ

○

けれど日がたつにしたがつて
火は燃えつきていないので気がついた
おかしい
たしかに最後の輝きが身をよじまげて
死んだのを私はみとけたのだが

ぶすぶすいぶつているのは
あれはたしかにこの前の火だ

今は楽しげにハミングしてるけど
もうじきうなり出すにちがいない
そうすると私は又暗闇にかくれるのか？

いやだ！

(その一)

こそばゆい風が
わたしの頬を
愛抱するのか
思いをあまして

高鳴り歌う

女なめが
はずかしげに微笑むから
堅い木の芽も目を覚す

感じやすい
すぐ涙ぐむ女のあなたよ

わたしは
女の哀れさに弱い

ひとつぶひとつぶのその王が
雪を消し霜を溶かし

ひとへに春になろうと急がせた

安らかな
大きな葉をひろげ

わたしは
早く女わをあおぎむかえてみたい

浜にたつと
泡たつ波のおもてに

ぱつかりと
女の姿が写り

遠く高い
尊嚴な雲は

優しいまどろみを贈る

まぶたに浮かぶ女わよ

あなた自身さえ気づかずにつくる
あの笑顔の幸福さ

わたしは全ての中に
女の素晴しさを受け入れたい

わたしの初戀はじめこいわたしの初戀
女わよ女わよ

その微笑み
その涙

わたしにむかってみせておくれ

(その二)

「村松梢風さんの女經」

感激よ

何處がつて

最初のページの真中まんなかごろまで
あとは斜め読み

意味わかんないの。」

夕やみ近い多摩川べりで

彼女は小石をけりながら言う

「俺はそんなこと知るもんか

毎日感激ばかりしているこいつ」

俺は足もとの小石をつかみ
力いっぱい投げつけた。

小石は水面を二度飛んで消えた
真赤な太陽がゆらゆらゆれた
驚いた様に俺を見た彼女
「馬鹿みたい。

何してるので。」

彼女の顔が夕日に映えた

「歩こうよ。」
俺は遮二無二肩をおしてやつて
自分自ら歩きだす

とんだところに飛びだした英語
通知表について評価の2
彼女は忘れているのだろう
思わず微笑がわいてでた

(その三)

河沿いの酒場で
波々とつがれた杯に
ひんやりと凍えきつた
口唇を押しつける

今宵

つと投げし目もとに
夜の潮の中で

萎えたる小草
荒んで喘えぐ

愛も、又歌も消えた男
誰の手によつたのか

白絹のカーテンが
鈍い光の中で不似合に哀しくゆれる
撃を破つた男の終着駅か

花の匂いを焦がす時
男の恋は、はげしく燃えた
が、杯を片手に
おくれ毛をからませる様に
かきあげるこの男には
もう

そんなかげは微塵もない

照りかがやいた日のまばゆさ
カーテンの白さから
その日の思い出を

打ち消すかの様に
大きくかぶりを振り

又一杯の酒をあける男
何気なく開かれた

ジャンバーの衿もとの
刺された赤い花、バラか
小さいが
するどく男の思い出を語る
かつてこのジャンバーに
そつと針を刺したのは
愛しい人であつたろう

肴を口に運んだ男の目に
思いなしか
思い出のその日が見られた

雪の降り続いた日の午後
この坂道はいっぱいに降り積つた
母のとめるのも聽かず
古いソリを引き出し
雪ぬれになつて
たわむれた坂道……

それからまもなく
この土地を離れて暮し
ここ的生活を何もかも忘れてしまつた
この坂道でさえも……

六年の長い年月が去つた

そして

すつかり舗装された坂道が……

かよいなれた坂道は
きれいに刈込まれた樹々の間から
冬の柔らかな日ざしを映し
路上の霜は鋭く足をさす

赤土のでこぼこした坂道を
高く赤土を載せた霜柱をけつて
鋭く足を突く霜の冷たさを怨みながら
大きなランドセルを
カタコトならして
駆け下りた日々……

坂道

二年 加川康子

びよいなれた坂道に

裸樹の影は長くのび

梢のとりのしらべも高くひびき

柔かい冬のひざしは
裸樹のこずえより

かよいなれたこの坂道に

映る。

道側の乾いた土を

少しばかり持ち上げて
枯草の根に白く光る霜柱

再びこの坂道を通うなどと
思わなかつたあの幼き頃

野 分

二年 矢 田 秀 子

私の真紅な心臓だけが残っていた
でも、私の心は前よりも
いつそう元気になった

遠い／＼、北国から
木枯をまき散らす野分が

今年もやつて來た

何もかも、

おまえは持つて行つてしまう

おまえは、北風に瘦せ木の着物まで

剥ぎとらせてしまった。

何が可笑しいのか

冷たい声で笑っている！

アーッ、痛い!!

私の目や耳まで

おまえは吹き飛ばしてしまった

私の手も足もなくなつていた

だから、私は何も見えない

何も聞こえない！

私は、今、
そんなものは見たくない

もっと／＼自由な、広い、大きな、美しい
私の作った世界に行きたい

そうだ！

私の熱い心臓だけ、
暖い、きれいな布でつゝんで
出発しよう！

私は、
心臓だけしかないから、
とっても軽い！

だから、毎日、何も食べないでも

春のおとずれ

一年 岩 崎 綾 子

ほら聞こえるでしょう

春風と共にやつてくる春の足音が
雪どけの泥水が谷川にあふれ
岩にぶつかりしづきをあげ
ドドッドドッ！とさかまき
怒りくるつて流れ下るあの音が

ほら見えるでしょう

春風と共にやつてくる春の姿が
黒土が現われた田の堤にとて
うす緑色のやわらかそうな
フキトーウが頭を出し
木々の若芽が日に日に
ふくらみを増して行くその様子が

空には雲が流れ
地上のすべてのものは活気に満ち
冬から解放された大自然は

まるで生きもののように活動を始める

詩日記

三年 畠中徳明

今日も又 すき透りたる星空を
横目でにらみ 横になる
勝山駅の屋根の下

四月十九日

トランベットのレッスンの
前に進まぬわが足を
へし折りて見たくなり

五月三十日

師の吹く音色に
耳かたむけて
わが愛器をばかきいだく

八月十六・十八日

はるばると唯一人ペタルふみ
外房総のパノラマを
愛機に收め 又ペタルふむ
昨日は 星のきれいな空を見て
星の天をば屋根として
横になり思う 己を

初恋??

試験地獄といわれるこの頃
わすれられぬはあの人
目のぱつちりとした背の高き
きのうの夢にい出来た
女神のように
貴品ある瞳

九月二十九日

初恋とは 何?
幼きにいだきし思慕
大きになりて味わいし
胸のいたみ

小学の頃
片時も忘れず胸に描きし

あの娘の姿
今
消すことも出来ぬ
あの女の横顔

教室にはいりてすぐに
目にはいるは
色白きしたる彼女の姿
体操のフォークダンスの
かの時に
目移りゆくかの手足

十月二十日
最後ノ試験ノ
カンテツノ
眠ケマナコニ
サイレンノ
音ヲキク
真夜中ノ彼方ニ。

十月二十二日

昨日はテツヤでもしたかと
聞きたくも……
船こぐ姿うしろより見て
真夜中ノ彼方ニ。

十月二十三日
すなおなるわが心をば
ふたとりてあの人には
見せたりなりし、この日頃

十月三十一日

十八になりたる朝あした
こともなくうれしかりき
貴女にも知らしたりしが。

十一月四日

この俺に
この俺にささやく母の声
地の間よりい出て来て
空の彼方よりい出て来て
俺に
俺にささやく母の声

十二月三十一日

電話かけたに 話も出来ず
ぱつり／＼と話す
のどまできたる

手に持ちし言葉をば
口にい出さず

やがて今年を顧みて
思いい出して

口にして話してみたが
頭に作りし詞をば

ためいきをもて

打ち流す
名のりをあげて 話してみたに
のどぶるわして口にならず

心をこめて 新年を祈る
おのがうざきゆえ

うす暗き喫茶店の中

そう音を耳にして
かえりみし今年を

喫茶店の中

トランペットの調べ

皆殺しの歌を耳にして
胸にもたげし何かをば覚ゆ
煙の誘惑に何回か
まよわれし 今の我 でも
男なら 自らたてし計とば
守るは男なり

一年間

一年落合嘉美

— 16 —

私は自ら門をたたきました

目を輝やかせ
希望に満ち
心のどつかで
不安を持ち

バッヂの輝やく
胸を意味もなくはり

大手をふり
門を入りました

背後では

桜の花が微笑んでいました

やがて

葉桜となり

入道雲がわき上り

チンチロリンと

鈴虫が鳴き

野も山も雪となり

小川も山も雪となり

冬と変りました

三角形のお化けや

横文字の鬼に

毎日うんうん

うなされて

追いかけ回わされた

あげくの果ては

私の嫌いな通知表

その前に

教師の前に

親の前に頭を垂れました

教室の皆が

見ている、監視している
私を見張つてゐる

横を向くことも

やがて雪が消え

山の向こうから

芽のふき出る音が聞え

地上のあらゆるものがあ

活氣よく動き出す

夢の春となるでしよう

一年は繰り返されるのです

私は
希望に胸を

ふくらませて
新しいものを

求めるでしょう

しかし、私は

不安という二字は

持ちません

自信という二字を

持つのです

再び

母の国

母の国

一年　甘木貞子

山はひつそりと静まっていた
眼下にふかんする村の中央を
ひとすじの水の流れが
しいでという川の名で呼ばれ
その山側に近い河岸は、田んぼ
そして向側に小さな家並が
川にそったひとすじの道とともに

それぞれの日々のたつきを嘗んでいた
その中の一軒のぼろ屋に詩の世界はあつた
やさしく誇り高き祖父を父とし
かしこくなげな祖母を母としたまいし
我が母の幼なき日々は
詩にあけ本にくれ
そして自然の風物に囲まれ
又となき幸多き日々なりと
その事を我に語り給う
母君のみひとみの輝きよ！

今一人山に登りて
ふと母上の国を思う
眼下に見下す谷と
そして一すじの川の流れ

ああ、我が母上のふるさとよ！



夜の霧

一年　山口正枝

夜霧の
小さな一粒が
きらりと輝いて消えました。
優しい灰色の霧でさえ
とり残された様に、
悲しみに
かけつた瞳を、
藍色の空へ向けた時
淡い霧の中を
点々と

また、き輝く町の灯が、
静かな風にゆられていていたのが、
見えました。
夜霧の
小さな一粒が
闇の中にとけた様に、
私の小さな悲しみが
藍色の夜空に消えました。

死を見つめて

二年　清水珠美

静寂は
暖か味を知らないコンクリートの廊下に
純白は
淡い石鹼の香りを残すベッドのシーツに
清楚は
無造作に生けられた花瓶のコスモスに
自然是俗界を離れたこの場所にも
公平に時の流れをもたらした

私はこの建物に不似合な
小鳥のさえずりを聞いて目をひらいた
——自分は生きているのだろうか？
一種の不安と恐怖におのゝきながら
一段と細く蒼くなつた腕をみつめ
そつと脈にさわってみるのが
毎朝の習慣となつていた
不思議な鼓動は若い命をよびもどす
生きている証拠！
死んではいない！

この生命の息吹をかんじて
人間としての体の機能は
各々の役目を果し始める

心臓は痛みを訴えた

胃は食物を求めた

涙線は渴れきつてはいなかつた

太陽が南中する頃になると
死を待つだけの私は

苦しさからのがれるために
いろ／＼の策をこうじてみる

私の枕元には

死刑囚の手記を連ねた分厚い本があつた

私はこれに求めた

私と同じに、

不可解な死にのぞむ彼らが、

自分よりもっと苦しんでいるのを知つて
ひそかに

心のやすらぎを覚えようと

死刑囚の手記を連ねた分厚い本があつた

私はこれに求めた

私と同じに、

「コンナジリ／＼シタ日ヲ続ケルヨリハ早ク殺サレタ方ガマシダ：

死ニ直面シタ今日ニ興味ノアルモノハ酒デモ飲ンデ、メチャメチャ

ニ暴レ廻リ永久ニ前後不覚ノママコノ世カラ去ツテシマイタイ……

深マッタ秋ノ空ガ私ニ生キタイトイウ欲望ヲサソイカケル……アノ

日ノ光ノ降ル中デ、俗人ノ空氣ニフレ、靴ヲ履イデ思イ切り歩イテ
ミタイ……」

こんな言葉が目に飛びこんで来る

私と同じ苦しみではないか

刻々と残酷にきざむ時は

のこりすぐない命を容赦なくすりへらす

私はこの流れをとめようとあせつてゐる

死刑囚の様におびえながら

太陽が西に没すると

私の精神や呼吸はすり切れそくなつて
時をきざむ音との調和をくずした

鋭いときすまされた月が

神秘的なムードで苦しみをつつんでくれる

私はこの大自然の業に驚かされながら

母のふところにいたかれた様な

なつかしい気持になつて目をとじる

明日を知らない命に

かすかな戦慄をおぼえながら

静まりかえった夜の中に身を投じた

青白い月はいよいよ冴え

部屋のすみすみまで照らしかした

窓辺のコスモスが秋風に吹かれながら

はた／＼となつていた

エリザと共に

二年 竹谷 ヒロ子

僕のエリザは

時々、授業中に

あの大きな瞳と

歯並びのよい唇もとに笑みをうかべて

教科書の陰から

僕の方を、ちらつと見では

又、すましてノートをとる

ああ、可愛らしいエリザ！

僕のエリザは

クリスマスの日に

美しく包装された小箱を

プレゼントしてくれたのだ

リボンを解いて箱を開く……

ああ、中にはエリザの真心が入つていて

茶色の手編みのマフラーが……

ああ、世界中で一番優しいエリザ！

僕のエリザは

試験が近づくと

徹夜で勉強をする

そして試験日には、はれはつたい目で

教室に入つてくる

ああ、頑張り屋のエリザ！

僕のエリザは

武藏野が好きだという

そして昨日

僕とエリザは二人きりで

武藏野を歩いた

深大寺の前を……

修道院のそばを……

草むらに腰をおろし

何も云わず

ただじつと小鳥の啼くのを聞いていた

長いエリザの髪と

僕の中と云ふ

幼ナ児

二年森本みつ

"大きなトラックがどうしたのよ"

"来タノ。ソシタラ大ガネ、

ユコチャヤンノ所ヘキテネ、ウフフ……"

渡レナクツテ

なにがおかしいやら、この調子では話がいつ終るのかしら

"ネエ、オネエチャマ!"

今日ネ、甲州街道ヲ

渡ロウトシタラネ、

スゴク、オモシロカッタノヨ"

"何が"

"沢山、バスヤトラックガ通ルデシヨ。

大ガネ、渡ロウトシテネ、エート"

"早く話しなさいよ"

"エートネ、チヨコチヨコツテ

出タラ思ツタラ

引キカエシテネ、ウフフ……"

"そしてどうしたの?"

"引キ返シタラ思ツタラ

又渡ロウトシテネ、ウフフ……"

スゴクオモシロカッタノ。

チヨコチヨコツテ出タラ、

ソラ、オネエチャマモ

見タコトアルデシヨ、

大キナトラックガネ……"

"エート思ツタラ

引キ返シタラ思ツタラ

又渡ロウトシテネ、

ソラ、オネエチャマモ

見タコトアルデシヨ、

大キナトラックガネ……"

"梨園に行きたいわね"

"ユコチャヤン、知ツテルナ"

"何が?"

"ナシエンへ行ク道"

"どう行くの?"

"京王線ニ乗ツテネ、

遊園地ノアル所デオリテネ、

バスニ乗ルノ。"

"バスに乗るのはわかるけど

どこ行きのバス?"

"エートネ……。

ホラ、アソコ行キノ、バスヨ"

苦しい言訳。

"エートネ……。

ホラ、アソコ行キノ、バスヨ"

苦しい言訳。

"オネエチャマ。

ユコチャヤンネ。

ドウシテ貯金シテルカ 知ツテル?"

"いや"

"ドウシテ"

"遊びたくないから"

"ドウシテ遊びタクナイノ"

"うるさいわね。

少し静かにして"

"ツマンナイ……"

"オネエチャマ、

コレドウヤルノ"

"こうやつてね、曲げるの"

"チガウワヨ"

"いいのよこれで"

"チガウモノ、

先生ガ、コウイツタシダモノ"

"それなら聞かなければいいのに。"

"かつてにしなさい"

"ダツテ先生ガ云ツタシダモノ。"

"ママ! オネエチャマツタラ

クチバシ トンガラカシテ

怒ルンデスヨ"

"オネエチャマ、遊ンデ。"

"オネエチャマ、遊ンデ。"

"フウン。ア、ソウカ"

ニコチャヤン、ワカッタ。

アレネ、ホラ、アノ時使ウノネ"

"いつたい何がわかつたのかしら

隨想

孤独と私

二年 桑村 詔雄

師走三十日、私はスキーを肩に夜の新宿をゆっくりとかみしめながら歩いていた。田舎を持たないせいか私には何故かこの街が故郷の様な懐しさを持つていて、何時も歩く度に新しい郷愁が感じられ、この街を忘れる事が出来ないのである。時の流れにつれ街の姿は変っていくが、その中を流れる雰囲気だけは変る事なく同じ響を持ち続けている。それは私が感じる郷愁とは又趣を異にする。それでいてネオンの華やかさや、ジャズの甘いしらべとも違うことなくベースの漂う独特の淋しさを持つものなのである。その味を一番知っているのは私でもなく、又忙がしく流れて行く人々でもない。それは冷たい風の吹き抜ける街角で起きる事なく風に合わせ、おどり狂っている紙屑に外ならない。その舞はどこにもやり場のない、そして救いのないそれを象徴しているのである。まるでそれが宿命でもあるかの様に舞っているのである。あるいは、それが現実に対する精一杯のレジスタンスなのかもしれない。でも誰もふり返っては見ないし、しょせんは大きな波にのまれる前のあがきにしかすぎないのである。やがてこの街はそれをのみこんでいく。しかし

姿はなかった。同じ目がみつめているのに、感じるのは現実など

という美名にかくれた、虚栄と偽善だけが押し合いへし合いでいる街なのである。記憶のどの片隅を捜してみても、かつてあれ程までに讃美した街の孤独は、かけらも残っていないのである。私は我れと我が目を疑い、そしてなじつた。が、しょせん眞実をゆがめる事は出来なかつた。焦躁の後からはたまらない空虚な氣持が迫ってきた。そして次の瞬間むしょうに悲しくなり、一人でに目頭のあつくなるのをどうする事も出来なかつた。街に吹いている風に変りはなかつたが、以前の様に話しかけては来なかつた。人々が無言のあがきの内に作り上げた現実なるものは、砂上の楼閣にすぎなかつたのである。ガラ／＼と音をたてゝくずれ落ちるものも道理なのであつた。とはいえ何がこんなに私の心をそして目を変えてしまつたのだろうか。いくら考へてもわからなかつた。ふと気がついて肩に重たくかかるスキーを思い出した時、やつとこの謎は解けたのだつた。自然、そうあの素晴らしい大自然ではなかつたかと。然り、それでなくて何がこんな事を出来ようか。……

そこは清純な白だけの世界だつた。どこを見回しても造られた物など一つもない。見方を変れば、これほど単純なものはない、といつていゝ位に雪だけしかないのである。（その中でそれが含まれていないとはいえないが）本当に楽しむ、といふ養の為ではもちろんなく、スキーを楽しむ為なのである。（その中でそれが含まれていないとはいえないが）本当に楽しむ、といふ言い方がピッタリ來るのである。何故なら転び方から始まり転び方に終るといった幼稚な知識しか持ちあわせない者がやるのであるから、傍からみれば、それは雪にじやれているといった程度にしかう

つらないであろうからである。こんな事があつた。

勇んで斜面を滑り出した。しかし初めての試みであるから止め方など知らない。勢いのついているスキーが自然停止して呉ようもなから最後は身をもって制し、雪の上に記念すべき足跡ならぬ尻もちをついてしまつた。ところが問題はそれだけではなかつた。斜面の登り方も知らないのである。僅か百メートル足らずを悪戦苦闘の末登りおえた時には、皆昼食を終つてしまつていて。万事がこんな調子で進み、とてもスキー云々等といえた柄ではないのである。従つてスキーとその団りにある雪しか眼中になかった訳である。でも、とても詩情など湧いてくる状態ではなかつたので、この答に疑問を持つたのであるが、かえつて難念なしに雪とたわむれた事が、單純な中にひそんでいた所の多くの眞実を知らず／＼に吸収していくのではないかと思えば納得がいくのである。失敗といえばこんな事もあった。私と同じ靴を持っていた人がいたが、いつのまにかストーブで渴かしている内に、とりかわつてしまい、翌日は各々人の靴をはいて滑つてしまつたのである。それだけなら良かつたのであるが、大きさが違う為靴づれる副産物を頂だいしてしまつた。それでも尚氣がつかなかつたのには後で大笑いしてしまつた。

楽しい時の時間の経過は速いもので三日間など「アッ」という間であつた。でもその内容は実に多彩である。初めて見た雪国。勉強といえどこれ程はやらないであろうと思われる位熱中してしまつた。雪遊び（あえてこう呼ぶのは、あながち謙遜ばかりでないという事なのである）、少々度の過ぎたいたずら、こんな所でもあるラツシ

て何もなかつたかの様に平氣な顔をしてすましこんでいる。しかしそれだけ終つたのでは決してなかつた。次の街角ではどこから吹かれて来たのか、落葉が足の下に踏みにじられた人の世の哀歎を歌つてゐるのである。ある時には生き／＼と人の心に歎びを呼びかけ、又ある時には心の淋しさを共に語ろうと肩をたゞくのである。しかし現実はあくまで無情であった。その声に耳をかす者すらいないし、まして振り返つて見る者など誰もいなかつた。誰が哀愁を感じない者があらうか。否、否。心の苦しみと切なさはそんなになまやさしいものではないはずである。むしろ言語に絶するものがいるのではないか。では、何故紙屑の舞に目を止め、落ち葉の唄に耳をかし共に悩みを語ろうとしないのだろうか。私はいつもこんな事を自問自答しながらこの街を歩いたのである。するといつもそばを通り抜けの風が、そつと私の耳にささやいていたものだつた。「これが現実なのです。そして誰もがその中で満足して生活していかなくてはならないのです。それでいいんですよ。この街をごらんなさい。ほら、ちつともなげいてなんかないでしょ。むしろそれを楽しんでいるのかもしませんよ。」と、私はそれに同意するより仕方なかつた。そして、いつしかこんな街に魅されてしまい、このよそ／＼しい街の孤独の讀美者となつていた。もはや、そこには批判の遠くおよばぬ現実だけが平氣な顔をして歩いていた孤独しかなかつた。押し流され、岸にたどりつく術もなく盲目的についていくだけだった。そしていつも私はこの街をこよなく愛しつゝ孤独にひとりながら歩いていた。ところが、今日の新宿はどこにもそんな

ニ（バスを待つ人の列。乗る時のあの表情と押し合いへし合いは、東京の朝のそれとなんら変りない）、社会的一般常識の向上（実に有意義？な話しを聞く事が出来るものである）。こうして上げいくときりがない程である。景色ではなんといても夜の情景が抜群であつた。そのスケールの大きさとすさまじいまでの迫力は、みていても身がひきしまる思いである。それに雪が少し散らついている所などは誰かさんではないが、「いつもおろかなり」である。これら全てが今の私が真実を見つけ出すことの出来た要因なのであつた。しかし解散した後も失敗だけはつきまとつていた。つまり池袋と新宿とを間違えてしまい、迎年のあいさつまでかわしておりようとして、ふと目に入った駅名、周りでは皆苦笑している。バツが悪くて仕方なかつた。

失敗とその又失敗がもたらした結果は予想外に大きかつた。つまり物に対する見方を変え、小さいそしてつまらない物の中からその真価を引き出す力を得たのである。結果として私は自分の愛した孤独を失なつてしまつた。でも後悔はしていない。又孤独にひとりたいた時には新宿で作られたものではないそれを搜し、又より高いものを求めたい時は、冬山へいつて雪をながめるであろう。そして自分の納得がいくまでやまないであろう努力をしつづけるに違いない。それがいつの日終るのか誰も知らない。でも、きっと新宿には私があこがれている孤独があると信じている。あの自然にも負けない素晴しいそれが、自然の中にみつけた孤独の様に。

たゞすむ吾に忍びよる

淋しき影 そは何ぞ

ネオンの夢かまた月か
はたまた並木のトレモロか
どこかむなしの影は
何を吾に語るのか
何を吾にうつたうか
一人はるかにみつめれば
ほのかにみゆる人影も
どこか淋しい街の角

流れはせわし人の群

空しい響 そはいかに

落葉のなげきも喜びも

風に去りたる闇の中。

えがきし夢も露と消え

あとはおごれる孤独のみ

たれか歌わんその唄を

たれかたゞえんその姿

いつしか街は消え去りて

想は駆ける過ぎし日の

自然の姿白き界

山が喜び歌いつゝ

日ざしに映じ舞る時

吾の心も又おどり

かれろでは、どうにもならないのも無理からぬところかもしけない。

我家の男性

一年 多々良 洋 子

我家において、マスコットといえば、我弟、健である。けちで短気で甘えんぼうというのが、末っ子の男の子の相場であろう。家の中も、御多分にもれず、すばりその通りである。そんな事を言うと、あさの一つも作られるかもしれない。だがなか／＼良い点もある。姉想い、これは何といつても見逃せない弟の長所であろう。これは姉の私の飼育のたまものである。ちょっと、その例をお話しすることにしよう。ある晴た日に弟とデパートへでかけた。キップを買おうと、財布を出すと弟がダダダダダッと走つて「はいお姉さん」と切符を渡してくれる。さて電車に乗ると席を見つけて「座つたら」と問いかける。私は座るのは余り好きではないので、多少迷惑ではあるが、やはり心配したり、親切にしてくれるというのはうれしいものである。弟は男であるからかもしれない。電車を降り、歩道を歩くと、細心の注意を払つて、姉の私を守つてくれる。弟は小学生六年私は高一、高校生である私が小学生の弟に手を引いてもらつたり、車道側を歩いてもらつたり、何かちょっと買物に行くのでも「僕も一緒に行こうか。」とすぐにサンダルをつっかけて来てくれる。まったく何と素晴らしい女性想いの男性であろう、こんな男

起承転結とでもいうのであろう、激しい変化ではあつた。しかしながらのしみもあるし、そして救いが必ず有るという事もはげみとなるに違いない。たゞ欲をいうなら、かつていいでいるスキーがもう少し意のまゝになつたらと思うのであるが、なにしろ長い相手にはま

性を作り上げたのは誰であろう。他ならぬこの私なのである。弟は読書が大変好きな様である、といつても教科書は、もちろん例外ではあるが、やたらに本をひもとく、といつてもどうも、どの本も結ぶところまでは、いっていい様である。弟の食欲は今まさに最高期に達しているのではないかと思う。いや胃拡張にでもなっているのではあるまいか、どうも心配な事である。おかずが何であろうと、目に入るか入らない内に、食べおえてしまう。御飯のかき込み方が、又早い、私の一膳に対し二膳の割合である。バクバクバクとやはりスピード時代のせいであろうか？段々丈夫になってきたせいかどうか、このごろ派手に醤油をかけるようになった。おさしみ等も醤油にさしみを入れて食べるのである。残りの醤油は一息に呑んでしまふ、まるで豚の様である。一通り食事が済んでしまつて二三十分たつともそくと動き出して、パンを食べ始める。実に消化の早いマンモス・スタイルの胃である。弟は父に似てか、体操がとても下手である。以前には通知票に2などという点がのさばつていた。だが、このごろは食べるに応じて、体もたくましく、背も伸びて、体操もとても上手になつたようである。弟の趣味はといえば先に述べたように読書、そして落語であろう。この前もクリスマス会で落語をやつたそうである。当時は、口癖の様に「えー」とか「熊さん八さん」などという言葉を発していた。寝言にまでも「御隠居さん」等という落語用語をちよい／＼言っていた。先日その落語をきいてみたが、中々面白かった。私は声をたてて笑うのは余り好きではないので別に落語を聞いても、笑わなかつたが、弟も別段文句も言わず「どうだった」と指導を仰いだ。私は理窟っぽい方なのであち

あろう。滑稽きわまりない有様である。猫も魚の代りにされたのでは、ニヤンともいえないであらう。そんな惨いことをしておきながら夜になると途端に憶病になる。やはり良心が咎めるからかもしれない。御手洗いに行くのでさえも凄く恐ろしいらしい、いつも大声で軍歌を歌つてドタバタと床を踏みならして行く頼りのない男性である。いつの日か、身心共に逞しくなる日もやってこよう。一日も早くその日がやってくるよう願うのである。誰しもの願いと同じ様に。

次に我家のもう一人の男性、父について書くことにしよう。我が父であり、母の夫である男性が我家の主人である。我家の主人である父は短気この上もなくそして多少わからずやで、不器用でそのうえ、と統けたいのではあるがどうも私の身と家庭の平和が危ないのではないかと私は思うのである。その短気が祟つてか、私が物心ついでここらで短所はとどめることにする。以上のべた父の短所の点で一般男性に共通するものは短気であろう。私の見る男性において誰しもがその様である。これはこの社会の有り方に問題があるのではないかと私は思うのである。その短気が祟つてか、私が物心ついでからでも母と数百回の口論をしたようと思う。しかし、その口論の勇しさの為か、五十を越えた父は今もつて病気一つせず私達子供のスポーツ等の相手をしてくれる。実に幸福なことだ。父は少し変わったところがある、というのは、日曜には、わざ／＼十二円の牛乳を飲みに新宿まで出張する。全くごくろうなことだ。父の一週に一度の楽しみはどうも映画であるらしい。これはやゝ中毒的現象を示していると思う。嵐にならうが、大雪にならうが必ず映画館まで足を運ぶ。もう決して代えることのできない定義の様な物であろう。

こちと短所を指摘したがいやな顔もせずに、尋常に聞いていた。弟は私と違つて神經質ではなさそうである。洋服等もこれを着なさいと出してあげればそれを着て登校するといった具合である。宿題も朝になって「あつ、きのう宿題があつたんだつけ、学校行つてやう」と「うつ」というような有様で、いたつて呑氣である。私に似てか、料理も大変好きな様である。何かそこいらにある物をかきませて、得体の知れない物を作り皆なにお裾わけをしてくれる。その時の得意顔のほほえましさは、寝ている赤ちゃんが目覚めてニコッと笑つた時の様な、汚れのない神々しさがある、まずくて食べられない様な料理もあるが、一応警めておくと一日中御氣嫌がいい。やはりまだ本当の子供なのであらうか。いや大人にもこんな面はおおいにあるが。子供らしいといえば遊びにおいては多分にそれが言えると思う。いやはや、毎日毎日飽きもせずに、大砲をいじくりまわしている。ダダダダダーダー、ガシャ、ビューンという様な、擬音混りで、一人で飽きもせずに何時間でも遊んでいる。将来は、自衛隊員になりたい等と、つい最近まではいっていた。この年令の男の子は皆そんなことを考えているのだろうか。何か昔に返つていくようで恐ろしい氣がする。マッチ等置いておくといつのまにか箱だけになつてゐる。マッチ等を使って何をするかと思っていると軸の部分だけをとつて一つべんに火をつけてそのめら／＼と燃える火を見て面白がつてゐる。これはやはり戦争映画のせいではないかと心配している。猫等を追いまわすのも好きな様である。棒に食物をつけたひもを結び影にかくれて猫がぱくつくのを待つてゐる。ぱくついたら猫をつり下げ様という思考である。まあいわば陸で魚釣といったところで

父は良く私や弟の面倒を見ててくれる。例えは私が数学の本を開いていると「ほうーどれ／＼やつてているかどうだ解るか解らないだらう教えてやろう。」てな具合でニヨニヨ顔でやつてくる。ここまでは良きパパぶりである。疲れて殺人の電車に乗つてやつと家にたどりついて本当ならばぶつ／＼さ／＼文句を言うのが一般の男性の相場であろう。だが家の父はそうではない。いつも何か仕事をしていないと気が済まない性質なのであらう。これにはつくづく感心させられる。私がたまに机に向つていると懸命に勉強を教えてくれる。がその懸命が私にとつては問題なのである。何しろその理窟っぽさは他人にはないと思うのである。私の頭の良さにおいては長時間をかけて、じっくり教えないとだめなのだろうが實に悲しきことである。一つの問題を何度も／＼あー、全く飽き飽きしてしまう。何たることであろう。こんな子供を持つた父もかわいそうである。そしていや／＼ながら教えないとだめなのだろうが實に悲しきことである。一つの問題を何度も／＼あー、全く飽き飽きしてしまう。何たることであろう。こんな子供を持つた父もかわいそうである。そしていや／＼ながら教えないとだめなのだろうが實に悲しきことである。この世は何とがゆいものである。父はとても良くできたこともある。これは世の男性のおおいに見習うべき点でもある。御飯等頗まなくとも焚いてくれる。そして後かたづけも、茶碗洗いも恩着せがましいところもなく自發的にやつてくれる。何と良き父であろうそんな家庭的な良い面を持っている筈の父でありながらその反面實に父としての役を取つて上げたくなるようなところもある。それは五十という年になつても今だに自分の家を持てないということである。これは一家の主人としては何はさておいても、真剣に考えなければならぬ重要な事である筈だが良くその話になると、山を一つ買いしめて大きな池を作つて、などとリアルとはおよそ見当違ひの夢を描いてさも樂

しそうに語るのである。やはり年のせいであるうか、子供時代に住み慣れし故郷でも頭に浮かべているのであらうか。こんな訳で父はついに、おんぼろの借家に不便だ不便だと言いたいながら二十年を過ごして来てしまつたのである。何とばかり／＼しいことではないか、その半分の値段で家を新築できたであらうに。お金の使い方は実にむづかしいものである。父は九時以降は決して食物を口にしないといふのは歯をとても大切にしているからだ。タバコもお酒もめったに飲むことはない。副食物で好きなのはビーナッツだけらしい。これは毎日大量に食べる。お腹を損じやしないかと冷や冷やものである。だが一向に平氣らしい。何か少し食べ過ぎるとすぐお腹を壊すくせにビーナッツだけは例外らしい。何ものにも例外はあるというけれども実に不思議な事だと思う。先日父の勤務先の本を見たら誰

々の趣味という欄があつた。父は読書と文を書くことと写真と書いてあつた。全く読書はいつ読んだかと思う程、多くの本を乱読している。そして弟が話を強請ると、あちこちの本を繋ぎ合せた様な変てこな何の得るところもない様な話をあげている。あんな話は他人の耳には入れたくないものだ。我が父の常識を疑がわれるからだ。弟は、そんな話に熱心に耳を傾けている。母はそれに一々文句をつけてはいる。一体父が話をしている時はどんな気持なのだろう。しかし話の内容はとにかくとして父の話振りは何かこう人を引きつける力がある様に思う。実に魅力的な声なのだ。私など話よりも声にうつとりとてしまうほうである。文章の方は私など読んでも中々理解しがたくどこが良いのやらさっぱり面白くも解りもしない。でも父自身も祖母もしきりに文を書く事について威張る。どう

くせにビーナッツだけは例外らしい。何ものにも例外はあるという

私のボーイフレンド

一年 鈴木美枝

で「テル」と名付けた。

テルの母親はハンドバッグを前足で持つて、後足で歩いたり、色々に芸をするそなうなので、負けずに色々教えたがチン／＼とお座り、おあづけ等ほんの少しあが覚えず甘つたれるくせをつけてしまつた。皆がテル、テルと大きさをするので食べるのも、つい／＼ぜいたくなり嫌いな物や、その日によつて食べたくない物の時は、どんな事をしても食べず、ソッポを向いて知らん顔をしてい

る。それがおもしろいと言つて又皆が大きさをするので増々お犬様になつてしまつた。肉類、牛乳、生キャラベツ、殊に甘いお菓子は大好物だった。私が落ち着いて座るか座らないうちに、抱いてもらおうと鼻をくつけてキスをしてくる。又お腹をかけてもらおうと背を下にしてねるので、かいてやると自分で眼をつむつて後足をチャツ／＼と動かす。實に気持良さそうなのである。わがままであつたが可愛い甘つたれのテルであつた。又テルは脱走の名人で家中のものを困らせた。ほんの少し、すき間があつても鼻で開けて脱走してしまう。なかなか早くつかまらないので、脱走されない爲に全神経を使つた。私達の顔をみると立ち止まつてゐるが、一定の間隔をあけて又逃げてしまう。全くにくらしいほど甘つたれであつたテル。こんなこともありましたね。私がまだ寝ている所へ来て私の顔をなめたので、フトンを持ち上げてやつたら私の腕を枕にして顔だけ出して、一緒に仲良く寝てたら皆は、貴方が又脱走したのかと思つて一生懸命さがしてましたね。貴方がいたので一安心していたら、おねしょをしてしまつたテル。二階へ一人で上つたり降りたりする事をやつと覚えて、私と一緒に追いかけっこが出来るよ

うになつたテル。貴方がジステンパーにかかる時は、お医者さんがくらしかつた。あんな高い外国製の注射を毎月して、もう今月で終りだというのに。

家中の者はもちろん、友人も、私のボーイフレンドであつた貴方の死を本当に悲しんでくれた。もうじき姉が、又貴方の妹か弟があたる人をもらつてきてくれるという。私は貴方の妹か弟を又「テル」と名付けるつもりである。

演 出 記

二年 米屋洋一郎

夏休みが始まる前に私達二年C組では秋の文化祭に劇を演ずることになつた。脚本の選定には私と他の四人で五人がすることになりいろいろ／＼と選んだ結果「蟻部隊」「赤い陣馬織」「眞まの手こな」という三つの脚本がえらばれた。それをH・Rに計り議論の末ついて「蟻部隊」という劇を演ずることになりキャストもスタッフも決まり印刷もすんでその台本を各係に渡していよ／＼長い夏休みが始まつた。その期間中に各係やキャストの人も一生懸命練習したことを思う。それで私も安心してたが九月に入つて突然先生が「あの脚本はだめだ、むづかしすぎるよ。」といわれたので私はこれは困つたと思つたが速やかに新しい脚本を選ばなくてはならないと思い、その事をH・Rにかけると生徒の方は良かつたのであるが選定する五人の内二人が選定を拒んだ。理由は家庭の事情、運動の練習の

にもしゃくにさわつてしかたがない。もつと私のような低能児向きのでも書いてくれないことには父の文の良さ等永久に発見することはできないであろう。

以上長々と書き記してきた様に我家の男性には変つた点も幾つか見られるが、平凡な一男性にかわりはないのである。そのかわりのない点が私には幸福なのである。毎日同じ事をくり返すということは何の変哲もない事である。つまらないとも楽しいとも感じないのである。その感じないことこそ、幸福というものであるのである。我家の男性は、平凡であるがゆえに病気一つせず我家の最大の幸福を守つてくれるのである。

為といった。それで私も思ったがこれでは誰も同じだと思、思い留まつた。それで私達三人は何だか心細くなつたが六時頃までかゝつてやつと「おふくろ」「馬泥棒」の二つを選び。先生に翌日尋ねてみると「おふくろ」という方が良いといわれた。残りの日が少ない。のでその次の日の放課後Aさんにたのんで原紙を切つてもらつた。そして私が印刷してBさんたちがしてくれた。その脚本の二部余りが出来上つたのは八時近くであつた。次の週のH・Rで脚本を「おふくろ」に選んだといつたら反対する人がいなかつたので「あゝよかつた」と思った。その時のH・Rでキャストも決つた。確かにその日は九月二十一日だつたと思う。脚本も配布したところが二、三日たつても演出の人は依然としてキャストを集めそうにない。その間に私は常任委員に選ばれた。その役は出しやばりな雑役をする役で級をまとめて且つ又生徒を統一するのであると思つていたので演出の人尋ねたら、「僕は蠍部隊の時の演出でおふくろではちがうんだからやつてくれ」と言うのである。だが私がひまであらうはずはない。物理部にも体育祭準備委員会にも行かねばならないのである。むか／＼としてきたが今こゝでおこつてはと思いつの調子で彼の話しを聞いた。彼の話はひまな時行くからたのむといふのである。私は渋々承知せずにはいられなかつた。それで次の日の放課後キャストの方に残つてもらい台本の読み合せを始めた。キャストの中にはN・M君のように運動をしなくてはいけない人(対抗試合に出場の為)又華道部やその他の部に入っている人が大部分であつた。又何にも入つていなくても残つてくれない人など様々であり私も時々体育祭準備のためこられなかつた。読み合せも進んだが

気になるのは今の人のように運動の為くのが四時半から五時頃といふことである。私からたのんでも試合があるからとか運動をやつても良いという条件でやつてあるんだ等どうしようもない。先生にたのんでも、らちがあがらなかつた。時々他のクラス、クラブの劇の練習をみては溜息がでて見ていられないなかつた。又キャストの中にはYさんのように声の小さい人がいていくら大きな声を出そとしてもでない人等氣の毒で見てはいられなかつた。それで又その人の意向で他の人に変わつてもらうことになつた。その日は確か十月十七日であつたと思う。次々の日のH・Rでその話をしたらH・Rでも賛成しHさんにやつてもらうことになつた。その日の放課後Hさんのセリフを聞いたり一本調子で聞いてはいられなかつたが二、三日たつとだん／＼と上達するのが目に見えてきた。十一月に入つたら台本なしで立ちせいこをしようと思つていたところセリフのおぼえがわるかつたのでしようがないと思いつ台本をもたせて立ちせいこをやらせた。その頃十一月一日に行ははずであつた体育祭も六日になり又六日もだめで八日になつた。ところがグランピードヨン係四人も決つたが一向に計画がはかどつてゐるようになかつたので私も協力した。その為が帰るのが八時以前という日は十月以来一度もなかつた。当日が来た。だが私は睡くつ／＼又足がもつれるのであつたがいかなくてはと思つて行つたが二十分位後になつてしまつた。後できいたら参加したのは二十六人ということであつた。十

月の終り頃の事であるが生徒会長のY君が来てD君という先輩が劇を見てくれるというのであつた。ところが彼がきたのは三十一日の夕方であり彼は劇を見ながら演出の意向はどうなるのかとかそういう時の気持はどうなのかとか心理的に指導に当つてくれたので動作の方もいくらかはかどつた。ところが彼が来た日はその日と一日その後三回位しかきてくれなかつた。それで他の先輩が二回ほど見てくれた。又S先生も一回みてくれたがこれではまるで芝居以前だといつて、二Aの「シガマの嫁つ子」に勝てそうにないといわれたが先輩の内の一人であるHさんは「私はこのクラスを受持ちたかった。チームワークがとれているから」といった。それで気をよくしたのであるが肝賢のD君はうわさによればこのクラスはいやだ演劇部の方が良いと言つていたそうだ。だからきてくれないのであつたのだろうか、私にはいまだ分からぬ。だがみてくれるという気持だけで私は満足を感じた。又担任のN先生は二度だけみてくれて声が小さいとか、もつとお高くとかいつて一人のキャストを泣かしてしまつた。それほど緊張していたのである。又その日は九時近くまで残つた為、バスがなくなつてタクシーで帰る人まで、でてしまい私は困つてしまつた。又女子の方を早く帰したいと思うのであるが、先輩が一生懸命指導しているのでそんなことをいなかつた。

大道具、小道具の係の方は確かに三十日に決めておいたのであるが、仕事にとりかかつたのは十一月になつてからだと思う。先輩から演出は出しゃばらなくてはいかんといわれていたので、私は大道具や小道具の方まで心を配つた。ところがM君が大変熱心にやつてくれるので大道具の方は彼にまかせた。女子の方も大道具の方で大変が

んぱつてくれた。十二日の予行練習の時は背景というものが全然といつていい程單調であつたが劇の方は一応劇らしくなつた。しかし背景の単調さをその翌日の夜、十二時近くまで男子の五、六人の人が残つて仕上げ、それは最高の出来であつた。いよ／＼十四日。本番の日である。前日に於てはやはり「シガマの嫁つ子」が最高の評判であつたが私にはバックの貧弱さ、又入員の少ない事等が目立つた。その日我々は朝六時半頃までに来てセリフの練習をした。その時等はとんど遅刻したものはいなかつた。それで一応自信をつけた。ところが前もつて放送部の方にたのんでいた犬の鳴き声道具、小道具をそろえてくれた。その時はこれでこそ級の作品であると思つた。予鈴がなつた。胸がどき／＼してきました。ついに幕があがつた。ところが前もつて放送部の方にたのんでいた犬の鳴き声がなんだか変な風にきこえた。しかし舞台で劇が演ぜられるに従つて観客の目は舞台の上に引きつけられた。私はこれならもしかしたらという考へがでてきました。私は舞台の後にいたので、観客の態度で劇の評をみた。いよ／＼最後の場面のおふくろの決心を訴える場面が終るや否や場内のわれるような拍手が私の身に響いた。大成功である。その時私はこれなら二Aの劇に勝つたんじやないかという欲が起つた。先生方、友人達から大変よかつたという評を聞いた。又キャストの人に舞台で上がらなかつたかと尋ねたら、全然何でもなかつたといつた。かえつて私の方が上つて來たようだ。その日の最後の発表の段階に來た時、私に生徒会のI君が前に出て下さいといつた時、さては勝つたんだと喜び、となりの中西君と手をとりあつて喜んだ。いよいよ発表である。太田君のじれつたいような話しか

ら「演劇の部の最優秀賞は今日行いました二年C組の『おふくろ』です。といった瞬間、後の方で「ワアッ」という歎声が上った。我々の級の男子の多くの喜び声である。又私の気持は高校入試の合格発表をみた時以上の喜びであった。私は二年C組の代表という形で舞台の上に上がった。校長先生から「おめでとう」といわれながら賞状を渡され「ありがとうございました」とって受取った。何でも二Aの劇との審査の総合点が十点位しかかわらなかつたと後で見てうれしくて喜びの気持でいっぱいであつた。助力してくれた先輩、先生方にお礼をいって歩いた。あの時はもうお祝いの言葉をいわれても何もいわれないほど胸がいっぱいだつた。努力して良かったという氣持と級全員の一一致協力がこうしたんだという氣持であつた。そして明日も又大成功をするだろうと思ひながら筆を置く。

理想

一年 小柴 則子

将来私は地味な母親となつて子供と家庭の為に、精一杯の努力をしたい。
「地味な母親」……詳しく説明すると出しやばらずいつもコソコソと家庭の仕事、子供の仕事をしている。……そういう事を意味します。それと忘れてはならない事。いつも清潔なエプロンをして髪をキチンとすることです。そこから世界のどんな良い匂いの香水

りな男の子には心ゆくまでの話しあげます。女の子には得意のお料理を全部おしえてあげます。

「〇〇兄ちゃん、私が作った今日のお料理お母ちゃんのより上手でしよう」

「うん、でも少しショッピング等と云つていればもうその子の腕前は立派なもので。小さい頃の私はいつも虫歯になやまされていました。その時の理想は「女の歯医者さんになりたい」という実に都合の良いものでした。今思えばほんの一時の理想にすぎません。

しかし、私が現在心にえがいているこの理想!!これは絶対立ち消えになることはありません。なぜってこの理想を「実現してみたい」というのがさらにその上を行く理想なのですから。

大寒の夜の憂鬱

二年 中村一光

今年もはや一ヶ月。時間というものは、何故過ぎたら戻らないのだろうか。

ああ辛い。後二ヶ月もすれば、自分も三年になる筈だ。今の三年生の様子を見ていると、夏休み前述は楽しそうな顔をしていたのに、さすがに今頃になると学校を休む人は多いし、顔色は悪くなるし、なんだか影迫が薄くなつたように見える。二ヶ月後には自分も三年になり、やがてはあの様になるのかと思うと、全く胸が塞がる

にも絶対消されない母の匂いが生れるからです。

そして時々は私の母の様に和服を着ます。私は母親似なので母を知っている人は「若い頃のお母さんそつくりですね」と云うかもしれません。

中学時代、家庭科の統計に「将来あなたはどんな人間になりたいか」という題があつた。その問に対し私はこう答えました。

「北海道のような広いところ赤い屋根のがんじような家に住み、その家の主婦となりたい、そして一男一女がほしい。動物を飼う」と……はるかに成長した今になつてもこの理想は変つています。あの時は心底からそう思つていましたもの。

なぜ特別に広い所と強調したか……田舎で育つた方ならきっと分つていただけます。広々とした田舎で育つた私は東京の目まぐるしさが大きいです。たまに郊外に行つて得る事は田舎の土くさいにおいと、小さい頃の涙が出るほどなつかしい思い出ばかりなのです。すべて胸がしめつけられる様なほげしいノスタルジアです。

ですから自分の子供には田舎の良さを浴びるほど味わせ、その中から強くて野草のような性格を学び取らせたい。

それと大人になって人間の心をいつも豊かにする小さい頃の、かぎりない思い出の源である。「山の幸」「野の幸」そして「四季の移り變りの神秘」をたくさん与えたい。子供はその頃の思い出を何といって話してくれる事でしょう!!

その様にして私は子供達と友達である母になるのです。おしゃべ

る思ひがする。

小学生の頃は何かすごく地位の高い人になりたくて、天皇になれないのがとてもやしかつたが、中学に入つてからはそんな馬鹿げた考えは持たなくなつた。その頃は一生懸命勉強して東大に入り、大發明をして、ノーベル賞でももらつて、日本に大いに外貨をもたらそうと思っていた。ところが、それもいつの間にかどこかへ飛んで行つてしまい、高校に入れるかどうかが心配になつて来て、そんな余裕もなくなつた。

そうこうしているうちに、幸いにして高校には入れてもらつたが、一年の頃はまだ相当自信があつたし陽気な気持だった。ところが今は大学に入る事がさし当つての最大の望みなのだから、小学生の頃に比べ、随分望みが小さくなつたものである。今に石焼の親父位がせいぜいになるかもしれない。

僕位の年頃では、皆早く大人になりたい、そして酒も煙草もおおっぴらに飲めるようになりたいと思うらしい。ところが自分の場合は全くその逆で、少しでも年をとりたくないと思つてゐる。これも大学受験のせいか。それだけでもないらしい。何かこの位の年頃が一番良い様な気がする。然し浦島太郎でもないし、年はとらざるをえない。やがては大学を受験するのである。どこの大学でも入りさえすれば誰でも良い職に就けるというのなら良いのだけれども、このせちがらい世の中ではとてもそんな事は考えられない。松下幸之助とか、吉川英治は学歴が云々、よく言われるが、あんな人は何万、否、何百万人に一人という大人物で、しかも一昔前の人々である。大金もうけをしようと決して思はないが、生きて行くに

はやはり職業が必要である。とすると結局自分の思う事に少しでも近づくには、世間で云うところの良い大学に入らねばならない。

「大学進学だけが人生ではない。私は息子をコックにさせた」とか、ある有名な母親がどこかの新聞に書いていたが、それがその人の好む道ならいいけれど、大抵の場合そんな事は切破詰つてからの事で、大学に入ろう、又、親は入れようと思うのが当たりだらう。

そんな訳で自分も大学に入らなければならぬ。両親初め、先生方や親類の人等に尻をたたかれて、時には「うるさい。」と云つたり、又時には「もう少しスペルタル教育式にやつてくれ。」と云つたり、僕位の年頃の者は実に勝手なものである。時々誰の為に勉強するのか、と自分で考えてみたりすることがあるが、一生懸命勉強しなければいけないと思うのは事実である。然し実行となるとなかなか大変である。学校でよく勉強する人の事を「ガリベン」と云うが、みんなに勉強が出来る人は羨しいと思う。

自分も、最低四月になつたらやり始めるつもりだが、當てにならない。その時になつたら、又こんな事を書きたくなつて、期限を延ばすかもしれない。そうこうしているうちにも時々は過ぎ、やがては三年生になるのである。

ある日、ある時

二年 中 村 悅 子

身を切るような鋭い、青い風が雜木林を通りぬけ、家々の鬼がわ

外気で冷えきった身体を包むようにして銭湯のれんを上げる。大急ぎで洋服を脱ぎ境のガラス戸をあけると、一塊の乳色の暖かい氣団がフワリと私達を包み、もうもうと立ち上る湯煙に一瞬目まいを感じながら、こぢんまりと片すみに場を取る。

すっぽりと湯舟につかっていると、しんしんと熱い湯が体にしみ通つて来るのが快い。ボヤーッと湯煙をながめていると今日一日の出来事が一つ一つときほぐされるように思い出されてくる。映画のように。喜びに興奮しきった友の顔、朝富士の溶け入るような新鮮さ、そして又、勇敢にも手を上げた自分の姿、ストーブの真赤な炎すべてが流れて行く。

見るともなく流し場の人々をながめる、たつた今入つて来たばかりのふとつたおばさんは、知人を見つけにこやかに挨拶をかわす。ガッソリとした中年程の婦人は、いやがる子供の頭をガッソリつかみシャボンの泡を多すぎる程つけ無表情に洗つてゐる。子供独特の表情でワンワンなくやせぼちの女の子——、

乳色の湯気の中に、いくつも並ぶ螢光燈の淡い光、すべての人々の体にやわらかく反射している。この限られた小さな世界にもいろいろな人生が交錯しているのだ。この上なく幸福な人も、涙で暮しているような不幸な人も、おなじこの場所で、同じように、しかも自然の容姿で集まつていると云う事が当り前のことながら興味深く感じられた。この人達も何分か後には、又各人各様の人生の道に戻していくのである。こう云う時こそ、本当に行きづりと言つて云ふことが出来る。しかし、その時の気持があまりにも珍らしい事でしたので、もう一度あの時の気持を味わいたいと思つて、時々鏡を見るの

らをなでつけて私の所にもやつて來たのは、そろ、去年の十一月も半ばのことだったから?どんよりと重そうな空の下、町では人々が震えあがつてゐるのも知らぬげに。

——私は見たんです——

ガードの下の片隅で、小さな子がガタガタ震えながら新聞を売つてゐるのを、人道に座つてじつと物ごいをしてるボロキレの様な母子を、たつた一枚の白衣、たつた一本の杖を頼りに、異国の丘をつぶやいていた傷夷軍人の痛ましい姿を、私はたまらないんです——どこをむいても、皆がそれぞれ楽しそうなのに。

木枯は无情です。この置ざりにされた人々を嘲笑するように、塵を舞上らせ、ぶつけます。こんな世の中を一枚の絵にしたら画面の半分は明るく強い線のタッチ、そして他の半分は薄ぼんやりとした弱々しいタッチ、展覧会に出したなら、皆は半分は忘れてしまいます。

木枯の吹きすさんだ季節がすぎて、本格的な冬が来るとあの人達はどう生きるんだろう?教えて下さい。私は、たまらないです。悪夢のような冬が過ぎて、やがてそよ風が吹き始めると、私はやつと救われるんです。

うすぼんやりした弱々しい絵にもかすかにピンクがまじつて来ました。

木枯しよ!冷たい木枯しよ!この次の冬にはもつとかすかに吹いておくれ、後生だからあの人達を苦しめないでおくれ。

銭湯

つて來た。

こうしてこの限られた場所に、いれかわり、立ちかわりいろいろな人生が交錯しているのだ。今日も、そして明日も。

夢

私は、毎晩何かしら夢を見る。眠る前にかならず映画館に入つた時のあの気持を味わうのである。——真赤な炎に包まれた校舎の窓、もがきながらも動くことの出来ない自分の姿、走つても走つても同じ所を離れられない哀れな自分。

黒一色にぬり立てられた部屋の中に座つてゐると女の人が、障子の向うで行ききするだけの一場面、しかしこわい夢、永久に永遠に絶えないような長い夢。

——急に眼の前が開けて美しい海が現われる、松島かな?岸で風に吹かれ立つてゐる自分、誰もいないはずなのに後に誰かいるような気はいゝ足音ノ解らない。

朝起きるとほとんど覚えてはいない。夢中の感触迄がじかに伝わつて来て私を驚かす。そして、現実に於て相手に出会つた時一人で赤面してゐるのである。

自 分

ある日鏡の中の自分を見て、「これが私が、こんな人間もいたんだな。」とまるで初めて見た人のような不思議な感じを抱いたことがある。しかし、その時の気持があまりにも珍らしい事でしたので、もう一度あの時の気持を味わいたいと思って、時々鏡を見るの

ですが、再び見る事は出来ませんでした。

自分は個体を持つて生きていると云うだけの事ではないか、と時々自分の存在を疑つてしまします。生きている以上何かしらを与えてもらっているのだと言う信念もくすれて来てしました。

「もしも今、自分がこの世から、消えたらどうなるだろうか。」などと考えると妙に寂しくなります。今死んでしまつたら何が残るんだろうか、みれんがましい気持、人間として、何かしらやつて死にたいと云う欲望が私を大きく支配しているのです。

一步離れて、冷静に自己をながめる時、心から満足することの出来ないみじめな自分、私の欠点は、物事を根本までつきつめて考えずに、表面ばかりなでつけていることであると自覚はしています。

それでいつも失敗をし、後悔しているのですから、まったく未完成な自分が腹立たしくさえなります。

でも私は、この大宇宙にたつた一人しかいないんです——と云うことは何と大きな意味を持っていることでしょうが、私と同じ人間は、私だけでたくさんです。このたつた一人を自分はどうにでもかえることが出来る。その大きな創業の仕事こそ私にさせられた最大の難事だと私は、信じています。

夕暮

あかね色の夕焼雲を見ると、私の心は嬉しさにはちきれそうにふくらむんだ。

「夕焼けこやけで日がくれて

山のお寺の鐘が鳴る……」

お父ちゃんのバカ一

二年 小林純江

長瀬の流れは急だった。その流れに向つて毎日のように「お父ちゃんのバカー」とんな声がした。母にだかれどなるようにそう言つたのは、やつと歩き始めたばかりの、三つの時の私だつた。

昭和二十年の三月頃だったと思う、父はもう敗けると知れたよう

しまつたんだろう、何で家に居てくれないんだろう。」そんな気がしていいらしい。

私は毎朝兵隊姿の父の写真の前にこはんを置きながら「お父ちゃん、お早ようございます。」とあいさつするのが唯一の日課だつた。ところがだんだん日が過つうちに、朝のあいさいに、きまり文句の次に「お父ちゃんのバカ」こんな言葉をしゃべつてしまふようになつた。そして何か気にくわない事がつたりすると、無理にでもたれかに長瀬の岸に連れて行つてもらつて「お父ちゃんのバカー、兵隊に行くのはみんなバカダー。」こうどなつた。

赤紙一枚でいやおうなしに連れて行かれてしまつたことなんて、三つの子にわからうはずがなかつた。誰かが私に言つてきかせた「お国のために」の言葉だつてそうだつた。私にわかっていたのは「お父ちゃんがいない」という事のみだつた……。

私がそんな言葉を口走つても誰も「いけない」なんて言わなかつたよう思う。少なくとも母は何も言わなかつた。いや言えなかつたのかも知れない。きっと「純江が可愛そうだから一日も早く帰つて来て……。」そう心の中で祈つていたのだと思う。

だが、そんな私にも味方が出来た。それは、もう初夏の頃だつたろうか、やはり赤紙一枚で息子を戦争にとられた親類のおばあさんだつた。「そうだ／＼純江の言うとおりだ、戦争に行くなんて、バカダヨネー。」そう言いながら、涙さえうかべて私の頭をなめてくれた。

皆、自分の頼りにしている人、あるいは自分自身が、戦争のいかにもありがたくない恩恵をこうむらなくては、戦争の恐ろしさなんちゃんが居ないからだ、なんでスミエのお父ちゃんは兵隊に行つて横になつて居ても、母にふとんをかけてくれる人はいなかつた。

と歌いながら歩いた山の石ころ道、大きなもろこし畑、

関東連山の山々が浮き彫りにされて、今まさに日が沈まんと言うその時、人間の心がこうも崇高な感じを抱けるとは夢にも思わなかつたような偉大な氣持にさせられる。

苦しい事、いやな事、すべてを忘れて、ただただ自然の前に屈服するより他にない。鮮やかな緑の木々が、今日黒々とそびえて、一日のとばりをおろす如くに見える。

一刻一刻、もぎとられるように美の世界が移つて、紫色のもやが立ちこめる頃、再びおとずれる偉大な静寂、もはやそのただ中に、身をおくことはたえられない。私もやっぱり人間に生まれ、人間の中で育つたから。

明日も、明後日も、夕暮は、おとずれる。そのたびに、私は少しづつ大きくなるのだ。体も、心も、そして人間としての行いを理解する事が出来るのだ。

——たゞ夕焼にまけないくらい、美しい心を持ちたい。——

てわからないらしい。もつともそれでもわからずいた人もいたし、そして今でも居るのだが……。

とにかく、そうこうしているうちに、八月十五日の広島が原爆にあつた。これが最後的きつかけに二十日には戦争がおわったおかげで父も親類の人も無事に帰つて来た。

私達一家は間もなく東京へ戻つてきた。その日、あまりに変り果てた東京駅を見て何だかこわくなつて泣き出したのをおぼえて居る。そして鶴見の駅において、まわりの焼け野原を見て「スミエのお家が無い」と言って泣いたのもはつきりとおぼえている。あれから十五年たつた。東京はきれいになり、戦争のおそろしさなんて忘れられかけている。だが私は忘れない。そして長瀬の水も忘れないだろう。水だけは、私があの時さけんだ水の流れと同じようにゴーと流れているから、水はきっと、きっと忘れないだろう。あの恐ろしさ、あのさびしさを、……水は……。

ある時俺は

二年木村覚

兄貴は二十才だ。四才違いは一番仲がうまくないと云われる。俺と兄貴はとにかくここ迄来た。俺は兄貴を尊敬している。恐れてもいる。奴の頭悩にだ、技術にだ、てのは少しく大げさかな。俺は兄貴をたより過ぎてゐるだろうか。決してそうではないと思うが兄貴に励まされると、何とも云えず幸福である。誰にもわかる事ではな

い。

兄貴は二十才だ。四才違いは一番仲がうまくないと云われる。俺と兄貴はとにかくここ迄来た。俺は兄貴を尊敬している。恐れてもいる。奴の頭悩にだ、技術にだ、てのは少しく大げさかな。俺は兄貴をたより過ぎてゐるだろうか。決してそうではないと思うが兄貴に励まされると、何とも云えず幸福である。誰にもわかる事ではないからな。いや、一度は一緒に行きたい時もあつたが。満足すれられかけている。だが私は忘れない。そして長瀬の水も忘れないだろう。水だけは、私があの時さけんだ水の流れと同じようにゴーと流れているから、水はきっと、きっと忘れないだろう。あの恐ろしさ、あのさびしさを、……水は……。

俺には父がない。何の記憶もないし、どんなものかとも思つた事がない。一体俺が父親などになつたらどうなるのだろう。おかしな事だ。俺はまだ十六才、運命は自分で切り開くもんだつけな

だ。一日の自分をあれこれひねくつてみる。ええい、くそくらえた。俺はせつせと本を読み、又映画に行く。誰にもわざらわされる事はないからな。いや、一度は一緒に行きたい時もあつたが。満足すべき良い映画を見た後の幸福感、これが俺の心の中の大きな感情だ。何の不自由もなく、楽しみを得る。本にして然り、又運動にして然りである。

俺は十六才、決して平凡でいたくないのだ。それが入れられなかつたと云つて、一時は嘆き悲しんだかも知れない。とても空虚な日を送つたかも知れない。だがそれを卒業しなければ。まだ／＼前途多難なはずだからな、俺の非常識、うぬぼれがそうさせたのだ。自分が傷ついただろが、相手にしてどんな事だったであろう。もう終つたんだ。兄貴はどうだったか、そうなんだ、俺は自分をあまりに過信していたんだ。

俺は自分（いや、そう思い込んでいるだけの事であるが。）に帰りたい。いつでも、その中にいたい。これからは断じてそうであります。弱い者であつてはいけない。自己を忘れるながれだ。

兄貴はもう大人、母は勤め、そして俺は元の通りになつてしまつたのだ。後悔？そんなものくそくらえた。わかりすぎる程わかつて

いのではなかろうか。兄貴の云う事には、大学はとても自由な雰囲氣があるとの事。全く、あるいは切実に大学生になりたいのかも知れない。一年間、何もかも忘れて勉強しようと、とても無理な注文であるが。

松高生痴れ者回想録

三年太田悦信

一月の中旬になつて、「る・くーる」の委員が、投稿するよう頼んできた。全く殺生な話である。大学の入試が間近かだから、こちらはそのようなことに手を焼きたくない。それでなくとも、今迄にも全学連のようく松高の犠牲的存在の僕だったのだから、もう見逃してもらいたいものだ。でも、お人好し（？）な僕だから、不公平も言わずに引き受けてしまつた。こんなわけだから、他の人間よりも文才のない僕が、いい文を書こうなどと考えてみるだけでも浅ましい。その上に、書きたいことの十分の一も書いていない。まあ、途中迄でもいいから、徒然なるままにお読み下さることを願いたい。そして、松高にものこのような痴れ者が存在していたのだといふことを知つてもらえれば、それで満足だ。

ところで俺は考えてみた。この陰気な俺を。だめだ、だめだ。俺は自分の欠点が良くわかつてゐる。そこで断じて自分の中にとじこもらなければならぬのだ。軽はずみであつてはいけない。常に考へても、それを予想していただけに決して驚くまい、悲しむまいとした。ところがどうだ。俺は全く一人舞台をやつていたのだ。ああもうやめよう。

ところで俺は考えてみた。この陰気な俺を。だめだ、だめだ。俺は自分の欠点が良くわかつてゐる。そこで断じて自分の中にとじこもらなければならぬのだ。軽はずみであつてはいけない。常に考へても、それを予想していただけに決して驚くまい、悲しむまいとした。ところがどうだ。俺は全く一人舞台をやつていたのだ。ああもうやめよう。

今はさつぱりとする事である。一度は心に決めた事なんだけど。それを又どうして、なんという事をしてしまつたのだろう。その時はそれで満ち足りた気持になつたんだ。まあいや。いつもの自分であつたんだな。あつちこつち飛びまわり、だんだん自信を失つて行く。そうかと思えば良い事もある。俺は何と云つても、自分の無能が現れるのが恐しい。俺の行動にしてしかりだ。自制する事が出来なかつたんだ。何とか自分の存在を大きくしたかったのだ。自分の自信のなさを何とか表現したい。それで気持が柔らげなれば良いと思っていた。ところがどうだ。何もいう事はありはしない。さつぱりした気分。俺の今求めているものはこれだ。でも自分に満足するだけではない。もうすぐ三年なんだから。

俺が兄貴のような人であつたなら。俺は所謂一人だ。自分から望んでいるのかもしれない。自分の無能が苦しいし、決局何も出来ない

入学当時

(一)

今考えてみると、僕という男は入学試験から笑拍子もないことをやる素質があつたらしい。松高に試験を受けに来た僕は、その当時

から遊びとオッヂヨコトイで日々を送っていたものだ。だから、二・三年生試験の答案にとんでもないことを書いて慌てたのは当然である。答案用紙に「志望校欄」という項目があるのを御存知だろう。先ずそこから事件を起したのである。第一日目の第一时限の始めに、先生がこの項目に「バツを入れなさい」と云う。僕は聞えた通りに「×」を入れて試験を受けたのである。一时间目が過ぎ二时间目、同じように「×」を入れて懸命に問題を解いていると、先生がバツを指して、「君、これは何ですか?」「はい、これはバツです。」「君は志望校がないのかね?」「え、勿論、松原高校ですよ」「どういう積りで入れたのかね?」少し先生の顔が紅潮している。「先生が「バツを入れる」とおっしゃったからです」先生はあきれたような顔して「前の時間もバツを入れたのかい」としつこく聞くから、「え、その通りです」とハッキリ答えてやつた。先生は一層没い顔をして「そりや困った。君は「バツ」と松原の「マツ」とを聞き間違えたんだね。」

(二)

ざつとこんな工合だから、入学してからはもつとひどかった。僕は卓球が飯よりも好きだという奴で、中学の一年の終り頃から、毎日卓球場へ夜の十時迄練習しに通っていた。だから、腕には相当の自信があった。ところが、松高の卓球部たるは、とても弱くて他校に勝つたことが一度もない。練習も学生服を着てやっている。なんとタランでいることかと落胆したが、そこは黙つていられない性格だから、ガツチリしめてやろうと考えたのである。それには、こち

らが強いということを示さなければならぬ。だから、二・三年生の選手に試合を申し込んだ。皆、一年ということでなめていたが、一人一人簡単に勝つていき、最後は部長迄一本も与えないで勝つてしまつたら、皆驚いてしまつた。そこがこちらのつけ入る所だから、一人一人コーチしてやるということにしてしまつた。勿論、コチはロードワークからである。うさぎ飛び、腕立てふせ、後向きしゃがみ飛び等、一日に二時間余りゴッティとやらしてやつたら、皆音を上げてしまった。それと当時は、皆上級生が従順だったから、教わる時僕の話を「ハイ」「ハイ」と聞いていた。これが他の部の生徒に見られて、知らない人が朝など頭を下げる。ある朝も「おはようございます」と二年生が頭を下げる。「おはよう」とこちらも答えると、「先輩、今日の練習はおてやわらかに願います」という。初めは冗談かと思ったが、相手はましめた。「いえ、恐いります」といつて、恥しくなつたから逃げだしたら、後方で「バカだな。あれ一年生だぞ」「え、一年生、嘘つけ!」「本当よ。」「へえ」という会話が聞えてきた。まさに、あれ程、きまり悪いことも少いことであった。

風紀のこと

(一)

一年の前期、僕はクラスでは風紀委員をやつていた。中学時代の先生が内申書に何か書いたらしく、入学早々先生に任命されたのだが、三年になると、遅刻をする自分がいやになつてくる。おまけに出席までつけさせられたのだから、するわけにもいかない。一学期は八回と相変わらずだったが、二学期は二回で抑えたのは立派であつた。

本当に遅刻などは先生に文句を云われるのが積の山だから、一つも得なものではない。そんなことは辞めた方がよい。もし僕の一、二年時代と同じような人がいたら、やめてもらいたいものである。本当に遅刻などは先生に文句を云われるのが積の山だから、一つも得なものではない。そんなことは辞めた方がよい。もし僕の一、二年時代と同じような人がいたら、やめてもらいたいものである。

女が別れている。その間は交通が杜絶してどうもおもしろくない。先生に変えるように頼んだが「まあ〜」で抑えられてしまった。これではしゃくにさわる。なんとか合理的な手で男女が隣り合つて見ると一つあつた。授書箱である。皆もブー〜いっていたから、作ればきっと入れるに違いない。そこで風紀委員の名前のもとに、「設置したから、いいたいことを入れてくれ。」と告示したのである。勿論、無名授書にさせたのだから、皆気兼ねがない。果して、十数枚の「男女で並ばせろ」という授書がまいこんだ。これで使つたもの。さつそく先生のところに持つて行つてつけた。「こんなに云つているのなら」ということで、漸く承認してくれたのである。勿論すぐ僕らのクラスは、男女交互に席替えをしたのであるが、この風潮が他のクラスに移つて、男女を交互に並べるように替えた所が多かつたのは、痛快であった。以上のよう、風紀委員であるから、反対に風紀を良く守つたとは云えなかつたようである。

文化祭

(一)

卒業するに当つて、最も嬉しいことは、文化祭がすばらしくなつたことである。松高の他の行事が、全く下降線をたどつてゐるのに對して、年々によくなつていくのは、本当に自分のことのように誇らしい。

思えば、一年の十二月、突然文化祭委員長をやらされたことから、僕の文化祭への野望が沸いたのである。

すごいのは遅刻である。前期は大変努力して、八回程度であつたが、寒き冬に致つては我慢できない。持前の寒がり屋であるから、どうしても、時間ぎりぎり迄ねている。だから、後期たるや、三日に一回の割に遅刻である。計五十回程になつたであろうか。

先生に随分注意されたが「習慣は第二の天性なり」で、二年になつてもなおらない。二年は、もっと多くなつて六十四回。松高の一ひるさい〇〇先生でも、遅くなつたらしく、最後には文句を云おう

は、余程頑張らないとクラスでやるのは勿論、文化祭さえ開かれない。仕方がないから、今回は小規模にして、クラブのみということにしたのである。

(二)

さし当つて、委員会を開いてみると、開催日が先づ問題になつた。三年生は、二月中旬で来ないし、二年生も、そろそろクラブから遠くなり出している。それに練習日数もない。これでは八方ふさがりである。だが、悲觀してもしょうがないから、二月中旬に、思い切つてやつてしまえということになった。芸能祭で一番問題になつたのは会場。今迄他校で借りてやつていたのが、今回は絶対にだめだと指導部の先生がおつしやる。ところが、松高の講堂たるや今のような舞台がなくて、音響は全くゼロ。クラブの連中が出演拒否をするし、どうしようもなくなつたのである。

しかし、これで「僕は委員長を辞めます。」と云つたら、全く腰抜けである。口惜しい。しかし、五里霧中。一日中考えた揚句、来年を立派にするために、交換条件を出して、皆に我慢してもらうことにしたのである。

交換条件とは、「十周年に予定されていた体育館の舞台設置を来年度に早めてもらいたい。その変り、今年度はこの松高体育馆で我慢するから」ということであった。学校には大分しぶられたけれど、交渉する中に漸く確定にまで漕ぎつけたのである。

勿論、芸能クラブは皆承認してくれたけれど、あの寒々とした作りの悪い体育馆に、芝居小屋のような特設舞台を作つてやつたの

査の結果は、「クラス単位で行う賛成者が圧倒的に多い」と嘘をついて、ひっぱつたのである。

これには委員会も、全校生徒の案だからということですぐ可決。少し気分が悪かったが、松高の為なのだと思って我慢した。次に、最も大切な、そして難しい職員会の賛同を得ることである。何せ、一度僕の構想は否決されているのだから、普通では「シッコイ」で終つてしまつ。方法は唯一つ。職員会に出て意見を云うこと以外ない。即ち、僕の云つている気持を理解してもらわうのである。だが全国で生徒が職員会に出たという話は、未だかつてない。ましてや生徒も先生も支持していないことを、ズーズーしく言おうなどとは、不可能に近いことではないか、

しかし、僕はやつた。ナボレオンの言葉に「私の辞書に不可能といふ言葉はない。」とあるが、僕はそれを信じてやつた。

職員会に出させてもらひ最初の糸口は指導部の先生にある。委員会を使って先生に信じこむことだ。幸に松高の先生方の方針が「今年は生徒会に協力していこう。」ということである。

指導部の先生達は一回も委員会に出席していないので、これを委員達に「生徒の気持を理解しないで、勝手に職員会で否決していくのか」と攻撃させたのである。この攻撃は話のすじが通つてゐるから、先生もすぐ判つてくださつて、「それではどうすればいいのだ」と一步譲つてくださつた。これを持つていていたのである。すかさず「先生が説明するより僕達生徒の方がよいかから、職員会に出させて下さい」と云つた。少し驚いたらしいけれど「よし、いいだろう。但し責任を持つてやれよ」と受諾して下さつたのである。

女性との交際

生徒会をやると交友関係が多くなる。お互いの親密さがないと運営していくのにものだからだ。その点で僕は大分得をしている。

色々な性格の人と交つて苦い思いやその人格の暖かさに触れた経験が比較的多かつた。

特に高校生にもなると矢張り女性のことが気にかかる。僕は陽気だから、人との接触も多くて女性と交際する機会が自然と増えた。

は、今考えると随分辛いことであった。おまけに、僕も演劇に出演したのだから、本当に骨が折れたのは云うまでもない。一方、從来軽くみられていた展示を、予算も多くして優遇したので、とても活発であつた。一年の文化祭は、展示によつて救われたようなものである。

(三)

二年になつて、前回の文化祭の失敗をなんとか取り返したいと思つたのは当然である。一番やりたかったのは、芸能はクラス単位で、展示は松高中の教室を使用することだつた。そして、文化祭全体で三日か四日掛けたいということだった。

この構想を、職員会議に、生徒会指導部の先生を通して提出する

と、簡単に否決されてしまつた。松高のような普通校ではそんなに期間をもうける必要はないし、ましてや、クラス単位など不可能だ

という。

それに、もっと悪いことに、行う生徒側の調査統計でも、クラス単位などとんでもないという人が過半数。皆、学年定位でなければ無理だということである。僕はこれには困つた。誰一人として、僕の構想を強く押してくれる人がないのだから、どうしようもない。

この時程「他校でできることが何故できないのだ。松高はだらしない学校だ」と心の中で悲しがつたことはない。だが、又もやこのまま黙つていることが口惜しいから、嘘をついてでも成功してやろうと決心したのである。

先ず大切なのは、文化祭委員会を啓蒙すること。「全校生徒の調

タイミングもよかつたけれど、先生方の理解がとてもあつたことがこの成功の原因だったと思う。さて、職員会に僕と中心である友人達二人とで出席したのであるが、これも嘘の連続であつた。クラス単位で三日以上の文化祭を行う学校ばかりのプログラムを持っていて「二日以内で学年単位の学校だけ」と嘘吹いたのである。そしてもつとひどいのは、生徒側でも僕の構想にはいやいやな人が殆んどなのに「生徒はきっとやつてみせる」とファイトに沸いている。とも云つた。

この言葉は大分効果あつたとみて、「生徒がそんなんならばよい」とではないですか。承認しましょ。」と賛成してくださる先生も出でてきて、今迄劣性だつたのが引づくり返つたのである。

結局、僕の主張が職員会議に通つて以後の前にもましてつらいことはあつたが、自分の構想に近い文化祭が開けたのである。

先日の文化祭を見ていて「ああ、矢張り僕のやつたことは正しかつたんだな」と感慨無量になつた。十周年を迎える今年こそ、もつと立派な文化祭を開いてもらいたいものである。

女性にも色々タイプがあつておもしろい。女性という感じを全く与えないで話せる人。反対に女性と話しているのだという緊張感を与えないではない人。前者は一般に陽気な人で親しみ易い。後者は女らしいという静けさで話し難い。各々長所あり、短所ありで、どちらが好きとは云えないが、一般に下級生程、外向的性格の女性が好かれるようだ。それは、下級生時代はまだ女性と話す機会が少ないとから、目立つ誰とも話す女性に魅かれるのである。僕のアンドルを考えてみても皆明朗であつたように思う。

浮気なのだろうか。自分でもそう思うことがしばしばある。だが高校生の感情は誰でもこうなのだから別に気にしない。ただし、一つだけいつも女性にもとめているものがある。それは「おまいやりのある心」だ。今迄の僕と交際した女性は、何かそのような点がもつと欲しかったような気がする。相手の女性から云わせればきっと僕と同じことを求めるに違いない。結局、高校生の時代はお互に勝手なのだ。求めるだけ相手に求めて、だからといって相手に求められればそれに応ずる準備もない。精神的に不完全だという言葉がピッタリする。しかし女性と交際してはいけないとのではない。大いにした方がよい。女性を知ることは大切なことである。

「恋は盲目」というが、本当にその通りで、この経験は高校時代にしておいた方が得だ。第一、大人になって盲目になつては大変だ。それこそ財産はおろか思いつめて死ぬかもしれない。「経験こそ人生の母」である。ただし、遅くとも三年の二学期になつたら、女性との交際は浅くした方がいい。何故なら、悩んで勉強できないからだ。悩まない深い交際はない。きっといつかは壁にぶつかって

お互いに悩み考える。それを受験間際にしたら大変だ。一変に成績が落ちてしまう。
我々の交際はある面において、寂しさを補う為の享楽的なところがないでもない。目前にとらわれて女性と交際することは絶対され方がない。高校時代はお互いの為になるものでなければならぬ。マイナスの面が多かつたら、つらくても思い切つてやめることの当然だ。又その努力こそ将来の人格形成に役立つであろう。
交際する時に最も大切なことは、自分を忘れないこと。そして相手の立場を考えることだ。よく高校生の交際は周囲のことばかり気にして、肝心な自分達を忘れていることが多い。「他人がどう思うだらうか」「このまま交際したら、私達はどうなるだらうか」等と大切な現在の相手の気持を考えないで一人相撲をとっている。又そういう一人よがりな考えは、自分の行動に自信がなくなつて、自分ばかりでなく、きっと相手を傷付けるようになる。もし、現在悩んでいる人があつたら、このような点がないかよく考えてもらいたい。

僕はいつもこう考えよう考えようと努力していることがある。それは大胆な気持をもつこと。「好意」をもつてゐる女性があつたらいつまでももつがいい。話したかつたら、許せる限り話せばいい。それでいいじゃないか。やましい気持がなければ、大いにやればいい。大人の云うような恋愛心をもつことよりも、純粹な素朴な気持で堂々と交際する方がいい。ジメジメした変に大人臭い考えは、結

局、一文の足しにもならない。今は自分の為に自分の行動をとることが必要なんだと思う。

男女交際よ、我が上に恵みあれ、である。

高校生活と生徒会

(一)

僕の高校生活を考えてみると、生徒会のことが先ず中心になる。自分が「悔のない、楽しい高校生活だった」と云えるのも生徒会で勝手気ままなことをやれたからだ。つらいこともある。悲しいこともある。怒りとなることもある、だがそれが生徒会だ。又そうではなくては楽しいものではない。秋の空のように色々気持が変わるからこそ将来の為になるのだし、喜びもそこから生まれるのだ。人は色々性格があつて、概に云えますが、もし最も思い出のある高校生活を送りたかったら生徒会をやつた方がよい。

勉強しなければならないからなどと云つて、生徒会に協力しようとなしい人間に何んで良い成績がとれよう。第一精神が違う。粘りがないしファイトもない。全く寂しい人間ではないか。それより馬鹿だくと云われながらも生徒会に首をつっこんでいた方が、成績が少し位悪くても高校生活に張りが出る。僕の知つてゐる範囲では三年になつて成績がグンと良くなつてゐる人間は、大抵首をつっこんだ経験がある。それに反して一年時代、秀才だなどと云われた連中は、生徒会をやらないで直ぐ帰つていたのに、実力が少し伸びていないようだ。彼等には、「一流大学に入るには生徒会をやつたら駄目だ」という観念的な考えが秘んでゐるに違いない。又そ

だがこの傾向は全国的なものらしい。どこも生徒会が段々と沈滞

して、生徒会の必要性に疑問さえ抱いている所もあるらしい。生徒会は全生徒が心を合わせて学校生活を楽しくしていくものなのだ。だが現在では行事を行うこと自体がマンネリズム化して、

反ってその行事に当った役員が嫌々ながらやるようになってしまふ。否、もうすでに松高の生徒会には、行事自体が役員の負担になつてゐる。何度笛を吹けども生徒はついてこない。役員さえも「嫌だつたのだけど、皆に推薦されたから仕方なくやつてゐるのだ」等と、数年前では聞かれないことを平氣でいう。このような状態では学校から「生徒会をもつと活発に」と叫んでみたところで、良くなる筈がない。それに合わせてホームルームの不活発さ。議長が一々指命しない限り誰も意見を云わない。ひどくなると指命しても立とうともしない。気が向いた時は皆ギヤー／＼云うが、建設的な意見が伸び出ない。

高校時代こそ、現在の自分達の存在を真剣に考え未来に希望を燃やすものなのに、何か今の松高生には真剣に人生を見つめる時間が無いようだ。

大学受験。これも不活発にする大きな原因かもしれない。充分に自分のことをやれるのは一、二年時代だけだから、活動する生徒も少ないし、期間も短い。だが、だからこそその短い期間を大いに活用しなければならないのだ。でもそれは教育制度に問題があるのではないだろうか。与えるだけの授業。生徒自身が研究し考えることが僅かで、単に試験問題を解けば良いことになつていて、創作力がないし、意欲に燃えることもあまりない。そのような精神的根本的な欠陥が、現在の生徒会に響いているのではないだろうか。戦後の

理が判つてしまつたら、発展する努力をしなくなるかもしれない。発展は専いもの。それがなかつたら、人間など生きる筈がない。だが愚かな人間は発展を飛躍的に考える。実は一步／＼踏みしめていくものなのに。

そう考へると、毎日の自分の生活がだらしなくみえてくる。まだある／＼と思つてゐる人生は今すぐ消えるかもしれない。今こそ生きることが大切なのだ。「生きる」食うことや空氣を吸うことではない。自分に立脚することだ。

今日の日本には大勢になんでも押し流されてしまう人が多い。自分の意見を持たない、その日暮しの人がなんと多いとか。日本の政治がだらくしているのも、こんな人々が多すぎるからだ。皆が生きていれば決して政治がごまかせない筈だ。今の国会が悪いのも選んだ国民側の責任だ。皆が政治をするつもりで全体の為の利益を考えて投票すれば、汚職代議士も生まれないとだろう。こうは言ふものの、我々高校生にとつても、このようないい点が大きい。毎日、その日の楽しさだけで生活している面がないだろうか。大学へストレートで入りたかつたら、今から授業を着実に身につけることだ。まじめに予習も復習もしないでもつて、三年になつたら、大学に入らうなどとは浅ましい。社会はそんな甘いものじゃない。僕も知らない。社会はきっと考へているより酷いだろう。だが大丈夫だ。今から毎日を全力を尽して生きていけば、きっといつかは報われる。世界には自分という人間は、一人しかいない。死ぬのも一人だし、頼れるものも一人だ。自分、それ以外頼れないのだ。生きる。今から生きよう。未来の勝利の為に生きようではないか。

最後に

高校生活で最も大切なこと。それは全力をつくすことを知ることだ。人間で最も美しい姿はあることに全力を尽くしている時だ。

全力をつくせばきっと愛の尊さも知ろう。世の中の複雑さも知ろう。物事への喜びも知ろう。

人間の歴史で多くの偉人が悩み考へてきたことは人間の真理といふことだ。人間にとつて何が真理なのか。その疑問こそ未だ解くことができない不滅のものなのだ、だが解けない方がいい。人間に真

生徒は戦前よりも数学系統ができないと、云われているが、自分で考え、解決していくことが少い戦後教育では仕方のないことである。松高の生徒会もそうだが一般に高校生そのものが余りに型に、はまり過ぎているよう思ふ。勉強して、大学へ入つて遊んで就職試験に悩んで就職につく。これだけのことしか現在の青年には残されていないような気がする。否これらのこととは強制以上の義務として課せられているようだ。

このようなことが解決されない以上、どこの学校の生徒会でも次第に沈滯していくのではないか。生徒自身にも精神的にノビ／＼したところもなくなるし、一個の独立した人間として自分を見つめる余裕もなくなる。従つて「学校の為に貢くそう」などと愛校熱のある生徒もいなくなるだろう。民主教育というものはこういう状態のものでよいのだろうか。「皆の為に」という気持は本当は「自分の為になる」ということなのだが……。

大島旅行

二年 西 村 洋 史

午前五時、北風のびゅう／＼と吹く大島元町港に着いた。元旦の雨の中を、物好きにも僕とKとの二人は午後十一時小雨降る竹芝橋を後に、一路波しぶきをあげて東京の南の端大島へと乗込んだのだ。船から見る大島は黒々と海上に浮かんで、前日来の雨で落着いた頬もしさを感じさせる。寒さに身体をぢめ、肩をすくませた出迎えの人達や、名物のあんこさんがちらほらと見える。僕達も寒さの為に顔がこわばり、まわりを見ているどころではない。早々に改札を出て登山口行きのバスに乗り込んだ。船から降りた人達が迎えの人達と寒そうにあちこちに分れていく。ここを後にバスは出発。五日、二年全体で来たコースとは逆に、峠の茶屋に着いた。そこまで二人は腹ごしらえ。名物の牛乳を暖かくして、あんこさんのおしゃべりを聞きながら飯をほおぼつた。午前七時頃いよいよ出発である。目的地は歌でも知られている波浮の港。どんな港かと思い思いに想像して、山の頂上まで続く細い、白いコンクリートの道に入つた。有料道路であるから二十円払わされた。朝もまだ早いのか、登山客はほんのまばらに岩かけに見えかくれするだけだ。岩だけの山で緑というものが何もない。小さな子供が一生懸命に登つて行く。寒く、さびしく、殺風景である。馬方達が道の途中で馬を休め、焚火を囲んでいる様子は雲助の如きである。三原山はもう／＼と白い

煙をはき、周囲の風景は前日来の雨ですっぽりと黒く対照的である。寒さにふるえながら僕達は登つて行った。頂上に着くと低くて山である周囲よりも一段と高く、見下すとはるかに砂地帯が続き、そこにくつきりと一本の細い道が続いている。この道が波浮に続く馬道とのことである。向うには岩が重なり合い、連なりあって西部劇の場面が想像される。そこを馬が通ついくとます／＼おもしろく、写真を撮りあつた。風が強くひゅ／＼吹いて、風に押されそうである。一番テッペンの所に一人の人人がゆら／＼しながら頑張つている。はるかに見える白い道を波浮へ向つて前進。波浮へ向うのは僕達二人だけ。時々異様な臭いが鼻にブーンとくる。他人影もなく、家もなく、全くさびしく静かである。心細くなつた。しばらく行くと周囲の景色ががらりと変わって緑樹地帯が見えはじめた。砂に埋もれている木々や草花などは、さわやかに緑色を出し、初めて明かるさを感じた。向うから馬の姿が見えて来た。馬方の姿にもほつとした。変な顔をして見て行く。しばらく行くと目の前がバッと開けて海の青さが目に映つた。遠くはるかに伊豆半島の島々その上にくつきりと白く、高くそびえたつ富士の英姿。一休みしていると後から一人の男がプラプラやって來た。物好きにも波浮に行くという。旅は道連れといふので三人又も一本道をプラ／＼。二時間程してバス通りに出た。椿並木があり、ところどころに花を咲かせている。大島の感じを強く出している。ようやく町に出た。お正月らしく着飾つた子供達が嬉しそうにとびまわつてゐる。更に二時間位、よく歩いたものだ、波浮の港はいかにも島の漁港らしく小じんまりとして、三方を山に、前面を海に囲まれた落着いた静かな漁

港である。遠くレコードの音が聞える。田舎の芝居小屋のまわりで正月らしく子供達が遊んでいる。歌に歌われた程はなやかでなく、いかにも田舎町の漁港である。バスの停留所で三人はぐつたりとしてしまつた。帰りはバスで、僕は眠つてしまつたが、Kはタフだから窓からの景色を見ていたらしい。二時半発の船によくやく間に合ひ、みやげ物を買うのもあんこさんをせかせて急いで船に乗つた。

台風被害地を見て

三年 大 養 孝 守

あの悲惨な伊勢湾台風も時の移りと共に忘れられようとしています。しかし僕はある生々しい災害地から受けた印象は仲々頭から消し去る事は出来そうもありません。あの頃、東京では台風一過、青空が見え、平常の生活が再開されました。勿論僕も授業を受けていたけれど、兄から急の電話で「姉夫婦が行方不明だから急いで帰れ」との事、心配していたものの瞬、背筋が凍り、顔が硬直しました。早速兄貴と食料、罐詰をリュックや包裝にして出発しました。なにしろ母からの電話によると野菜が一束百円という法外な値上がり状態だったらしい。水も不足との事、僕は半信半疑だった。東京駅では電車は三時間ばかり遅れているもの人々は平常どおりだたし、列車も空いていた。僕等はまるつきり闇屋みたいな姿で乗込む。沿線も被害は余りないように見える。兄貴など「何かの間違ひじゃないかなあ」などと云い出す始末。しかし安城駅を過ぎる

頃になると稻が水洗し、倒木が目立ち、名古屋近郊までくると家々が水洗していた。屋根にはぬれたブトンや種々雑多の家財道具、衣類の満艦飾だった。やがて母の家につくと長姉夫婦は一応家も無事とわかり安心する。長姉の家は比較的市の中心部にあり、水も翌朝は四・五十センチに減りイカダ連絡が出来るようになつたらしい。早速绝望的な南地帯の次姉夫婦を探す為小型トラックを借りて出掛ける。途中被災地の肉親を気づかう人々の列で一杯。求められるままに荷台に入を満載する。幸いにも主要道路は水がはやく引いたので車の利用者で一杯である。後方から自衛隊の草色の給水車、ジープ、トラックなどが長蛇の如く続く。もうこうなると乗車定員もあつたものではない。沿道は倒れた家々、流木、畳の山、そして床下侵水のドス黒い水がにぶく光つていて。ここいつあヒデエヤ」と思わずつぶやく。車を降り二百メートルばかり水中を歩き長姉の家に着く。足元はゴロ／＼としたビン、ヌル／＼した猫の死体が浮かんでいる。ナベ、カマ類、メチャ／＼な住宅街、前は赤ガワラの区画整理の出来た端正な場所だったのに見るかげもない。姉達は隣の学校に逃難していた。僕等をみて一瞬泣き出をうな顔をする。せつかくの庭木も池も泥に埋つてしまつたのだから無理もない。少し高台なのだけれど床下の水はまだ引かないのだ。とに角食物を渡す。ひどく重いのに水にぬらすまいと、頭にのせて運んで来たのは骨がおれた。

あぐる日は一家、人數の多少にかかわらず腐りかけたにぎり飯一個と数枚のカンパンの配給という信じられないような話だ。台風が来そだと/or>うので早くから準備していたそだけれど、夕方七時

に電灯が消え、家がきしみはじめたので「学校に行こうか」など迷つていると玄関からチョロ／＼水が侵入しはじめ「危いな」と云つているとたん、畳がいきなり持上り、透明な、意外に澄んだ水がドツと湧きあがつて来たそうだ。急いで二十メートル離れた学校に逃難するのにさえ半分流されながら、と云うから水の勢いはものすごかつたのだろう。再び食料をとりに行こうと思ったところ、はやくも階段のなか程で水が渦をまいていたそうである。数人の船員も早くから学校に逃難していて、カーテンをつけないで流れて行く人を助けようとしても風で吹きとび、闇の中から「助けて／＼」と叫んでいるのが聞えながらどうしようも出来ずやしかつたと云う。次姉宅はその日は水が深くて行けそうもないのに一応帰り、マンジリともせず一夜を送る。翌朝泳ぐ覚悟で出掛ける。幸いに土地にくわしい人が提防廻りの道を教えてくれたので、大廻りして進めるだけ進む。ヘリコプターが数機空に舞つていた。車を乗りすて破壊された提を歩く。

巨大な鉄パイプが曲り、中型漁船が民家をへしつぶしてのりあげている。自衛隊のトラックが浅い所から強引に提まで来る。水より突出している提防に入々が逃難しているからだ。提防の上に給水車、赤十字が設置される。人々は台風後土堤の上で暮しているのだ。小型船が一杯、死体をさがしている。逃難所で次姉夫婦をみつける。こんな嬉しかつた事はない。でも学校へ逃難する道で四才の坊やが流れされ行方不明との事、「きっとどこかに逃難しているさ」と、ほとんど不可能な事とは知りつつも自分でそう思い込み、一生懸命生存を願つてゐる風である。現に目の前で盛んに死体収容をやつてい

る。死体が堤にズラリと並んでいる。寝起きの子供や老人が多い。着いたばかりの自衛隊のボートが老人の死体をおろしている。静かに水際に安置する。手も足も紫色にブク／＼はれて、薄くろうの膜をはつたような皮に黒い血の色がみえる。隊員達はゴム手袋をはずしながら、気の毒そうに黙つて足元の死体をみつめている。人々が次から次へと顔を確かめに来る。「もしや肉親では」と思うのであらう。家族が発見すればどんなに悲しむだろう。

まだ目の前はひさしまで水につかた家ばかりの泥海である。これからどれだけの死体がある事か……。それを思うと何となく胸が痛む。そして、はや臭氣のする死体をしていに抱いてボートから降す隊員達に、尊敬と感謝の念を抱きながら一応母の家に帰る。風呂に入つても臭氣が鼻につき、御飯もあまりのどを通らない。三日目に坊やも救われていて、生きている事がわかつた。僕はとびあがつて喜んだ。次姉夫婦は家財はともかく、一人息子が戻つたのだからその喜びようも人一倍たつた。

四日目も姉の家の後かたづけを手伝う。床の泥をシャベルで放り出し、チョロ／＼出はじめた水道を使って床を洗うのである。あたりの水がひどく腐りはじめ、その臭氣と云つたら今でも吐氣をもよおす位。桐のタンスも開かず、涙をのんで打破る。姉が大切にしていた着物も染つたり、泥がつまつていて見るも無残なあらさま。腐つた犬が流れて来て家の前で流れない。あまりに悪臭がひどいで足になわをつけて遠く迄引つばつて行く。

夕方妹が水防団のイカダにのせてもらって差入れに来た。僕なんか水没地帯を出るのに、胸まで水につかって行くのに、妹はぬれず

めい／＼の「晝者の一灯でも」輝かしい光となるに違いないと思う。

池の平日誌

教諭 佐藤竹次

二十六日。二十三時全員上野駅集合完了。スキー列車のすし詰めと喧騒を覺悟していたが殆んどガラ空き。途中乗車する人もない忘れ去られた様な列車だ。車輦のきしむ音が車内を通り抜けた度びに背筋が寒くなり、眠れそうもない。三々五々場所を占領し適当にやつっている。雪があつて欲しい、上手になつて欲しい、楽しくあつて欲しいと祈りつつ浅い眠りに時々入る。

二十七日。晴。信越線田口駅着、「松原高校様」の札のはつてあるバスが数台のバスの中頃に配車されている。沢山の团体や一般スキーヤーを尻目にさつさと乗車出発、池の平へ向う。雪が段々多くなる。一五〇種は充分ある。スキーに来たのだからこうなくてはまらぬ。昨年の今頃スキーコースで散策したことを想うとバスの窓越しに見え隠れする妙高山に感謝の祈りを捧げる。終点には顔なじみの寮の親父さんが迎えに来てくれている。昨年の連中はなつかしうように挨拶し合つていて。やつと寮に着いたらもう前のスロープを滑っている。「休憩」「休憩」と叫んでも効果はない。ホームグランドへ来た気楽しさで我儘しているのだ。スキーが始めてと云う連

に来て、帰りは僕に送らせてねれずに帰る。「女の子は得だなあ」と思った。

五日目、大体片がついたので帰京する。やつとおそまきながら援助活動が盛んに始められたようである。そして三ヶ月後、再び名古屋を訪れる。手紙であらかじめ知つてはいたけれど、その復興力の強さに驚かされた。完全とは云えぬまでもほんと秩序をとり戻していた。勿論災害の爪あとはあちこちに残されていた。一般に市全体が泥くさくなり、悪臭がしみ込んでいたようだつた。潮をかぶつた木々は、松でさえ黄色く枯れてしまう。水田は何回も潮抜きをしなければとの収穫は望めない。そこで被害の大きい市電路線の一部は放置されてバス線路となり、かつての美田が荒野となつてしまい、まっかに鋪びた自転車の山や、材木の山を見るたびに、数千の人命を奪つた台風の猛威が思い出される。

けれどもここ迄復興した人々の意欲は立派だと思う。帰りの車中ではハワイ人と同席した。彼は横須賀からDay-offを利用して名古屋へ行って来たそうだ。彼は盛んに同情していた。いまだに世界のあちらこちらから、先日の新聞紙上のドイツ小学生達のオモチャの送りもののように美しい善意が送られて来る事は本当に有難い事だと思う。

以上、色々と長々しい雑文を書いてしまつたが、どうか松高の皆さんも是非とも災害に注意してほしい。「災害は忘れた頃にやって来る」という諺はまさに至言である。そして災害のあった時には、勿論ない方が良いに決つてゐるが、協力して皆さんの善意を示してほしい。

今までがスキーがどうの、靴がどうのと一人前のこと勝手に云うのであるさいことだ。風を切つて滑走する雄姿を想像して半分頭に來ているのだろう。雪に慣れる迄放つておく。「食事ノ」「食事ノ」と絶叫すると、やつと全員帰つてくる。矢張り彼等には魅力のあるもの一つの様だ。午後から入浴まで直滑行だ。要領と要点のみ話して、スピードに慣らす。自然に初級者と中級者に分れ、夫々のグループで適当にやつている。男子は雪につんのめつてから唸り、女子は奇声と共に滑り声が終ると共に尻もちで、スロープを荒らす傾向にある。夕食後、自己紹介、合宿生活及び練習上の諸注意をして解散。

二十八日。晴。気温は相当上つてゐる。雪が湿つて重い感じだ初級者は、全制動及び回転。中級者はクリスマニヤの基礎練習から入る。あつと言ふ間に爆沈する者も多いが、大体勘が良く、フォームも正しく技術の向上も早い。軽い捻挫が出たが頑張つてゐる。午後からスロープを萱場の中腹へ移動する。傾斜も急になつたが午前の練習をくり返へす。谷の前方に明日全員で滑べる予定の上級スロープをリフトがカラカラと上下している。気温が急に下つて來たので時計をみたらもう四時半過ぎてゐる。調子が出てくると時のつのも早いものだ。雪がチラ／＼降つて來る中を引き上げる。今日は相当疲れたことだらう。

二十九日。雪。最後の日だ。昨夜來の雪が六十種は積つてゐる。全員でラッセルしつゝ滑つて固める。新雪が深いので転倒者続出

する。スコップで掘り出される者もある始末。男子は救助隊員よろしく飛び廻り、突込んだものは、はい出した大きな跡を、くやしそうに眺めている様子もほえましい。降雪が益々多くなり雪も相当深いので、萱場スロープへの移動も困難だ。午後は本格的な吹雪きとなつてくる。残念ながら寮の前のスロープで総仕上げだ。髪や眉も白く凍つてゐるが、スキーを楽しむことで一生懸命だ。暗くなる迄止めようとした位だ。日程からみて今日が一番からの方ぼうが痛むころだと思う。

三十日。晴天。帰り仕度くも完了。名残り惜しそうにスキーをつけて雪の上を歩いて来るものもある。新雪の一本道を踏んで池の平へ向う。予定通りには出来なかつたが、晴、雪、吹雪と天候の条件の異なる場合にスキーが出来たのも良い経験となろう。入浴時の事柄各部屋での色々の事柄、練習中の事柄の中でいやな思い出は、この新雪で清め忘れて上野駅列車に乗る。充分に空いている暖かい車内は疲れた体を心よい眠りに誘ってくれる。全員元気で無事でなによりだつた。妙高山に心から感謝の祈りを捧げつゝ眠つてしまふ。



創作

お便りによせて

教諭 宗内 昭春

松本君お便り有難う。大変なつかしく拝見しました。相変らず線の強い字を書いてゐるんだね。ついこの間卒業したような気がするが、君も立派に社会人として活躍している様子で、心から嬉しく思ひます。アナウンサーとしての仕事は僕達の想像以上に大変なものらしいね。先日お父様にお会いした時のお話では、暮の三十一日に帰つて、一日には出発したとか。仕事一筋に生きる君の心根をほめてやりたい。でもこのところ風邪にやられて休んだそうじやないか。余り丈夫な方ではなかつた君のことだから体には十分注意してほしいと思う。よりよい仕事をする為には先づ健康でなければならないからだ。それから君のお便りの中で「マスコミの渦の中で力一杯生活して居ります」という言葉が気になる。何だか負けそうな弱い感じだ。マスコミなんて所詮人間がつくつてゐるものだよ。君が構成しているとさぞ考へるべきで、一番大切なのは君なんだ。君自身なんだよ。素人考へたと笑うかも知れないが、マスコミなんて意識し過ぎちゃいけないと思うナ。何の仕事でも自分がその最善を尽すということだけが絶対なんだと思う。特に君なんか一番仕事の

出来る時なんだから、馬鹿馬のよう頑張つてもらいたい。極論すれば上役や同僚の思惑なんかも余り考へることはないと思う。年をとれば仕事が出来なくなるのと平行して、自然に角がとれて円くなるよ。むしろ余り感心したことではないと思うがね。「出る釘は打たれる」なんて言葉があるがそんなことを気にするようでは、大成出来ないというのが僕の持論だ。云いたい奴には云わしておくサ、自分に純粋な精神と恥ずるところがなければ、何等動ずる必要はないし、必ず分つてくれる人は現われるだろ。第一、人の陰口をきくような人間に、本当の仕事が出来るためしがないのだ。「雜魚は踊り、雜魚は騒ぐ、けれど誰か知らう百尺下水の心を、水の深さを」の心境でありたいね。勿論謙虚さを失ってはならないよ。直言してくれるような得難い人の意見には素直に、有難く耳を傾けるとか、時に前進のための自らの反省は絶対に必要であり、忘れてはならない。「森羅万象是れ悉く我が師」であり、路傍の石にも教へられるところがある筈であつて、自らの一挙手一投足を厳しく批判してみる機会を持つことを怠つてはいけないと思う。そしてそれは飛躍のためのものであるから「我れ事に於いて後悔せず」の気持で、過ぎ去つた過去にこだわることなく、勇猛果敢に前進することだ。何だか商売柄説教じみて来たようだから話題を変えよう。

お父様のお話だと結婚の問題もそろ／＼持ち上つて來ているようだが、特に君に考へてほしいことは古いものと新しいものの対立は何時の時代にもあるということだ。僕自身のことを考へても、君と同じ年令の頃は新しいものとして、古いものに対したこともある。ところが、教壇を通しての僕は、君達の眼に既に古いものとして映

じたことと思う。御両親と君との関係もそれと同じことが云えるのではないだろうか。勿論結婚の問題は君自身が決定することだが、独り結婚に限らず、新しくて古く、古くて新しいところにその理想を求めるべきではなかろうか。とに角一生の問題だから、十分慎重に考えてほしい。勿論君のことだから、よく考えて必ず幸福な結婚をすることだろうし、又、その事を心から祈っている。

大変長いお便りになつたが、無精者の僕が珍しくベンをとつたのだ。許し給え。

加地、中田の両君と時々会う由、遠く家を離れた三人のクラスメートが、同じ土地で今昔を語る気持はまた格別だろう。今度会つたらよろしくお伝え下さい。

御自愛を心から祈つております。

雨のち曇のち晴天となる

三年 増 井 円 子

疲れた体をひきずつている
人間が
私の心臓の中にいる
羽がおち、翼を折られた
小さな小鳥が
私の心臓の中にいる

息もたえだえの人間と小鳥
自ら起き上ろうと努力し
喘いでいる
二つの生き物が
私の心臓の中にいる
彼らを助けるために
私の心臓は強く伸縮する
やがて
心臓の伸縮は惰性になり
次第に衰えてくる

私の体は疲れ
呼吸困難となり
バッタリ倒れる
同時に
私の心臓の中にいる
生き物は
立ち上り
翼を広げ
どこかへ去つて行つた
そして
私の心臓はとまつた

彼女は唸っていた。そして、心臓のとまつた衝撃で彼女の目は開かれた。枕下の夜光時計を見ると二時をさしていた。
あと何時間したら私の体はある会社の中に居るのかしら。彼女の頭の中には一本、一本数えられる指があつた。フーン、七時間か……。私の生涯もあの会社の良し悪しで決定されるんだわ。もちろん試験にパスしなくちゃなんない。唯、自分だけの力が頼りなんだわ。よく眠つて、今まで憶えた事を十二分に發揮してどうしても入つてしまいたい。二度とあんなに苦しい夢は見たたくないわ。さあ、六時まで一寝入り――

彼女の声にならない呟きの後に、再び彼女の寝息が聞えて來た。八月十五日の午前六時。自覚し時計で目を開けた。顔を洗い、鏡に向つた。顔は晴れやかであり、グッスリ眠つた目は澄んでいた。

「樹子、今朝のサザエさんはおもしろいよ。見ないか。」
彼女につられて早く起きた父親が、新聞を見ながら言つた。

「うん。」
念入りに頭に櫛を入れていた樹子は返事はしたが、「私、漫画どころじゃないわ。」と思つていた。

「樹ちゃん、誰もあなたの髪を見る人なんて居ないわよ。それより早く御飯をすませて、早目に会社に行つていた方がいいのよ。」
台所と茶の間を往復していた母親は言つた。

「うん、すぐ食べるわよ。」

まったく、パパもママもうさいなあ。そんな事より、パパがどつかの会社に運動して、試験なしで入れてくれゝばいのよ。皆コ

ネがあるのに私ヨネなんて一つもないんじやない。ヨネがあれば、こんなに苦労しなくなつたつていゝんだわ。――と、なおも鏡に向つていた樹子はぶつ／＼言つていた。

「ほら、七時になるわよ。」
と、母親は催促した。

「はーい。」

樹子は、パツパツと体の毛をはらうと、食卓に向つた。しかし、その上にはいつもと変つたおかずは置かれていなかつた。父母と兄と樹子の四人の食事は、いつものように始められ、そして終つた。ソワ／＼していた樹子の気持もそれによつて落着いた。

「樹子、東京駅まで三十分は懸ると思って出ないと、会社に行つてゆつくり出来ないぞ。」
と、兄の直二が言つた。

「そうね、じゃもう仕度しようつと。」
冷たくなつたお茶をガブリと飲むと、自分の部屋に入つていつた。

出て来た樹子は、白のブラウスに紺のひだスカートの制服だつた。そして片手にピニールの袋を抱えていた。茶の間をちょっとのぞくと言つた。

「じゃ、パパ、ママ、行つて来ます、お兄さん一緒に行かない？」
「うん、行くよ、だから服着てるじゃないか。」

「ネクタイを締めながら言つた。
「樹子、落ちた後の事は心配しないでおちついてやるんだよ。」
樹子の父親はでつぶりと太つて柔軟な顔をしていた。

「あら、パパ、私にそんなこと言つたのはじめてね。」

樹子の憎まれ口に、父母は顔を見合せた。すると、仕度を終え

て、玄関で靴をはいていた兄が、

「樹子、早く出ないと電車が混むぞ」と、怒鳴つた。

「今、いくわ。」

「パパも、ママも私の成功を祈つていてね。」

玄関に見送りに出て来た母親の

「樹ちゃんおちついてね。」

と、言うのに返事もしないで、

「ママ、行つきます。」

と、元気よく玄関を閉めて出て行つた。

兄と肩をならべた彼女は、

「お兄さん、私どうなると思う? もし第一次にバスしたら何か奢つ

てね。そして、もし第二次にもバスしたらどうしようかな……」

こう云つて横の兄の顔をのぞいた。

「樹子、先の事を考へるんぢやないよ。現在だけを考へて進むんだ

ね。もし今自動車でもひかれたら何もならないじやないか。」

「ジンだ。縁起でもないこと云わないでよ。私の夢は大きいのよ。

お嫁さんに行く迄いろんな事をしたいわ。未来に希望を持つたつて

いいでしょ。」

新宿駅までの道を、兄妹はしゃべりながら歩いた。

「東京駅まで二十円よ。頂だい。」

樹子の手は兄の前につき出された。

「お袋にもらつて来たんだろう。いやだよ。」

てんだもの。」

「今さらそんな事を云つてみたつて仕方がないよ。決心して行くんだね。」

それからの彼女は何かを考えているような目つきをして、電車に乗つても彼女は終始黙つていた。

「あなた、あの子大丈夫かしら。何だがおちつかなくて。」
「大丈夫だよ。あれで案外、外ではしつかりしてゐるんだろう。俺は
バスすると思うね。試験問題だつてたいして難しくないんだろう。」「ええ、大分勉強していらしinんですけど……。だけど、あなた
どうしてあなたの会社に入れて頂けないのでですか。人事課の方にだ
つて頼めるじゃありません。」

「そうはいかんよ。あれにだつて試験の苦しみはさせておいた方が
いいんだよ。どうにもならなくなつたら仕方がないからうちの会社
に入れてもらうけどね。だけどいやだね。専務のお嬢さんだから、
とか何とか云つてちやはやされちゃ、樹子の為にもならんからね。」「そりやそうですけどね。それにしたつてどこか他の会社でも……
。」

「おまえはそんなに自分の子供に自信がないのか。樹子は大丈夫。

自分の力で入れるよ。」

世に云う親馬鹿というのだろうか。家に残つた両親はしきりに樹子の心配をしていた。

その頃、樹子は東京駅から会社のあるビルに向つて歩いていた。

「ケチね。いいぢやない。兄は妹に親切にすべきよ。そもそも人生の大

きな分れ道の試験を受けに行く時なのにさ。」

「お前こそケチだよ。勤めに出たら返せよ。」

切符で改札口を通り抜け、ホームへと歩んで行った。

「フ……兄貴ってやっぱりいいな。パパの脛をかじつてお医者さん

になつてさ……。お医者さんで社会では一応認められた地位を与えた

られてさ。早くお嫁さん貰えばいいのに。この兄貴には可愛い人が

似合いそうだな。長身の兄を後から眺めながら樹子は考へてい

た。実際は樹子はこんな事を考へる余裕はないのだが、どう

してか今の彼女には試験の事は頭の中のどこにもなかつた。

「フ……兄貴ってやっぱりいいな。パパの脛をかじつてお医者さん

になつてさ……。お医者さんで社会では一応認められた地位を与えた

られてさ。早くお嫁さん貰えばいいのに。この兄貴には可愛い人が

似合いそうだな。長身の兄を後から眺めながら樹子は考へてい

た。実際は樹子はこんな事を考へる余裕はないのだが、どう

してか今の彼女には試験の事は頭の中のどこにもなかつた。

「フ……兄貴ってやっぱりいいな。パパの脛をかじつてお医者さん

になつてさ……。お医者さんで社会では一応認められた地位を与えた

られてさ。早くお嫁さん貰えばいいのに。この兄貴には可愛い人が

似合いそうだな。長身の兄を後から眺めながら樹子は考へてい

た。実際は樹子はこんな事を考へる余裕はないのだが、どう

してか今の彼女には試験の事は頭の中のどこにもなかつた。

「フ……兄貴ってやっぱりいいな。パパの脣をかじつてお医者さん

になつてさ……。お医者さんで社会では一応認められた地位を与えた

られてさ。早くお嫁さん貰えばいいのに。この兄貴には可愛い人が

似合いそうだな。長身の兄を後から眺めながら樹子は考へてい

降りた後は、いつもの樹子にかえっていた。東京駅に着くと人の波の中に彼女は居た。そして降車口を出て会社へと歩き出したのだった。

彼女の手は緊張で震えていた。螢光灯の下に幾百もの机をならべ、その一つに坐っている樹子は小さな虫のようだった。

試験から解放された彼女は家に帰った。

「ママ、ただいま」

樹子は玄関を急いよくあけた。

「おかえりなさい。お疲れさま。どうだったの？」

「これよ。」

そう云つて樹子の両手のひらは閉じられ、そしてパッと開かれ

た。

「何しろいいや。もう私の役目はすんだなもの。もちろん私の出来る限りやつて来たつもりなんだけどさ、頭がボーッとなつちやつて、何が何だかわからんないの。みんなのを上る上つて云うのかしら。」

「樹ちゃん、上つたにしる実力を発揮して来たんならそれで十分じゃないの……。それで筆記試験の合格の通知はいつ来るの？」

「そんなの知らない。会社の人は二・三日中に電報で知らせますっ

てさ。今日は十五日だから十七・八日頃じゃないの。私そんなの待つてないで映画に行つてるわ。どうせ来つこないけどさ。」

「ねえママ、帰りに交通費ですってさ、ホラ。」

と袋から封筒を取出して見せた。そして封を切つて

「ママ、新品のお札よ。」
と、母親の目の高さに百円札一枚をヒラ／＼させた。
「どこか他の所受けて、又貰つて来ようかな。そうするとお金貯つちゃうわね。」

「まあ、樹ちゃん何云つてるの。もうすぐパパもお帰りだからちょつとお夕食のお手伝いしてよ。」

「はい。」

と樹子は母親の後について台所を行つた。然し手伝いもしないでウロウロしながら

「ママ、お兄さんね、今夜遅くなるつて。お友達と一杯やるんだつて。ウフ……。ママ、お兄さんに電車賃出してもらつちやつた。ブ

ープー云つてたわ。返しといてね。」

と云つた。

「あら樹ちゃん、ママお金あげなかつたかしら。たしか上げた筈だけど……。」

「うん、貰つた。あれで帰りにアイスクリーム食べやつた。やつと一人で入れたのよ。私つて案外純情でしょ。飲食店に一人で入れなかつたのよ。だけどさ、もうすぐお勤めでしょ。その位練習してもいいと思って……。三平ヶ入つたの。ね、ママあそこならないでしょ。」

母親は鍋の中をのぞいて、笑いながら

「樹ちゃん、そんな事練習しなくてのいいのよ。」

と云つた。

「あ、樹ちゃん、すまないけどお風呂のガスに火をつけて来てくれ

と台所から大声をあげた。
その夜樹子のみた夢は――

闇、やみ、ヤミ、
助けて
誰か来て
見えないの

両手を前に広げても
何もつかむことが出来ないの

闇、やみ、ヤミ、
一人放り出された私は
足を前に出す

一步、又一步、

次第に目の前は明かるくなる
だんだんと
やつと正常の明かるさに戻つた。

そこに
私がみつけたものは
一通の電報だつた

一六ヒライシヤサレタシわあーい

「樹ちゃん、樹ちゃん、どうしたの。」
うふーんと背伸びした樹子は目をぱちり開けた。そこには母親の顔があつた。

「何だママか、何?」
「ああすごい、ビールじやない。パパ、とっても冷えてる。」

「なんだじやありませんよ。とつてもうなされてたじやないの。」

「そう。私、今夢みたのよ。何時?」

「四時よ。」

「ナイス。あと一寝入りだ。ママお休み。」

「そう云うと背中をむけてしまつた。そして彼女は、もしかしたら今は正夢かもしれない。だけどもし落ちたら恥かしいから内諸にしとこう——、と思つた。」

朝。

「ママ。」

樹子は自分の部屋から怒鳴つた。

「みんなどうしたの、いやに静かじゃないの。」

手をふきながら部屋に入つて来た母親はクスリと笑うと、

「今何時だと思ってるの?九時過ぎですよ。パパも直二さんももうお勤めよ。」

「あらいやだ。私そんなに寝ていたの、ショックね。どうしてママ起こしてくれなかつたのよ。」

「だつてあんまり気持よさそうに寝ていたんですけど。」

十時頃、朝食をすませた彼女はさつさと小花の模様のあるワンピースに着かえた。そして鏡の前に来て洋服をなおしながら、

「ママ、映画に行つて来る。お小遣いちょうだい。」

「あら樹ちゃん、あなた一人で映画館に入るの。こわいんじゃないかったた?」

「平気よ。私十八よ。その位出来なくちや。何事も経験しなければね。」

と云いながら、母親のくれた五百円札をバッグにしまつた。

「行つて来ます。少し遅くなつても心配しないでね。私、家にいるの絶えられないのよ。」

それに向つて母親は軽く頷いていた。彼女を送り出すと母親は庭に出て行つた。

「かわいそうに。私のあの頃の時は学校を出るとすぐに結婚の話があつてお嫁に来てしまつたのに……。」

庭の花に水をかけながらつぶやいていた。そこへ

「ごめん下さいませ。」

と玄関から婦人の声がした。

「はーい。」

縁側においてあつた雑巾で足をふくと玄関に出て行つた。

「いらっしゃいます。どちら様で?」

と相手の顔を見た彼女は

「まあ、平木さんじやないの。いえ、今は堀井さんだつたわね。どうぞ、今誰も居りませんのよ。」

と云つた。彼女の女学校時代の友人だつたのだ。

「お久しぶり。今日はゆっくりしていられませんの。実はちょっとお願いがあつて伺つたんだけど……。私の子供が就職試験であなたの旦那様の会社を受けるんですけど、どうもあんな顔でしょう。ホホ: :私によく似てるんですよ。それで面接にはとても駄目だつて云うんですの。旦那様はたしか専務さんでしたわね。お願ひ致します」

「ママ。」

樹子は肩をすくめると、笑いながら、

「誰に会つたの?」

樹子は遊び疲れた顔をして帰つて來た。

「ママ、ただいま。渋谷で友達に会つてね、明日お天気がよかつた

夕方六時。

「ママ、ね、昔のよしみじやございませんか。これ失礼な物なんですけど、どうぞ。」

と、果物籠を出した。

「じゃ、これで失礼致します。どうぞよろしくお願ひします。」と頭を下げる婦人は必死だった。それは子を思う母親の姿だった。樹子の母親に何も云わせないでその婦人は帰つてしまつた。

「ママ、ただいま。渋谷で友達に会つてね、明日お天気がよかつた

夕方六時。

「ママ、海水浴に行く事にしちゃつた。」

「誰でも私と同じ心境らしいのよ。私の入つた映画館で会つたの。」

と云つた。

その時茶の間の廊下の電話が鳴つた。

「もし——伊藤でございますが……」

樹子は受話器をとり上げた。

「あら、私よ。何?」

「来たの、へえ、よかつたわね。それでいつ面接なの。明日?」

「それで小野さんは? よかつたわね。おめでとう。もう絶対大丈夫よ。じゃ、明日行かれないと。私? ううん、来ない。ダメよ。しようがないや。明日は一人で又映画にでも行くわ。じゃ、しつかりね。さようなら。」

受話器をおくと、

母親は樹子の浴衣を縫っていた。白地にあざみの花を散らした、可愛らしいものだった。

門の外で自動車のとまる音がした。床に横になつても眠れないでいた樹子は耳をすませた。パパだ。いやだな。また何か聞かれるのかしら——。外から話し声が聞えて来た。パパが誰か連れて來たのかしら——。母親にも聞えたのだろうか。玄関に出て行つたようだつた。ガラッと父親が玄関を開けた。同時に

「樹子、來たよ！」

と怒鳴つた。話し声は電報配達夫とのものだつたらしい。

「彼女はとび起きた。

「樹子、來たよ！」

次の瞬間、彼女の手の中には電報があつた。

『見せて！』

『一七ヒライシャザレタシ』

目を走らせると、

『嬉しい！ママ、ね、來たのよ筆記に受かったのよ。』

と、手に握りしめた紙を母親にさし出した。そして彼女は子供のようになるべくとまわつた。

『よかつたわね。さはやく寝て。明日ははやく起きるんじょ。』

『うん。ねようつと。』

と、再び自分の部屋に入つた。そして、私のあんな出来でもいいのなら、面接の時には何人来るのかしら。でも筆記に受かつたんだからいいや。このあとはケ・セラ・セラだわ——と思つた。

翌日の十七日。

睡眠時間が足りなかつたにもかかわらず樹子は五時半に目が覚めた。起きると床をかたづけ、そつと洗面所に行つた。

『フフ……、兄さんって寝相が悪いな。タオルあんなにはいでるわ。』

兄の部屋の前を通を時、薄いカーテンにすけて見えた兄の寝姿を笑つた。

『樹子、受かつてよかつたな。』

眠つてゐると思った兄の声に彼女はびっくりした。

『何だ、おきてたの。夜さ、電報が來たの。嬉しくなつちやつた。これから洗濯するの。』

『樹子でも洗濯なんかするのか。雨が降るぞ。』

と笑つた。

『イーッだ。』

樹子は兄に向つてあかんべえをすると大声で笑い出した。その笑い声で母親が目を覺したらしく起きて來た。

『樹ちゃん、どうしたの、朝から大声で笑つて。』

『ママ、ごめんなさい。だってさ、何がおかしいのかわからんないけど笑いたくなつたのよ。』

と彼女は目に涙をためて笑い続けた。

『お母さん、こいつ頭がおかしくなつたんじゃないのかな。』

兄はぼさぼさの頭をかきながら云つた。

樹子は二人を残して、洗濯物をかかえて風呂場へ行つてしまつた。風呂場ではジャージャー水道を出しながら歌をうたつていた。その歌は初めて聞くメロディーであり、また初めて聞く歌詞でもある

つた。つまり樹子の作詞、作曲だったのだ。茶の間では樹子の歌で起こされた父親が、

『おい、樹子はどうしたんだ。今日は面接なんじゃないのか。』

『そなんですよ。だけど早くから起きて洗濯を始めたりなんかして——。』

両親の話を途切らせる程の大きな声で、風呂場から、

『ママ、何時？』

と樹子が聞いた。

『六時半ですよ。』

これも又、家中に響くような大きな声で返事をした。

『三十分も何を洗つてゐるのかしら、あの子は。』

母親のつぶやきを聞いて、父親は風呂場に行つた。

『樹子、いい加減にしてママの手伝いでもしたらどうだ。』

と戸を開けて云つた。

『パパ、お早う。』

樹子は大きな目をくりくさせて云つた。

『お早うじゃないよ。朝っぱらから大きな声を出すんで眠れなくなつたじやないか。』

愛娘の気嫌があまりにもいいので面くらつたようだつた。そして、あの電報一本でこんなにも喜べるものかと感心した。そして又これもこの子にとっては、人生に於いての一つの大きな試練であるのだ、とも思った。

その日の午前九時。

樹子は再びビルの中にいた。人事課の人案内で大きな室に通さ

れた。控室だ。個人面接——家庭の職業、学科の事、クラスの席次健康の良否——等簡単なものではあつたが皆緊張していた。それが終つた人は順に身体検査を受けた。視力、身長、体重、胸囲、血沈レントゲン等だつた。今日の樹子は落ち着いていた。

午後四時頃、全ての検査は終了した。帰宅の途中、彼女は心の中で今日の面接には自信があると思っていた。体のどこにも欠陥がないれば採用内定の通知が来る筈だと思っていた。なぜなら、面接の時会社側の人が、

『採用になつたらこの会社の為に働いて下さいね。』

と云つたのだ。樹子だけに云つたのではないかもしれなければ、

彼女にとつては嬉しい言葉だつた。然し彼女は家に帰つても、自信があるようには云わなかつた。

『ねえ、ママ、あの会社とつても待遇がいいのよ。お昼に食券くれ

て、これで地下に行つて食事をして来て下さいですって。』

『それで採用の通知はいつ頃になるの。』

『早く整理が出来れば明日じゃないのかしら。だってレントゲンの写真もあるしさ。二・三日中には来るでしょ。』

その夜から樹子の態度は平常通りに返つて來た。兄に対しても従順な妹になり、父母に対しても優しい娘になつて來た。

そして十九日。

庭の草花をいじつてゐると門が開いた。午後四時頃だつたろうか。

「伊藤さん、電報です。」

電報配達夫だった。樹子の耳には彼の声がこの世で一番親しい人のように聞えた。

「ママ、ママ、来たわよ。」

と云いながら台所に走つて行つた。裸足でいた彼女は、バケツに水をくんでもらつた。それに両足をつつこんで、交互に足を洗つていた。電文をよんだ母親は、

「樹ちゃん、よかつたわね。おめでとう。」

「ふん」

照れたように鼻で返事をした。と、電話が鳴つた。

「もし／＼、伊藤でございます。」

母親は前かけで目を押さえていた。

「はい／＼、樹子ですね。どなたですか。あ、小野さんで。」

その時にはもう樹子の雑巾でろくに足もつかないで上つて来ていた。床にはつま先たて歩いた彼女の足跡がついていた。

「もし／＼、あたし。どう？ もう決つたんでしょ。昨日？ おめでとう、よかつたわね。あたしも今来た所よ。それで中井さんは？ そう……。明日ひまでしょ。来ない？ 二人で。久し振りにおしゃべりしましようよ。ね、じゃ一時頃ね、きっとよ。さようなら。」

「ママ、明日中井さんと小野さんが来るの。」

と云つた。

「…………」

「ママ、聞えた？」

「ええ、聞えますよ。何だか嬉しくてしようがないのよ。」

あわてて足をひっこめて

愛にすがりつく

そしてそつと

また

耳を傾ける

愛から片手をはなす

残つた片手はどうしよう

不安

…………不安

今の私の気持つてこんなものかも知れないと思った。

発作

二年 藤 沢 昭

研吉は六畳の部屋に一人、腹這いになつて雑誌を読んでいた。しかし、氣持は部屋の隅に敷いてある座蒲団の上に、先程から快さそうに寝ている猫に注がれていた。彼は猫に触つてみたかった、が、やつと我慢していた。母がまだ台所で茶わんをガチャ／＼いわせていたからだ。もう少し待てば、母は髪結いに行くはずである。彼はさつきからその留守番を頼まれていた。もし今猫に鳴き声をあげさせたらもう終いである。母は絶対に黙つているはずがなかつた。台所から走つて来て、猫を取上げて連れて行つてしまふに違ひなかつ

そう云う母親の顔はまさに泣き笑いだった。

帰つて来た父親と兄から

「おめでとう」

と云われた彼女は黙つてうつむいてしまつた。そして膝の上に一滴、また一滴と水玉を落していった。

愛で成立した

この私が

愛に守られて育つた。

そして今

高く積まれた愛の中で

大きく飛躍し

その外側に出てしまつた

愛を背にして

一步足をふみ出す

聞えて来たものは

苦しみ

憎しみ

もだえ

愛のささやき

呪い

罵声

——だった。

た。

母は、この貧弱な、そして後足のいやに長い黒猫を異常なまでに可愛がつていた。そして、母がこの猫を可愛がり、彼にいじらせまいとすればする程、彼は猫をかまいたがつた。

「じゃ、行つて来るよ。」と云うと母は出て行つた。研吉はむづくりと起き上ると台所に行き、部屋帯を手にして帰つて來た。彼は猫のそばにそつと立つと、帯を猫の上に放り出した。驚いた猫はパッと身を起すと、サッと次の間に逃げ込んで行つた。猫はかゝつて彼に帯でひどくいじめられて以来、帯に対しても大変敏感であつた。彼は投げ出された帯を拾うと猫を追つた。次の間には逃げみちは一つもなかつた。猫はビタリと閉つた障子にぶつかつてはドサリと畳の上に落ちた。逃げみちがない事を知ると部屋の隅に小さくなり、彼の顔を見て悲痛な鳴声を発した。その目は恐怖に全く開き、ギラ／＼と光つてゐた。彼は敷居に立つと猫の逃げみちを塞いだ。猫は、彼が手にした帯で畳をドンと突く度に首をくすぐめた。彼は帯をかまえると、一部屋に踏込んだ。せつば詰つた猫は、いきなり彼の足もとをかけ抜けようとした。が、一瞬おそかつた。彼の手がギュッと細い胴をつかんでいた。彼はそのまま持上げると、片手で宙にぶらさげた。つかまえられた猫はもう鳴けなかつた。彼は帯を放すと、両の掌にそれを乗せた。そしてポンと放り上げた。猫はくるりと器用に回転すると、再び掌に落ちて來た。再び彼は高く放り上げた。猫はまたくるりとまわつて落ちて來た。然し今度はうまく掌には落ちなかつた。爪をいっぱいに開き、ガツと彼の腕にしがみついた。重さで爪が腕に食込み、そのままずずつと下つた。彼はあわてて猫

をかかえた。ずきんという痛みが感じられた。血がジーッと傷口からじみ出した。彼は傷口をおさえようとはしなかった。その目は憎悪でいっぱいであった。抱えた猫の両手と両足を一まとめに握ると、じつにらみつけた。新たな血が流れ出し、傷口がずき／＼と痛んだ。彼はいきなり猫をたきつけた。

一瞬の悔悟の情が脳裡を走った。その目は無惨にたきつけられた猫の上に注がれていた。虚な目が天井をさしていた。最早猫は少しも動かなかった。彼は茫然とした。全く自分がわからなかつた。頭が混沌としていた。胸がはげしく脈動した。ただ反射的な行動であつた。「はやく始末をつけなければ。」という考えが体の隅でふつと湧いた。無意識に立上ろうとしたが、ひざがガク震え、ヨロヨロとすわり込んでしまつた。はいざるようになに猫に近づくと、死骸に手をのばした。粘い血がタラタラと手を伝つた。彼はふら／＼と立上ると庭に出た。片手にはシャベル、片手には死骸がむぞうさに握られていた。

頭は全く空虚だった。手だけが連続的に動いていた。彼は両ひざを土につけ、庭の隅をほつた。穴に猫を放り込み、土をかけると、逃れるようにそこを去つた。彼は丹念に手を洗つた。混沌としていた頭が静まって來た。再び部屋に入ると、猫をたきつけた場所に目を落し、あわててそらせた。力なく座りこむと深く呼吸した。

ガラ／＼と戸を開けて母が帰つて來た。彼はあわてて再び雑誌を手にとると、パラ／＼と無意識にページをめくつた。

「ペルちゃんは。」
彼はどうとした。

「さつき外に出て行つたよ。」
彼は無造作に云つてのけた。普段の彼であつた。

道 標

一年 田 島 弓 子

私はM高校の一年生、明朗活発なお嬢さんである。家は郊外の静かな住宅街にあり、姉妹はN女子大に通つてゐる姉が一人、あとは会社勤めの父と家の中にくすぶつてゐる母だけである。

姉は三月卒業見込みで売れ口も「A貿易会社」と決定している。この就職難にあっても、秀才で人間が出来ており、おまけに美人の姉は迷う事なく合格したに違いない。

家は特別豊かではないが、なにぶん女の子が二人であるから、父も母も、大学行きを賛成し、私も彼女を誇りとしていたから、真先に賛成したのは、四年前の事であった。今も言つた通り、私は彼女を誇りとしていた。しかし、平安朝の美人を思い起こすような優雅な姉に、女として「しつ」とした事もあった。

十二月のある土曜日、その日は冬にしては珍しく真青な空が高く、太陽に背を向けると、ボカ／＼するような日だった。「ただいま。」私は気分の良さに勢い良く裏戸を開けた。「お帰りなさい。今日は早いのね。」「いやだわ、お母さん今日何曜日? ところでお昼何? 私チャーハンが食べたいな。富貴亭の前通つたらチャーハンの匂いが青空に流れ、お腹が空いているとすぐ嗅覚が敏感、どう

してかしら?」「よくしゃべる娘ね。早く手でも洗いなさい。」私は鞄を投げ出すと音を立てて手を洗い、うがいをした。口の中が冷たくすがしかつた。「あのねえ、お母さん、今日私達のクラスで大体就職と進学に分けてみたのよ。そしたら女子は殆ど全部が就職よ。」「そう、それで幸ちゃんはどっちにしたの?」「私? 私は就職。」「あら、どうして?」「だって私それ程勉強好きじゃないもの。それに……。」私は自分の心の迷いをどう整理し、説明したら良いか考えたが、面倒くさくなつて傍に切つてあつた「たくわん」を一切口に入れ台所をとびだした。

縁側で寝ころび本を拝げていると、裏の方で声がした。姉が帰つてきたりしかつた。

「幸ちゃん、今晚、東京タワーに連れて行つてあげる。」「わあ! 本当? でも、どうして?」「試験も終つたでしょう。それに明日は日曜日だから。」私は胸がワクワクした。夜、八時、姉と私は東京タワーの展望台からネオンの海を見下ろしていた。私は傍の望遠鏡に十円玉を落し、のぞきこんだ。「わあ! お姉さん東京湾がみえる。ネオンがきれい!」望遠鏡で見ると青いネオンの光をちら／＼と揺らす海! 私は何とも言えぬ感動を覚え、その場所から離れなくなつた。私達二人はしばらくの間黙つて見つめていた。お互にどんな事を考えていたのであるか? 「お姉さん、どういう目的で大学行つたの?」私はボソンと尋ねた。姉はちょっとこちらを向き、すぐ私の気持をくみとつたらしく「私はね、勉強したかったのそれだけ。幸ちゃんはどう思つてゐるの?」「よくわからないけど目的から言うと、お姉さんの純粋だと思うな。私なんか大学を。私の『大い

なる理想』を実現するための手段に考え方やうわ。でも此頃になつて自分にそれだけの才能がないのじゃないかと思うの、それなら高校を卒業したら普通のオフィスガールになり、三十四、五になつたらいい奥さんになろうと思つたら肩の荷が降りたような気がしちやつた。そうなると大学なんてバカらしい。そのくせあと二年位で学校生活が終りだと思うと淋しくて。人影がまばらになつた展望台で私は頬が冷たい風によつて吹き去られ、痛いようになるのを感じながら言つた。「幸ちゃん、私は貴女にああしない。こうしなさいなんて言わないわ。今幸ちゃんはずいぶん迷つてゐると思うけど、誰だつてそういう時はあるじゃないかしら。私だつて大学へ入るのにずいぶん迷つたのよ。でも勉強が好きだという事からここまで通してきたの。迷いをのりこえ目標が定まつたら、それに向つて突進しなさい。」姉は平凡な答をした。だがそれはあの揺れるネオンと共に私には印象深かつたのである。

時計の針はもう九時に近かつた。そして家のあるT駅についた時は十時半をまわつてゐた。駅員だけが寒さうに切符切りを、チャキチャキとならしていた。「幸ちゃん、お好み焼き食べて行かない。」「賛成。」二人は街角の小さな店に入つた。狭苦しい店の隅の方でラジオがかかり、一人の男が週間誌のパズルと取りくんでいた。男は新聞を拝ねながら腰を下ろした。今思ひ起こせば違うような気もするが、その時の私には、彼等が彼等の本当の姿をさらげだしているように思ひ、女主人が鉄板の上で材料をかきまわしているのを

見ながら何か淋しい気持に捕われた。……いつか私が家庭を持ったらこんな所に来てほつとするような夫にならないよう気をつけ、良い奥さんになろう……。

私の迷い、いや誰でもが一度は経験するであろうこの迷いはまだ当分続くと思う。しかし答の出る日もきっと来る。私は姉の横顔をみた。教養を積んだ氣品のある横顔であった。

クリスチヤン

二年 大塚洋子

あれは寒い晩でした。ピュウピュウという強い風の音にもかかわらず、部屋の中は何となく暖かでした。熱い炬燵に足を入れ、少くともよそ目には幸せそうな、団欒の一時を過していました。

もう十時をまわっていたでしょうか、その男は酔っているようでした。車の止まる音とともに、呂律のまわらぬ声で、人を呼ぶのが聞えました。『何だろうね、今ごろ』と云う母の咳きが終らないうちに、姉が飛出して行きました。随分長い間姉は戻りませんでした。十五分、否、もっと。いいえ、どうしたんだろうと思つて、姉の帰りを待っていた私達にとって、それはとてもなく長い時間に感じられましたが、然し、実際にはたった五六分の事だったのかも知れません。

姉は蒼い顔をして戻つて来ました。泣いているようでした。母が『どうしたんだい』と聞きましたが、後で話す、と怒ったような声

でボソリと云つただけでした。今迄の、よそ目にだけでも楽しそうに感じられた部屋の空気は、一遍にけし飛んでしまいました。心を探りあい、相手の気にさわらぬようにク猫がクシャミをした。部類の話をする、そんないつもの我が家になつてしましました。

小菅さん、あなただつたんでしょう、あの晩の男の人は。

嬉しそうにアメリカから帰つて来たら、治子にも紹介したげるね』と姉が云つてから、何年経つたか覚えていませんか。一年の予定のアメリカ行きから二年経つても、三年経つても戻つて来ない。やつと去年の事じやありませんか。四年半も経つたこの冬なんですよ。ここ一年ばかりの姉の姿を見ていると、あなたの家に『結婚詐欺』などなり込みたいような衝動にかられたものです。今迄別に内親だとも思わない姉でしたが、この事に関する限り、同じ女性として大いに氣を吐いたものです。そして、あなた一人を見て、男の人を軽蔑したものです。

姉はクリスチヤンであるあなたの願いで、随分前から教会に通っていました。そしてその次にあなたは、牧師になりたいと云い出しました。姉の目的は有能なる牧師の妻となる事に塗り変えられて行きました。でも姉には(私の家の者には、と云うべきかも知れませんが)、クリスチヤンになりきる要素が欠けているのです。現実的で、お腹の空いた民衆には、信じ難い、実行し難い神の教えよりも、パンを与えるのが先決だ、という考えの姉(私達)には、キリスト教というものは夢にしかすぎないのです。キリスト教なんて生活に追われていない人の道樂じゃないでしょうか。私はいい事をしているのだ、立派な人間なのだという、自己満足の道具じゃない

十二月二日

三年 畠中徳明

今ジャンパーのポケットを探つたら、『平和』の中に紙きれが入つてた。
『タバコは未だかんばしくありませんよ、もう少しがまんしましょ』と、母の字だ。口で直接言わずにこのような方法で注意を与えてくれた母、今の僕には大へんうれしかつた。

何とも言えないしさだ。

お母さん聞いて下さい。

母へ

『ねえお母さん、学校の成績もかんばしくない、いかに勉強したらいつか分からない、まして机に向つたとてその効なし。でもそれ位ならまだいい、僕らの年頃には色々のことがありすぎます。一つには、激しく異性を求めることです。でも内気な者というのは損ですね、自分の思つてることを相手にうまく話すことさえ出来ないんだ。

夏休みからこつち、いや二年も前から或女性を愛していた。愛してたんだと言ふとキザに聞こえるな、そうだ、好きだつた。お母さんも写真で見たことがあるでしょう?僕はじつといられなかつた。今年の初め頃だつたあ、うまく自分の言いたいこと書けなかつたが出したんだ、手紙を、長い文だつた。長い間何の返応もなく

その時の僕を考えてみてよ。お母さん、どうしてよいか分からなかつた。

一ヶ月位の後、やつと返事を受けた。僕はその文を長い間何回もく読み返した……、そしてお母さん、結論はどうだつたと思う？ 僕自身分からなかつた。空虚な生活が続いた。何の夢も持たずして。そして夏休み。

予備校へ通つた。英語なんて全然ついて行けない僕でした。迷いとあせりがやつて來た。自分の学力の低さを意識して……、そしてこれまで自分の希望したコースを断念し、平凡な生活を送るコースを選んだのです。もと僕の肌に会わぬ選択だったのでしょうか？ 子に期待する親を裏切つて、芸能への道をあきらめました。何回、目に見えぬ壁にぶつかった事か、一週一度のレッスンに通うことをさえおつくうになりました。僕はこの勝負に負けたのです。

そして十六日。お母さん覚えているでしょ？ 八月十六日を。僕は自らの計画によつて、自分の意志がいかに強いか、そして自らの勇気をためすため、唯一人出かけたんだ自転車で、朝五時前家を出た。お母さん一人見送つてくれたなあ。有意義だつた三日間の旅行。初めて行つた外房総、勝浦のあの澄みきつた海と空、夜は星空をながめながらねた。帰つてから後、僕は自分といふものに大変な自身をもちました。僕にも他人にまけぬ勇気と強い意志がある、と僕は強くはつきりと自覺しました。

そして、一ヶ月過ぎた頃から、好きであつた女性をあきらめねばと考えはじめました。いや、九月の初めにはもうその考えが強かつたのでした、が再びその時、彼女を忘れねばあきらめねばと強く考

えました。彼女と僕との環境の差、学力の差、容貌の差、色々とにかく理由をつけてあきらめようと努力しました。でも十月の終り頃つまり誕生日の前頃からです。再び彼女が僕の胸に現れたのが……。思い出というものは煙の如く消えるものじゃないのでしょうか？

僕はタバコを吸いはじめました。口から出るそのけむりに乗つて、彼女の姿が消えていくような気持になつたのです。そして学校で面白くなかった時、又ふつと憂うつな気分になつた時などよくふかしたものでした。喫茶店へよく行きました。その頃までは一人で食堂へもはいれぬ僕でしたが……。内に入ると雰囲気でふかせるんです。僕の部屋のマッチがたまりだしたのもそのためです。

しかし、いくらそのようにしても、一度深く胸にきさんだイメージというものは脱ぎ捨てる事は出来ないんですからね。ます／＼深くなるような気持です。でも……。

僕は来年大学を受験せねばならない。この危つかしい頭で。休職中の父を安心させるにもストレートで入学せねばという考えでいっぱいです。時々、ある授業の時など、彼女が目に映つてしかたがないです。そうかといって、彼女の姿がないと、キヨロ／＼して探すんだ。われながら恥かしくなる。あきらめようとした彼女を思い出すなんて……。

でもねお母さん、僕は今夜、新たにものすごいファイトがわきました。ファイトをもつて受験に臨みます。そして幸いに大学に合格しました時はじめて彼女への交際をプロポーズしようと考えました。大学合格の時です。

でもねお母さん、僕は今夜、新たにものすごいファイトがわきました。ファイトをもつて受験に臨みます。そして幸いに大学に合格しました時はじめて彼女への交際をプロポーズしようと考えました。大学合格の時です。

お母さん、見ていて下さいよ、タバコはやめます。そして強い意志と勇氣をもつて受験に備えます。

お母さん。その人の名はまさ子と言うんです。

〔追記〕

この三年間悔いのない日々を過した事がなかつた僕に、今考えさせられる時が来ました。そして、よこ道にそれそうになつた僕に、温い母の注意で再び自分という人物を認識させられたのです。

下 敷

一年 深 野 博 子

○月×日

私の御主人は、恵子さんと言つて、とてもかわいらしい女の子だ、だけれど少し御転婆で時々私を泣かせるのです。

今日も恵子さんは、私を頭の上に乗せて、こしごし私を擦り附けている。「熱いよ、熱いよ、痛いよ」摩擦ですごく熱かつたので、私は、大声で呼んだ。けれどちつとも恵子さんは聞えない。しばらく擦り附けていたかと思うとスーと、私を上へ上げた。すると私に沢山の毛がついて來た。「立つたわ、毛が立つたわ。」恵子さんは、たあいのない事をして喜んでいる。私の痛がつているのも知らないで、こんな事を、ちょび／＼やるのよ。もう今度又したら、字が上手に書けるようにしてあげないからね、覚えていらっしゃい。

うれしいわ、やつと恵子さんの病気が、なおつて、私は、こうして、毎日恵子さんといつしょに学校へ行くのが一番うれしい。恵子さんとお附合をして、もう二年になるけど、随分、色々な事があつたわ。文房具屋さんの店先に、並べられていた時、恵子さんが私を、買つて下さった時は、本当に、うれしかつた。これからもずっとお附合して下さい。

○月×日

「ああ疲れた。」恵子さんは、こう言いながら、汗びつしょりになつて教室へ入つて來た。そして私を机の中から取り出したかと思うと、パタ／＼と扇ぎだした。「熱いわねあんな遠くまで走らされたんじゃあ、まったく疲れちゃうわ。」私は、マラソンから、汗びつしょりになつて帰つて來た恵子さんを、涼しくしてあげよう、私の体を一生懸命に搾らした。「涼しいわ。」恵子さんが満足しているので私は、とてもうれしかつた。でも辛いわ、下敷の役目のほかに、うちわの役目もしなくては、ならないんですもの！

○月×日

恵子さん、恵子さん、どこを見ているの、よそ見しているちや駄目を覗いているのね、あまりYさんはばかり見ちや駄目よ。そりや恵子さんが、Yさんに好意を持っている事は知っているわよ、だって何時も、私に「T・Y」なんて書いているのですもの。でもね、授業中に、そんなにキヨロキヨロして先生のお話を聞いていないと後で困まるわよ!」

「紫田恵子さん、今の質問に答えて下さい。」一瞬、先生の鋭い質問。「はい、えーとえーと。」あらどうしようかしら、恵子さんが困っているわ、だから、あまりキヨロ、キヨロしてはいけないって言つたでしょう。ああ、恵子さんに、答を教えてあげる事ができたらしいのだが。

○月×日

私の身体の一部が破損してしまった。恵子さんは、隣の年子さんとペチャクチャ話をしている。「昨日映画を見て来たのよ。すごく良かったわ」「へーどんなの?」こんな事を話しながら、私をコツコツと机の端に、たたき附ける。「それがね、女の人の名前は良子つて言うのよ、それがね、……」まだ私をたたき附けている。いいかげんに止めてくれないかしら、私がこわれちゃうのに。

「その人が道を歩いていたら、向うから、ステキな人が、駆け出して来たかと思うと、突然その人とぶつかったの、あ!」私は、とうとうく壊れてしまつた。「あらこの下敷、折れちやつたわ、弱いわね、やっぱり安いのは駄目ね、ウフフ。」まあ何とひどいことを



言うのかしら。私は、今まで殆んど毎日、恵子さんのお役に立つて来たのに、今になつて、こんな安い駄目ね、なんて、これでも私は、八十円したのよ。それに笑つたりして。それから私は、とうとう恵子さんに使つてもらえなくなつた。恵子さんは、新しい、私よりもっと立派な下敷を買ったのです。私は捨てられもせずに、本箱の隅に立てかけられてしまつた。でも私は、恵子さんを憎みません。だって恵子さんは、役にたくなつた私を捨てないでくれたのですもの。それに恵子さんは、すごくかわいいから。でも、ちょっと悲しいの。

心の支柱

ささえ

二年 犬 飼 治

「今日は、山形さん大分寒くなつて来ましたなあー。」

と声を掛けながら駐在所の巡査が入つて來た。庭で洗濯をしていた千代は、乱れた髪を分きあげながら

「駐在の旦那で、あゝいゝ天氣ですね。こう早う寒うなると仕事が出来なくて困りますよ。何か御用で?」

「今日は戸籍調査ですわい。いそがしゅうてくどうもやりきれんな。相變らず農協の方には行かれてますかね。」

「今日も行つてますがね。何もある事がないと行きますが、どうせ行つたつて何の役にもたたんでしようがね……。」

「いや村なんかの役員なんて行つたつてする事がありやしませんがな。それでも行つてると何かの時に役立つ事があるですわい。家にくすぶつてくも仕方がないですからなあー。それからあなたが四十四ですかね。」

「あゝどうも年とるのは早くてねー。もう婆さんですよ。」

「皆同じですわ。わしらもこれで五十を越えちまつたんだからいやになるね。だんく年のはぎで行くのが早くなつてのー。」

「本当ですね。もうじきおむかえが来るんですかね、厭んなつちやいますが——」

「まあ、お茶でも一杯あがんなさい。」

といながら湯呑をさし出した。

「いや、ありがとうございます。今年の出来はどうだったね。よく出来たらしが——。」

「いや、どんでもない。うちあたりは供出を出しちまうと食うのによくでね、皆いゝく云いながらとつて見ると大した事なくて平年よ

り悪いでしてねえ。それに肥料なんかは前よりも沢山入れてあるんだから困ったもんですよ——」

「お百姓も又苦しくなつて来た様ですなあ。殊にこのあたりは山の端だ——。あんまりいゝ土地じゃないから余計ですかなあ。」

「それもそうですね。又町に行くのに一里も二里もあるんじやいやになつてしまつて、町の物の値段がわからないから市場へ野菜持つて行くにも骨おりながら金にならんですかねえ。」

庭にはなしてあるにわとりがあちこちと銅をあさつていた。柿の木の葉も大分落ちて、午さがりの陽に赤く染つていた。

「どうもごちうさん。これからまた廻らなきゃならんから……」

「巡査は飲みほした湯呑みをかえしながら立ちあがつた。

「そうかね。何の愛想もなく——。御苦勞さんでした。」

巡査はしばらく世間話ををしてから出て行つた。千代は茶を片付け又洗濯の残りに精を出しはじめた。猫があたたかそうに屋根で長々とねそべっている。この草深い片田舎にはすでに秋が深まつてゐるのだった。庭のすみにある枯れかかった尾花がさや／＼と秋風になつていた。

夕方長男の春夫が何時もより遅く帰つてきた。そして家に入るなり泣き面となり奥の座敷の方に行つてしまつた。

「喧嘩。大きくなつて未だやつてるのか。」

夫はぼやきながら

「さあ、早く飯してくれ。俺も大分腹がへつたようだ。」

「ねえ、お母ちゃん、先刻ね、隣りの武ちゃんがねえ、家の兄ちゃんが学校で金を取つたって残されるとるつてよ。」

「さあ、早く飯にしてくれ。俺も大分腹がへつたようだ。」

「ねえ、お母ちゃん、先刻ね、隣りの武ちゃんがねえ、家の兄ちゃんが学校で金を取つたって残されるとるつてよ。」

当にとつたのかい。」

千代ははつとした。口にしていけない言葉を出してしまつた。そんな事を云つたら春夫はたよる人がいなくなる。せめても愛情のやどり場所とし母だけは決して子を疑つてはいけないのに。そうしなければ子供はひねくれ又反発して母への愛情もなくなり、肉親への情愛もなくなる。それであつてはならない。決して母だけは子供の心を信じてやらなければ子供がかわいそうだ。あゝいけない言葉を云つた。千代は悔いた。

「ちがうよ、お金なんかとらないよ。」

春夫は泣声でわめくように云つた。

「俺は一番最後まで教室にいたばかりに金とつた云うだ。俺ら金なんかとらないにー。皆そう云うんだー。」

「とらなければどうしてはつきりとりませんと先生に云わなかつたの。」

「先生もとつたんじゃないかつて云うんだ。」

「そう——。」

千代は困つた。しかし我が子への愛情は常に我が子を信じてやらなければとー。

「あゝ、そう……。」

千代は途方に暮れた。春夫はいつか涙に濡れた顔を上げて心配そくうに母の顔をみあげていつた。千代は春夫の顔を眺めてこれほど母を慕う我が子にどうして疑うことが出来よう——。

「じや明日お母さんが学校へ行つて見るからね、じや、もう御飯だ

さと子が母の方に向つて心配そくうに云つた。

「うん、そんな事僕にも云つたよ。」

と秋夫までが変な面持で云うのだった。

「えゝ、それ本當か、誰がそんな事を。」

千代は茶ぶ台をふく手を急にやめてさと子に再び問い合わせた。

千代の顔色はさつと變つた。目にはおのゝきの色さえあつた。

夫は御膳にむきかけたのをやめていろいろ端のたばこ盒をひきよせながら

「大変な事をしたもんだなあ。」

と大きな吐息をついた。そして口にキセルを持って行つた。千代は又声をかけた。

「春夫、出ておいで。」

しかし声はなかつた。しかしそ後泣きじやくつた声がかすかにきこえてきた。

「困つたことになつた。あゝ。」

千代は溜息をつきながら奥の方へ入つて行つた。さと子と秋夫は自分達が何か悪い事をしたかのような面持で千代の後姿を眺めていた。鉄びんがごと／＼と煮えたぎつて音をたてていた。

千代は奥の間で机に俯伏して泣きじやくつている春夫の肩をゆすつた。

「春夫、どうしたんだね。よくお話し、ね。」

春夫は千代の声を聞くと余計に肩を振るわして泣きはじめた。今迄こらえて来た悲しみがあふれる様に泣き出した。

「えゝ、泣いてばかりいたつてわからないじやないの。えゝ、金本

から早くおいで。顔を洗つておいで——。」

春夫は泣いてくしゃ／＼になつた顔をなぜながら井戸端におりて行つた。千代が部屋にもどると皆心配そくうに千代を見上げた。しかし一間おいての話はみんなに一部始終聞えていた。相変らずぼすやりしていると云うよりぼうぜんとしていた。

「さあ御飯にしよう。」

千代は皆に元氣をつけるつもりで云つたのだが事実は自分の心のさびしさをふりはらおうとする虚勢にしか他ならなかつた。

「うふん、そうしよう。」

夫は重々しく口をうごかして云つた。皆変な顔をして飯を口にはこんだ。皆心配しているのだろう。食欲は一向に進まず、いつも一番食べる秋夫でさえ二膳しか食べなかつた。千代は御飯が砂のよう口の中でしゃり／＼するのを感じるのだった。

翌日千代は学校へ重い足をはこんだ。勿論春夫は学校へ出でていなかつた。担任の先生に面会して話をきいてみると、丁度昨日は子供銀行の貯金日であったそうだ。そして丁度三時間目に皆が体操の支度をして出た時に、その前の時間まで春夫のとなりにすわつてゐる森山という子がもつっていた二百円の金が、体操を終えて帰つて来て調べるとなくなつていていた。そして一番最後まで教室に残つてゐたが、春夫であつたというのだ。そして、調べたがなく結局春夫に一番嫌疑がかかつた。それにもかかわらず、春夫は一向にはつきりした事をいわず、最後には泣きだす始末。困り切つてあとでのこしてみたけれど要領を得ない。そうなると、一応嫌疑をかけざるを得な

いというのである。しかし、先生も別に本当に春夫がとつたものだとは断定していないらしく千代には受けとれた。それで、千代に家で良く春夫に聞いてみてくれというのである。千代は穴があつたら入りたい気持にさえなつた。千代は重い足を引きすりながら、学校を辞した。その話はこの小さな村には一日にしてひろまつてしまつた。千代をはじめ山形家の人の姿を見れば、人々は後指をさして陰口をたゞくのであつた。一人としてかばつてくれるような人はいない。近所の人々も、とかく白い目で彼等を見る様になつた。

千代は幾度となく、そつと春夫に問うてみるのだった。しかし、春夫は何時も否認するのだった。又、それをとつたにしても、その金をつかつた様子は微塵もみせなかつた。千代は春夫を信じていたが、しかし余りにも春夫がはつきりしない時には、その確心はゆらぐのであつた。そしてふと「もしやと思つた。しかし千代は常に我が子春夫を信じたかった。もし母たる千代が信じてやらなければ、誰が春夫をかばおうか。かばわれない春夫はどの様になるのか」。

母の意は常に強かつた。そして千代は何時も春夫に問うた後に、「春夫、お前がそんなことをいわれるのは、お前がはつきりしないからだよ。お母さんはお前を信じてるよ。もしこれがお前が正しい事がわかつても、お前が正しい、いい人間だという事は時の流れが解決してくれるんだから、辛抱しなくちゃいけないよ」とグチをこぼすようにさとすのだった。

その事件が起きてから数日後の昼下り、千代は春夫の事などぼんやりと考えながら、針仕事をしていた。側でさと子が机に向つて筆

を動かしていた。すると、あわただしく村の若い者がかけ込んできた。

「山形さん、大変ですよ。秋夫ちゃんが自動車にはねられて大怪我してますよ。」

千代は氣が遠くなりかけた。しかし、突きに彼女は立ち上つてい

た。

「何處で——。」

「あの松並木の処から県道に出る十字路の処で——。今若い者や近所の人がよつて応急手当をしていますが——。」

千代は聞くなりもう走り出していた。

「さと子、留守居してなよ。」

と云いながら千代は目がくら／＼していた。知らせに来た青年が

「おばさん、自転車に乗りなさい。少しは早いですから。」

千代は礼を云うのも忘れて自転車のうしろに乗つっていた。青年が必死になつて走つてくれる自転車も千代にとつては非常におそいものに思えてならなかつた。千代は秋夫が死ななければよいが、大怪我で片輪にならなければよいがと気が氣で仕方がなかつた。現場付近には多くの人々がよつてたかつて何かがや／＼と話し合つていた。千代は自転車から飛びおりたが秋夫の姿は目に入らなかつた。千代は近くにいた一人に狼狽した面持で早口に尋ねた。

「うちの秋夫は？」

「何先刻青年が二三人でタンカに乗せて杉野医院にかつぎ込みましたよ。」

千代の目には無残にも車体の大破した家の自転車が目にうつつ

た。あゝこの無残な姿、秋夫はどれだけのきずを負つた事か。買ひにやつた魚が買物籠の中でくずれたまゝ入れて自転車の上に乗せてあつた。そして、駄賃としてやつた金で買ったのだろう。駄菓子が道のいたる処にこな／＼になつて飛びちらついていた。そして、自転車の車体にはその傷の大きさを示す様に血がべつとりと黒ずんでついているのだった。千代は人々のざわめきも耳に入らず、二丁程はなれた杉野医院へと走つた。あゝ買物になどやるんでなかつた。まだ自転車に乗れる様になつてから半年もたゞぬのに、無理してやるんななかつた。とにかく少しでも早く、秋夫を見なければ、そして安心させてやらなければと——。

医院に走り入んだ千代に看護婦は

「今手術中ですから一寸おまち下さい。あと二、三十分で終りますから。」

と事務的な口調で答えた。

「目でも、何とか——。」

と云つた処で所詮無理な事だつた。聞けば、右足骨折で頭に二、三針縫う事になつたと坦ぎ込んでくれた青年がくやみを云いながら事情を説明してくれた。後から来た自動車をさけようとしてカジを切りそこない、ころびかけた所を自動車が自転車もろとも引つかけたとの事だ。千代は聞きながら氣が遠くなるのをおぼえた。そして今か／＼と手術の終るのを待つた。立つてはすわり、すわっては立つてあるいた。その待つ間の長い事、せのびして手術室をのぞいて

見たりした。

やつと手術が終り面会が許された時千代は（うえたる狼が銅をとるが如き）ベッドの上に横になつている秋夫に抱きついた。

「秋夫、大丈夫かい。痛くない……。ごめんよ。無理しておつかいになんかやつて……。」

千代は涙で秋夫をはつきり見る事が出来なかつた。秋夫は真白な綿帶の中から目だけ出してこつくりとうなずいた。

「お母さんが悪かったんだ。御免よ。秋夫痛いかい。」

秋夫は首を静かに横にふつた。看護婦があまり興奮させると体に悪いからと注意してくれた。足の方にはギブスにはめられた足が蒲団の中からはみ出していた。

「お母さんをゆるしておくれよ。秋夫？」

秋夫は弱々しい声で

「お母ちゃんもういゝんだよ。なかなかいで。僕もかなしくなるからね……。」

しかし千代はそう云われる餘計に涙があふれだした。こんな場合千代は泣くより他に知らなかつた。医師が云うには一月もたてば全快するとの事、千代はそれを聞いてほつと安心した。

それ以来、とかく村の人々は陰口が多くなつていつた。又それを聞こえよがしに云うのでもあつた。そしてその怪我に對して同情の念をうかべる処か、天罰だと云う人さえ出て来るのだった。小さなこの村の事、千代はその日の生活を村の人々から遊離して生活する事は出来ないのである。又どの人もそうである。千代は苦しかつた。そして幾日もまんじりとも出来なかつた。家の中の空氣は陰鬱

さがただよっていた。御飯町でも言葉一つとして誰もかわそそうとしなかつた。春夫はあれ以来学校へも行かずぼんやりして、家中にばかりいるのだった——。夫は息苦しい様な面持で煙草だけをふかしているのだった。

ある日、医院に行つた帰り、千代は村のはずれにある寛心寺の山門をくぐるのだった。そして何時も何くれとなく親切にしてくれる住職の良弁和尚をたずねるのだった。和尚は千代の苦惱を聞いて「わかりますよ、その気持を」と云いながら色々と千代の苦しみをきいてくれるのだった。そして和尚は、

「私だけは決して貴女方をうたがわないし又貴女一家の眞実である事を常に信じておりますよ。わるい事が続く時もありますが、そういう悪い事ばかりではありませんよ。強く生きなさい。死んでは何にもなりません。もう少しの辛抱です。頑張りましょう。私も何か役に立つ事がありましたらさせ下さい。」和尚はあたゝかいまなざしで千代を見つめながら云うのだった。千代はその言葉だけでうれしかった。「何時でも来なさい。力になりましょう。」と言葉をたす和尚に千代の瞳には涙が光つた。千代は一人でもこの村に力になり一家を信じてくれるものがあると思うとうれしさのあまり胸がつかえた。そこはかとなく暮れる秋の夕日をうけて、千代は明かるい心で寺を出た。小僧のつく鐘の音が秋の空に孤えがく様にしづかにひいて行つた。千代は雲を仰いだ。黄金に染つた夕空に小鳥の寝ぐらに急ぐ群が二つ三つと見られるのだった。村の家々の軒から軒へ

もやがたなびきはじめていた。
家に帰つた千代は子供達の顔を見て頗然とした。家に入るなりさと子はわっと泣きながら千代の胸にだきついた。

「どうしたの、え、よくお話し。」

春夫もおびえ切つた態度で話も要領を得ない。しかし千代にはその判断がほんやりとわかつて来た頃には千代の顔にはすでに血の氣はうせていた。夫が警察に「今やつとあかるくなりかけた心に、再び暗黒の雲が流れるのだった。ようやくはい上つた者が再び地獄の谷にうちおとされた様に、千代の心はがっくりとしてしまつた。となるのも取りあえず千代はとなりの部落の駐在まで急いだ。駐在では、「とんだ事になりましたなあ。サギらしいですよ。何か農協の方面らしいんですけどね。はつきりした事は言えんですがね。今から町に行かれても無理ですよ。面会はおそらくさせないでしよう。」

と云つたきり駐在所では取り上げてくれなかつた。千代はその時すでに死という事を考えていた。あれほどまでに頼つて生きて来た夫が否、夫までが、とめどなく流れる涙をどうする事も出来なかつた。あゝサギ、夫が犯罪者。信じよう。夫の潔白を。千代は心の中でさけびつゝけるのだった。しかし千代の心の中にはそれを打ち消そうとするものが何處からともなく、あくまのようにならわれて来るのだった。いけない。少なくとも夫だけは信じなくては。しかしこれも所詮無理な事だった。千代は女だった。いくら勝氣な女でもこれには耐え切れなかつた。春夫の事、秋夫の怪我、そして又夫が——。千代の心の中には、洪水が堤を切つて流れ出る様に、今

迄今こらえて來た苦しみ悲しみがあふれるのだった。千代は女、どうしてもこれまでさゝえる事は出来ない。あゝその次に来るものは死、死んでしまいたい。この世の中から消えてしまいたい。死んでしまえば何もない。死のう。千代は駐在所からの帰へり、部落と部落の間を流れる大川の橋の欄干によりかゝつてゐた。

想いはすぎ去つたいく多の想い出を走馬燈の様に脳裡をかすめては消え、又現われるのだった。秋の夜はすでにふかく、今宵の月は十三夜だらうかすでに中天にかゝつてゐた。皓々と照る月は青白くつめたい光をなげてゆるやかなる川の流れの中に浮んでいた。川の中に葦が数本かたまつて流れにおれそうになりながら生えていた。そしてその葦はふるえていた。千代の目はその数本の葦にぼんやりとそぞがれていた。あゝ、あんな葦でも生きたいんだなあ——。流れに折れそうになりながら——。どうしてみんなに生きたいんだろう。あゝまらない事だ。和尚さんが云つてゐたつ。生きなさいつて。だけどこれ以上生きる事は私にはたえられない。死んでしまつた方がどれほど楽かしれない。川のせゝらぎが村人の陰口に聞える。それがむら／＼と渦をまいて聞えて来る。あゝ堪えられない。

死んでしまおう。千代はすいこまれる様に流れる水を眺めていた。再び葦に日がそがれているのだった。葦はぐつと流れに押されながらも又はね上つて水の上に出る。又流れに押されて水にもぐつてしまふ。あゝあの葦も折れてしまつたかなと思うと同時にあれも私と同じ運命、どうしても勝事の出来ないのだ。あゝ思つてゐると間もなく、再び葦は水面に頭を出す。千代ははつとした。あゝあん

な小さな生命も決して流れにまけようとしない。あの大きな流れに對して雄々しく生えている。そうだ私も生きよう。死ぬなんて卑怯な事はない。死んだらそれは己が罪を認める事になる。あゝ流れにまけてはいけない。社会という大きな流れに葦の如く強く生きなければ。良弁和尚が云われた「死んではだめです。生きなさい。何時かはみんなが見直します。もう少しの辛抱です。きつといい日も近いのです。頑張りなさい。」山彦の様に、又池に落した石の波紋の様に千代の心の中にひろがつて行くのであつた。千代の目は再び輝きはじめた。そうだ生きよう。そして出来るだけやろう。そうすれば何時かは村人も白い目で見なくなるだろう。早く帰つて子供等にも元気をつけさせなければ。千代は静かに欄干をはなれてあるきはじめた。部落の家々の灯がちらちらとまばたいていた。吐く息も白く、冷氣は千代の頬を静かにふれてすきで行つた。何處からか犬の遠吠えがかすかに聞えて来た。

家に帰ると子供達はまだ起きていた。母の顔を見ると不安そくな面持で

「どうだつた、お父さん？」

「心配しなくともいいんだよ。もうおそいから寝なさい。お前達は心配せずにね。」

千代は子供達をはげましながら床につかせるのだった。千代はおそらくまで夫の帰りをまつた。風に表の戸ががた／＼と音をたてるとあゝ帰つて来たかと思ひ耳をすませた。家の前を通る人の足音に耳をそばだてた。しかし夫はついに帰らなかつた。子供達も心配そくに幾度となく寝返りをうつていた。

その翌日の午後、春夫の担任の先生が訪れて来られた。千代は又何か聞きに来たのかと思ひ心配な面持で応対した。しかしそれは以外にも金が出て来たと云う知らせであった。その生徒が本の中にはさんでおいたのを忘れてしまい——と云う事だった。千代はそのままを憎んだ。一寸した不注意、しかもそれによって家の者が表向ぎにすごせない様なはめにおとした事を。又それと充分に調べなかつた先生をもうらむのだった。しかしよかつた。何かしら重荷が一つおけた様な感じがした。先生は幾度も頭をさげて、春夫に明日から是非学校に来ててくれと云つて帰つて行かれた。千代はうれしさがこみあげて来た。何かしらすくわれた様な感じがして——。だが後に千代の脳裡に悲しいものが通りすぎた。夫がまだ帰らない。千代のうれしい気持をだれに伝え、それをわかつち喜び合えるのだろう。喜こび合べき人、夫。その夫が今は罪人の名を着せられてゐるのだ。最初の喜びをわかちあうべき人に今のは何と冷酷であろうか。千代はその喜びを持つて行く処がなかつた。そして千代の心には再び憂うつななる心におち行くのだった。子供達がかわるぐに、母の顔をうかがいながら

「お父さんどうしたの——。何時帰つて来るの——。」

と子供ながらも心配そうにたずねるのだった。千代はだまつているより他に仕方がなかつた。

その夜も大分更けてから喜平がぶりくしながら帰つて來た。千代は何かしらほつとした。そして心配そうに夫にたずねた。

「どうしたんですか、駐在まで行つたんだけどはつきり云わなかつたんだけれど——。」

「それで別に何も……。」
千代は夫の顔をのぞき込むようにしてたずねた。

「馬鹿！お前までが俺を疑ぐるのか。俺は何もせんといつたら何もせん。自慢じゃないが俺は一口者で通じているつもりだ。」

千代はほつとした。そして夫に春夫が何もしなかつた事を話すと夫の氣嫌はよくなり

「やっぱり春夫は正しい事をしたんだな。まあよかつた／＼これで家の名もつぶさずにすんだ。」

と喜こび合うのだった。幾日ぶりであろう。この家にこのようなごやかな平和な雰囲気が來たのは。千代はしづかに想い返して見るのでつた。しかし彼女が大川へ飛込もうと思つた事は一言も言わないのでつた。いつたとしても何もならない。たゞ千代の心の成長であったのだと思つた。そしてよい経験だと思つた。しかし再びあの様な気持になる事のない様、千代は心に堅く誓うのだった。

翌日赤飯を炊いてこれからは二度とこんな事がない様にしたいものだと夫は御飯を口に運びながらつぶやいた。

「今日は秋夫も懶々退院する日だなあ。」

「ええそうです。家で静かにしていて、二日に一度位通えばいい。」

つて話ですがね。よくなるまでにあと二週間もすれば大丈夫つて話ですよ。朝のうちに迎えに行つて来ようと思うけれどね——。」

「うん、そうした方がいいよ。秋夫もさびしがつてゐるんだから。」

「じゃ留守居おねがいしますよ。」

「あゝいいよ。別に仕事もない様だから。」

皆うれしそうだつた。夫は何時になく気嫌がよく、

「これからもこんな事はよくある事だから気をつけてやれよ。これからはお前達が一生懸命やる時なんだから。お前達が一生懸命やれば世の中の人もきっとお前達を見なおしてそんなことを云わなくななるんだよ。勉強も大いにやつて人からうたがわれる様な人間になつちゃいけないよ。人間なんて変なもんで、悪い事するとすぐに入りしてしまふが、よい事をしても人はあまりいい目では見ないものだ。どんなに偉くなつてもそうだ。人の悪い処はすぐに目に付くが、よい処は見えないんだ——。家の事もみんながいいように云うまでには、まだ／＼日がある。だが辛抱しろよ。決して悪い事はないんだからな。」

夫はもく／＼と御飯を口に運んでいる二人の子供をじつと暖かい眼差しで見つめながらしみじみとした口調で自分にも云い聞かせる様に云うのだった。千代はその姿を見ている家庭の朝食ほど楽しいものはない。それも久方振り。幾日か砂のようなまづい御飯をはこんだ事か。千代はうれしさのあまり御飯が喉につかえてとおらなかつた。涙が頬をつた、茶わんの中に落ちた。朝食がすむと、春夫とさと子は

「行つて参ります。」

赤いブラウスの乙女

一年 塩園 正子

妹と二人で自転車を走らせた。九月の新学期に登校する。ペタルは軽く、朝の風が冷い。二人の気持はゴムマリの様に、はずんでいた。「ピーポー」妹が叫んだ。二人は健康だ。「ハーオー」私も答えた。榎の木を過ぎた。半分だ。車は走る。速く、速く、速く。大通りを横切つた正面は、八百屋の店だ。右に曲がればと思つたところ。ギーッと急ブレーキの音をたてて妹の車が止まつた。

真紅のブラウスを着ていた。(涼しい朝だとはいえ、九月一日ではないか)。女が振り返つた。ジッと静かに睨んだ白眼が変に青白く冷たく光つた。ショートカットの前が長く伸びて、額を包んでいる。平たい大きな丸い顔。(嫌な人だな)と思つた。
広い生徒控室は、重なる声で一杯だつた。真白いブラウスの人、人で控室は空より明かるかつた。声が大きな音になつてゐた。

「お早よう。ひさしぶりね」と、四十日振りの顔に挨拶した。「貴女、どこ行つた。私は軽井沢に行つて來たの。とっても涼しかつたわ。母の実家は甲府の駅から二時間位も歩く山の上なのよ、でも、

とつても良かつたわ。私は笑つてそれに答えていたが、今迄、考へてもいなかつた何處にも行かなかつた今年の夏休みを振り返つた。静かな一日、一日を積み重ねた四十日間であつた。平凡な日が過ぎて行つたのだ。がしかし、優しい母が何時も傍に居た。父の明かるい顔が朝夕食卓にあつた。妹の笑声がたえなかつた。しかし何處にも行かなかつたのだ。いや、行けなかつたのだ。父は戦争で腰を負傷してからは、人並に働けない様で小さな会社で帳面をつけて勉強していた。私を迎えた顔は、笑つてゐる時もあり、泣いている様子だ。三年前、私が六年生の秋から母が働きに出るようになつた。母は父と一緒に、小さな会社に出勤する。学校から帰つても母の居ない日が三日に一度位あつた。暗くなつた部屋では妹が一人で勉強していた。私を迎えた顔は、笑つてゐる時もあり、泣いている様な時もあつた。急に大きな声で学校での出来事を話す事もあるが、普段は小さな声で一日の出来事をいつまでも話し続けた。しかし母が帰つて来たトタン、家中は明かるく、騒々しくなつた。楽しい夕食の仕度の包丁の音がコトコトと台所に響き渡り、甘い香があふれて來た。夕食は一日中で一番楽しい時であつた。笑い声と軽い話声がいつ迄も続いた。

授業開始のベルが鳴り、皆席に着いた。明かるい声のオーケストラが続いている。A子のすきとおった声が嫌でも耳に入つてくる。

「軽井沢でね……軽井沢でね……」「起立ノ礼いッ」担任の遠藤先生が壇上に歩を運んだ。「やア、みんな元氣だね」「先生、お早よ

まま、走り、叫び、飛びまわつてゐる生徒達の姿を眺めていた。何時までも、そのままの姿勢で。台湾からと言うので、遠い見知らぬ国の様子を聞きたかった。誰でも知りたがつたであろうに、何か近よりにくかつた。白い制服のブラウスの中で、タッタ一人、赤いブラウスを着た子。母は「赤いブラウスを、フーン、一三〇センチ位、フーン、紺のスカートに白い筋が入つてゐるの、フーン」一息に鼻を鳴らしながら聞き入つた。(教科書を一冊も持たないの。ノートも、鞄も、お靴は薄茶色の皮、ショートカットが長く伸びてゐるの。お昼の食事をせずに帰つたって、お家は?お家は知らないの)「お姉さんと二人暮らし、何かお氣の毒な様子ね。貴女はクラス委員は終つたのだけれど、特に気をつけて親切にしてあげると良いわね。」

翌朝のグラウンド。階段の柱に寄りかかっている赤いブラウスの節子。始業の鐘。教科書もノートもなかつた。一冊も。何もかも昨日のままだつた。二人は階段に並んで腰を下した。黒い屋根の上に高く盛り上つた遠くの白い雲を眺めた。「台湾は暑いでしょ」コックりうなずいた。「お姉さんとお二人?」声を出さずにコックりした。「お父さんもお母さんもお亡くなりになつたのですつて?」黙つてコックりもしなかつた。「お父さんのお国は何処?東京?」「北海道です」北海道!!雪の降る寒い遠くの国。「北海道から台湾へ、随分遠くから遠くへ行つたのね」黙つて、かすかに笑つた。遠い北の国から南の遙かな／＼南の国へ。

ベルが鳴つた。「山田君、ほら教科書だよ」遠藤先生が声をかけながら近よつた。十数冊か、「抱えの本を笑いながら渡した。二、

う御座居ます」一瞬静かになつた時ガツチャンと大きな音を立てて前方のドアが開いた。真紅のブラウスが入つて來た。(赤いブラウス?新学期なのにね)と、冷たい眼の光が矢の様に集中した。平たい大きな顔が背の低い肥つた体の上に無表情に乗つてゐた。クラス全員の好奇の視線を受けても反応を示さなかつた。平然として、ゆつたりとクラスの眼を受け止めていた。「鈍ね」A子の声が透つた。忍び笑いの声が抜がつた。「モウ、モウだな」男生徒の乙が答えた。遠藤先生は振り返つて赤いブラウスの子を見たが、そのまま二年生の第二学期に向えるに当つての注意を続けた。かなり長い時間が経つたが、のつそりと突つ立つたままで動きもしなかつた。話が終つた。「山田君、こちらへ」眼指図した。「皆さん、今日から、お友達が一人ふえました。山田節子さんです。山田さんは、御両親を台湾で失つて、今度お姉さんと引揚げて來られました。台湾台北高女で優秀な成績を挙げていたのです。東京での生活、いや日本での生活は初めてですから皆さん特に暖かい氣持で迎えて下さいね、特にお願ひしておきます。席は中村さん(クラス委員)の隣りに定めましょう」赤いブラウスの子、山田節子はコックリ頭を下げた。そして指示された中村梅子の隣席に腰を下ろした。私の右前の方だった。夕食後の雑談に、山田さんの印象を話した。「台湾から、随分遅い引揚げだな」父がつぶやいた。一般的の引揚げは十數年前の昭和二十二、三年で終つたのだ。「多分、山田君のお父さんは、特別の技術を持つ方だな。それにしても遅過ぎるな」

休憩時間にも、山田さんは独り教室に残つてゐた。クラス委員が外に出る規則をつげると、グラウンドへの出口の柱に寄りかかつた母の声も明かるかつた。「そお、教科書が来たの、それは良かつたわね。フーン英語を声を出して読むの。ヘー大きな声でね」実際以外だつた。先生のリーディングに続いてクラスの者が声を揃えて從つた。山田節子も声を上げて讀んでいた。それも大きな声で熱心に從つた。小鼻に汗が光つてゐた。昼休みの時間は楠の蔭に腰を下した。地理の教科書を開いた。九州から点々と続く小島、琉球列島、広い緑の海が輪をまいて濃くなる。黒い緑、小島が止切れかちに続く。そして黙つて指で押えた島。台湾!!お米が二度取れると言ふ、大きなバナナが実り、パイナップル、パパイヤ、ザボン、までは判つたが、マンゴウ、パアラヤ、レンズウではもう判らない。おいしい、とつてもうまい果実だそうだ。

声を上げて笑つた。節子も上向いて、高い声で笑つた。
母も父も妹も笑つた。同じように声を上げて。
楠の下で台湾物語りを聞く。クラスメートの数が増えた。
花の色が、花の香りが、珍奇な花の形が、大木の高い梢に咲く蘭の花。節子はゆっくりと語つた。フット遠くの空を見て黙ることがあつた。皆んなも黙つて遙かに遠くの暑い見知らぬ国を思う。「こ

れ、上げます」真黄色な絵具一色で染めた様な軽い羽根。「ホイピ一の羽根です。幸福を呼ぶと言われて、きれいな声でホイピー／＼と何時までも鳴くのです。」黄色の鳥が飛んでいた羽根を太陽にすかして見た。

土曜日の帰途、家へ誘つた。

「姉が病氣なので重くはないが永くかかるらしい。お炊事も、洗濯も全部節子がするそうだ。「バイ、バイ」手を振つてわかれだ。

月曜日、節子の机が空いていた。「お姉さんの具合でも悪いのかな?」と思つた。

二時間目、遠藤先生の国語の時間だった。「山田節子さんは、急に北海道に行かることになりました。」胸に穴が開いて、冷たい風がスースと通り過ぎた。

お姉さんの病氣は脚氣で、早く帰つた方がよいとのことで、急に出発したそうです。先生も町会の方から今聞いたばかりです。皆様に、くれぐれもよろしくとのことでした

わずかに一週間のお友達だった。だが南の国の楽しい夢を見た。白い蘭の花が咲いていた。黄金の鳥が飛んでいた。バナナやパパ

イアが豊かに実っていた。

真紅なブラウスの乙女が消えて行つた。それも遠い。遠い北の国へ。冬の訪れの早いという北の国へ旅だつたのだ。

机の上の黄色い羽根を残して行つた。幸福を呼ぶという小鳥の羽根をたつた一つのこして……

真紅なブラウスの節子さん、何時迄も、幸福に!!

高校五年

二年 中 山 民 子

ううん、あと少しガンバレ……しかし解けない、解けないものは諦めるか、何くそノ諦めてたまるかい。

その問題は二次方程式の根の虚実に、三角函数の不等式がからませてあつた。あんなつてこうなつて、しめた! あと一寸、と思った所で目が覚めた。あの問題は昨晩寝る前にやつて解けなかつた。夢の中でも同じ解き方をしていた。実に妙な気がしたけれど仕方がなかつた。数学の問題を解きながら目が覚めるのは、昨日や今日に始まつた事ではなかつた。

枕元に手をのばして時計を見る。八時を三分ばかり過ぎていた。しまつた、俺は三分寝過してしまつた、と思つたとたんに、彼の心中である焦躁が起り出していた。考えてみると俺は八時間寝た事になる。もしも夜がもつと長かつたならば……日曜の朝に限つて必ず思い浮んでくる事であつた。然し浪人はたゆまじ、とばかりに、ガバッと思いきつて飛び起きた。

勝手に戸口をあけて軽い朝食をとつた。

急ぎで机上の解IIの問題集と「英文和訳」をとり出してバッグにつめた。「ちきしきょう」この青ビヨウタンヌが、いつまで寝てるんだ」声には出なかつたけれど、日曜の朝を思う有分寝る事が出来る弟の勝彦の身分が怨めしかつた。

用意が出来ると誰にも黙つて家を出た。初夏の外気は澄んでいて実に気持ちがよかつた。眠い朝をがまんして起きた時の、あの何とも云えないすがくしさを感じた。自分は大体自然に関する感覚が鈍すぎる。これは度々反省する事であつたが、なかなかどうする事も出来なかつた。せめて住宅街を歩く時だけは、家々の庭をなるべく見て通るように努めていた。高校時代にはよく一人で明治神宮を散歩したが、愚連隊風の二三人に因縁をつけられそうになつてから厭になつてやめた。

白い垣根の、いつもの曲り角の家の所まで来た時だつた。突然ヒステリックに鳴き叫ぶ犬の声を耳にしたと思つたら、「おーい田中ア、どこに行くだよー」と云う声がした。ふり返ると彼の中学時代の友人の横田が、例の白い犬を連れてこちらに向つて来る。『重役のお坊ちゃん』か、今のは何の興味もありはしない。現役でさつさと或る私立大学に入つて、考えてみれば俺がもたくしているうちに、横田の奴はもう二年だつたのだな、と、変な感覚に呼びさせられそうになつた。

「又、例の所さ。」

「へえ／＼だつて君、今日は日曜だぜ。」

「浪入に日曜も何もあつたまるかい。今の俺はただ、ムダ、ムラ

「成程ね、ムダ、ムラ、ムリ、か、ははは、うまく云つたものだ。」

横田はやけにおかしそうに笑つた。その笑いが彼には気にくわなかつたが、そんな事は今はどうでもよかつた。

「君みたいに苦労なしに入つた者には、我々浪入の苦労なんてわか

りやしないさ。勿論俺達の楽しみだつてわからないだろう。」「浪人の楽しみって一体何だい。」

「模擬試験の答案が帰つて來た時さ。特に俺は数学が楽しみなんだ。一番満点を取り易い科目だからな。」

「時に君は理科系だつたけど、国語や社会の方はどうだい。」

「ああ、高校時代にね、君にも話したと思うけど、例の古文のねぼけじいがいただろ。あいつの時間に挙げ足を取るよう質問ばかりしていたおかげで、今だに助動詞がたたつているさ。社会の方はまあまああとい所さ。」

「そうちか、きょうもSかい。」

「いや、今日はその辺で済ませるよ。自習室を拝借するだけだからな。」

「君は浪人になつてから、一度も僕の家へ遊びに来ないぢやないか。たまには気晴しにやつて来給え。」

「ありがとう、又気が向いたら行くさ。じゃあ俺には俺の予定があるから今日はこの辺で、グッバイ、又な。」

彼は横田と別れてから少し急ぎ足になつてゐた。小田急線の踏切りを渡つて二校の前まで來た時に、いつも如くゼミにするか、学院にするか少し思案したが、とつさに学院の参番教室に入つて行つた。数列の問題を解いてみた。

彼と同じく浪人風の先客がもう三人いた。あまり日の当らない、人家との境の窓際に席をとつて、さつさと解IIの問題集に手をついた。数列の問題を解いてみた。

どれ位たつたであろうか。いきなり「ガラツ」と凄じい勢いで前

の戸が開かれて、見るからに浪人臭い男が入って来た。彼は折角い

い気持になって問題を解いていた所だったので、少々穢にさわつた。あんなあけ方をしなくとも、戸のあけ方はまだいくらもある

と思った。

頭に軽い疲労を感じて来たので、砂利の敷きつめてある中庭に出でみた。そこには申しわけ程度の、あまり手入れの行き届いていない花壇があった。彼は別に花を見る気にもなれなかつた。裏門を一寸出てみると「開明ホテル」という看板が目についた。こんな所にホテルがある事なんかついて気がつかなかつた。居間の割には人通りが少かつた。それをいい事にして車が横柄な態度で走り過ぎて行つた。急に喉の乾きを覚えて水を飲んだ。水を飲んだところで気分を新たにして、解IIの続きをとりかかつた。

休憩をとつた後は頗る能率がいい。自分でもおもしろい程、問題がすらすらと解けて行く。数学をやつっている時が彼は一番樂しかつた。何かも忘れて一つの事に魂を打ち込める。ただ考えさえすればよいのである。考えれば考える程よくわかつておもしろい。從つて彼は、いくら考へても曖昧な答しか出て来ない、そして何となく割り切れない感じのする国語が大嫌いだつた。

ガサ／＼新聞紙をたたむ音がして、一人の奴がやけにうますぎに飯を食い始めた。彼もそろそろ空腹を感じて來た。しかし自分の計画はあくまで決行せねばならぬ。

きりのいい所で数学をやめて、英語に切り変えた。可成りややこしい構文を訳して行く。英語は数学程おもしろくない。おもしろくなくとも仕方がなかつた。仕方がないけど国語よりはましだ、と彼

んな考えがいつとはなしに彼の内部に芽ばえていた。

一浪で一橋に入った連中二人の事を考へた。彼らはもちろんクラブなどには所属していなかつた。掃除当番をやつたこともほとんど無かつた。授業が終るとアタフタと帰つて行く彼らを見て、よし！ 俺は裕々とやつてやる、何もあわてる事はないさ、と自分の心に云い聞かせていて。然し、そのアクセクやつていていた彼らは一年先に入り、のそ／＼していた彼は後にとり残された形となつた。

現役でやばつた私立へ入るよりも、二年迄浪人しても国立に立つた方が費用はかかる。数学並にばかり物を考える癖の彼は、とつゝの昔にこの計算をませていた。だから、何が何でも今度こそはX大に入りたかった。自分の行く所はX大以外には無い、とさえ思うようになつた。／＼俺は入るんだ、どうしても、どうしても入るんだ／＼と常に強烈に火の火は燃えていた。今の生活を早く通り貫けててしまいたいと、駆けば駆く程、無事に目的地に着いた時の輝かしい自分の姿のみが、より一層くつきりと脳裡に焼きつけられるのだった。



はいつも思つてゐる。

二時近くになつて彼は予備校を出た。思いきり頭を使つた後の、あの何とも云い難い疲労感が彼はいつも大変好きであった。相当強い陽ざしをうけて、日影を選んで歩いた。

歩きながら考へた。家に帰れば又、あの青ビヨウタンの勝彦を見るのはと思うと憂うつだつた。勝彦は常に兄である彼に向つて「高校五年」というコトバを浴びせかけた。彼の最も痛い所を、しかも浪人という言葉を使わずに表現する精神が、彼には妙に納得の行かない受取方しか出来なかつた。

然しそく考へてみれば、全く彼は「高校五年」そのものであつた。朝出合つた横田の事を考へた。それに関連して同級生の顔が次々に浮んで來た。現役で入つた奴は、もう皆立派に大学二年にもなつてゐるのだ。だのに俺はまだ浪人だ。一体いつまで愚図々々しているつもりなんだろう。不安とも焦りともつかないこの氣持におそれられる時が彼は一番つらかつた。俺が今、他の者よりも遅れてしまつたのは、それは……それはスタートが遅かつたからだ。俺は三年になつて、まわりの者がガツ／＼やつていて見ても、まだクラブからぬける事が出来なかつた。気がついた時には人よりも大分遅れていた。彼は理数科目に強かつた為に、普段の試験を大した苦労なしに切りぬけていた。二年のはじめに、物理で九十八点をとつた。しかし、君は字がきれいだから、という理由だけで、教師は彼に惜げもなく一〇〇点をくれてしまつた。こんな事が増え彼を油断させてしまつた。／＼俺はやらなくても他の奴よりは出来るんだ／＼そ

台風狂騒曲

一年 庄 司 佳 子

緑の空、海。波一つない油を流した海。くすんだ緑と踊つているやし。さざ波と。やがて空は、真赤な夕焼となり、ありとあらゆる物は、赤に染る。

ホルンの低い音。ビオラのトレモロ。油の海は、いつしかさざ波をたてる。どこから来たのか、灰色のバーンをのせた雲と、ティンパニーと、大太鼓の風。それらは一諸になり、中天に、悪魔が現れる。悪魔の指揮者だ。そうだ、悪魔だ！

タクトは叫ぶ。ドラムをたたけ！ シンバルを鳴らせ！ 若い音楽士たちよ！

死ぬまで奏せ。狂え！ 狂え！ 叫べ！

ああ、渦がまく！

赤い空、木の葉と遊んでいる風。悪魔はどこに。真赤な空へ。後には、切れた絃、折れたバチを残して。クラリネットの高いロングトーンと、朝焼。葬送行進曲が、ピアニシモで、消える。海は緑に

もどる。そよ風は笑う。
さつぱりと、すべてが、もとにもどつた。いや、時間と、一羽の傷ついた水鳥の、痛手は、もどらない。
その償いは何だ！

敗北者

一年 白鳥澄子

彼は、三時間も前から雜踏の中を歩き続けて来た。三月も末だというのに、冷たい北風があたりかまわず吹き荒し、そのほこりっぽい空気が、彼の心を余計寄立たせた。彼は、自分の傍を通る人間は片つ端しから殴りつけたい様な感情にかられていた。

彼の烈しい虚榮心と、どんな感情よりも激しい競争心とは、彼に二人の友を失わせた。その最初の友は、画家志望に燃える夢想的な考え方を持つ男であった。彼とその男とは、幼ない頃からの交際であった。しかし、二人の人生觀は、全く対象的であった。一方は、「美」だの「芸術」だの「ミレー」だと、喋りまくり、暇さえあれば夢想にふける男であった。彼はこんな友に、いつも腹立たしさと、軽蔑を感じていた。彼には、「美」だの「芸術」だのということは何の興味もない言葉であった。今の科学の時代に、実際の自分をなくして、勝手な幻想の世界に戯むれてどうしようというのだ。

現実に帰れば、友がアトリエと称す絵の具ぐさい部屋と貧しさとが、彼を待っているだけではないか、彼はそう思っていた。そして友が必死になって描き続けてきた作品が、日展に落選した時、彼は嘲笑と憐みとをもって友に対したのであった。彼は、自分の言葉がどんなに友の自尊心を傷つけるかを良く知っていた。しかし、己れの優越感を味わいたい欲望の方が強かった。翌朝、彼は友の姿を見

ることは出来なかつた。そしてその日から、自分の欲望を満足させる対象となる者を失つた物足りなさと、不安を感じた。そんな彼の前に現われたのが、第二番目の友であった。彼とその男とは、同じ工業大学で良きライバル同志であつた。学業の点では彼の方がはるかに上であった。しかし、この男が現われてから、彼の虚榮心は満足されたことがなかつた。友のつかみ所のない特異的な性格は、彼にいつも圧迫を感じさせていた。彼がどんな毒舌を持って、この男に対しても、友はそれをはね返す能力を持っていた。彼には未知の思想を持ち、性格の強いこの男に彼は引き受けられながら、激しい競争意識と、羨望と、嫉妬とが、彼の虚榮心を必要にいためつけていたのであった。そして今朝、彼はこの男の傍を去つた。彼のあらゆる感情が、これ以上友と共にいることを許さなかつた。彼は就職試験に落ちたのであつた。

彼は尙も歩き続けた。あの男に敗けたとは、決して思わなかつた。俺に敗北などという言葉が適用するものか、彼はそう思った。彼は何處へ行くというあてもなかつた。ただ、歩き続けねばならぬ様な気がした。



東北行輪

東京—青森サイクリング

二年 丸山慶喜

(文中クマとあるのは相棒熊谷直彦君のこと)

我々、つまりクマと俺が、昨年の夏、エッチャラオッチャラとペダルをふんで青森くだりまで、自転車をころがしていったことは、新聞『まつばら』にクマが書いたから、みんな御存知のことだらう。

もう新聞で読んだから結構だ、という人が居るかもしれないが、まあと、俺の話をきいて呉れ。

この間、ある奴と話をしていた時そいつが「クマさんは二人で行つたらいいけどもう一人はだれなんだ?」と俺に聞くんだ。これには俺もがっかりした。どうも残念な事に、クマだけが新聞に記事を書いたために相棒の俺が忘れられているらしい。多分そいつは新聞の見出しだけしか読んでいないのだろう。

さて、クマも最後のあたりで、歌をならべたりして、えらく立派なことを言つていたけれど、たしかに俺達はそれを行うにあたつて何の報酬も求めなかつた。行きたいんだ!という気持で一パイだった。俺達の年代なら大抵の奴がそうだろうが、何かでつかいことをやつてみたいという氣持だな。俺もクマも、小さい時から動物や草木、つまり自然が好きだった。この自然という奴は、東京に住ん

でいたのでは満足に得られないもんだ。俺は小さい時から、二十冊余もあるシートン動物記や、リビングストン、スタンレーなどの探検記や、もちろんの猛獣狩の本を読みあさつたものだ。丁度、小さい子が、トラックの運転手に憧れるように、探検隊に憧れたわけだ。ところで、既にクマが四回にわたつて、新聞に書いたことだが、この自転車の旅を、俺は俺なりになるべくクマと重複しないよう、途中はなるだけ簡単に、あつちこつちとひろつていつてみようと思う。

まず、出発前のことから。

高校に入り、一年の成績が悪くてくさつていた時、隣に坐つたのが頭のとてもデカイ男、なんやかんや話しているうち、こいつが「青森まで行かんか」と切りだした。普段生意気なことを言つてゐる俺も、即答できなかつた。一日考えて、少々の不安もあつたが、OKと答えておいた。それから東北の地図とサイクリングの参考書を買ひこんで研究だ。だが、第一に心がけたのは、旅行資金の貯金だ。貯金などといつても俺達のは大したことはない。

衣・食・住の計画のうち、着るものは夏だからパンツ一着でよく寝るのは、シェラフ(寝袋)ですむ。あとは屋根だ。初めは、テントをかついでいく氣だったが、シェラフを積めば荷台が一パイになつてしまふので、しょうがないどこかの家にあがりこむことにした。食料、これは難物だ。まず、こんだてを作つて、費用を計算する。

俺が、近所の酒屋の若い衆に顔が利くことと、さては俺のできる

唯一の料理、味噌汁を、自慢したりした結果、とうとう食料班長にされてしまった。ところが、この、明治神宮の芝生に寝つころがつたてた、食料計画を一つも実行しなかった。菓子類は、またたく間に食べてしまったが、重い米三升五合などは、ただ東京から運び出しただけだった。もともと、一日の行程の最終地を大きな町にしたんだから、そんな町の中で、煙を出して自炊するわけにもいかなかつた。結局いつも、パンと中華そば、あげくの果には、他人様の家の御飯ですましてしまつた。

無駄といえはできるだけ制限した荷物の中に、殆ど使わなかつたしろもの、スペア、つまり携帯石油コンロまで入れていつたんだからこつた話だ。ところで、俺達の足ともなる自転車はといえば、俺のは普通の車に三段ギヤを取り付けたもの、クマのは俗にいう、軽快車だ。その点ツアーカーなんぞと違つて、スピード感あふれるといふのではないが幸いに、二人とも自転車はよつちゅういじくついたから、車を自分の体に合せて調整したりする事は簡単だった。しかしこの旅は俺達のような頑丈な車だった方がかえつて、よかつたかもしれない。と、まあ、こういうわけで出発の当日八月十一日がやつてきた。

天気はよくないが、心はおどるというところだ。

早朝のさわやかな風をきつて、四谷から皇居へ。大手門までは、俺にもわかるがそれからどうやって都内から抜けだしたらよいのかがわからない。東京に生れた時から住んでいてはずかしい話だ。人にはたずねたりしてようやっと荒川放水路までたどりついた。三時間かかつてやつとここまで来たわけだ。葛飾区をぬけて、東京にオサラ

バすると、やつと旅の気分がでてきた。いい気になつて松戸あたりを走つていると雨が降つてきた。初日から悪天候に見舞われたものだ。ふきつける雨の中を目の前の道だけに目をおとして、力なく走つてゐる自分があわれだつた。二人ともまったくの無言。飛びこんだのが土浦の淨真寺。オズオズと差しだした身分証明書を見て「入んなさい」といつてくれた和尚さんの顔が仏様に見えた。イヤお寺だからといって決してシャレではない。

本式の精進料理というのを、初めて食べてみた。

八月十二日、さらにおむすびまでいただいてしまつたこの親切な人達の住む淨真寺をあとにした。この辺の道は泥の湖うみ、タイヤが埋つてしまふ程度だ。灰色の雲が厚みを増す。降り出した雨は、東京ではみられない程の大粒で、たたきつけるように降つてくる。雨具の上からでもビシビシと痛く感じる。日立市の手前に小さいが山がある。雨は降る、道はけわしいで、まったくまいつたものだ。

日立市に入つた時は暗くなり始めていた。工場のサインレンが一きわ高くひびく。交番からお寺、公民館と宿を求めて歩き、最後に孤児収容所に落着た。ここのおばさんが実にやさしい人だつた。遠慮がちにすすめてくれたのが、麦飯に塩魚、普段ならどのを通らないだろう。暗い電気に貧しい食事、けれどその中で生活する子供達は以外に明るい。実際に一日でも一緒にいてみて何とか大臣と口の先でうまいことを言つてゐる連中はこのことを知つてゐるのかと思い、いよいよそいつらが憎くなつた。

十三日は海ぞいに四ッ倉まで。途中初めて見た、常盤のボタ山が

珍らしかつた。ここは石炭の町、黒い石炭の粉が舞つてゐるような町の空氣だ。四ッ倉は小さい町だ。三分も走ると町並から出てしまう。海岸には旗をたてた漁船が沢山停泊している。深呼吸をすると魚の臭い——海の臭いがする。

まず心配なのは今夜の宿のこと。東京の交番に毛の生えたくらいの警察署に行く。五、六人の警官がいたが、「なに、宿、いくらでもあるよ金さえだせば」「なに、金を出さないでとめてくれつて。そりや無理だ。そんなところはないよ。ワッハッハッ」と声をそろえて笑いやがつた。失敬な奴等だ。無理なことは最初から御承知だ。おまわりなんか、コン棒さげて、泥棒のあとを、追いかけるくらいの能しかないんだ。結局、公民館の小母さんの世話を、町営の脱衣場の板の間に陣どつた。

あくる日、朝っぱらから豪雨と烈風のお見舞だ。話によると、台風が接近しつつあり、昼ごろここを通過するということだ。「かまあこたねエ」と飛びだしたのはいいが、雨は降る、風は吹くでサイクリングならぬ惨クリングだ。木の葉がピュー・ピューと舞う田舎道を黙りこくつて走りながら、不覚にも、東京の家のことを思い出してしまつた。雨があり、日がさし始めると、二人ともまた元気になつて、大声で歌を歌ながら走つてゐる。天候が人間の心に及ぼす影響は、非常に大なるものだ。

五時、相馬に着く。駅前で一日中マイクが相馬盆歌をがなつてゐるもの、能のない話だ。ここで衆議一決、まだ陽はあるので、次の目的地仙台まで強行突破することにした。仙台まで五十八キロ、明

り一つ見えない凸凹道を目茶苦茶にふつとばす。又、昼とは違つた趣きがある。仙台には夜中の一時に着く。東北一の都会だけあって町は未だ眠つていない。東京に比べて道路の巾が広い。クマの親戚の家、森下さんの家をたずねあてる。全然しらない家とちがつて、いくらかの安心感がもてる。

翌日、昨日二日分走つてしまつたから、今日はゆっくり休養をとる。さすがに足が痛い。おかげで松島はおろか、青葉城さえも、見に行けない。

十六日、コンクリート舗装の道も仙台から五キロくらいできれてしまふ。あとはいわゆる田舎道。どこの田舎道もそうだが、自転車が農家の人の交通機関となる為に、道の両側に小石のない、細い自転車路がついている。

一ノ関は割と大きい町だ。直ぐ公民館へ行く。自衛隊がいるからだめだというのを無理に頼みこむ。ジープやトラックの停つてゐる裏庭をぬけて、宿直室にあがりこんだ。自衛隊の隊員達が出たり入ったりするので館全体が、ザワザワと落着かない。近くの消防署のぼうろうの電気チャイムの音がやけに大きく響く。

十七日、車の整備をしている時、隊員さん達が話しかけてきた。ここで意氣投合、盛岡で再び会う約束をする。東北一周自転車レースというのがあって、その各地点の通信にこの仙台の第六特車大隊本管中隊の通信部隊というのが出動して來たという訳だ。一足前に出発。我々のコースの史蹟平泉は、一ノ関より十キロ北にある。名所につきものの見物人が沢山いる。俺は山などの景色をながめて感慨にふけることは出来るが、人の多いところで、昔の由緒あるとい

う建物をみても何の感じもうけない。そうそうに、中尊寺を去り、凸凹道をさらに北へ北へ。

途中菅原道真公の奥州拠点胆沢城趾を通る。たんほんの端に、真新らしい石碑が一つあるだけだ。

五時半、岩手県庁所在地盛岡市に入る。大きい町だが、東京みたはちつとは名のうれた河北新報に、自衛隊の居所をたずねる。

その場所消防団講習所という所に行くと、待つてたゾクとみんなとび出してきた。とにかく安心した。一日の目的地だと決めて全然見知らぬ町に入つて行くのだから第一番に宿の心配があるのが、今日はその憂は必要なかつたからだ。二階にあがると丁度飯の終つたところだつた。「残り物だが、よかつたら食べなさい」という隊長さんのことばに甘えて、さつそくバケツのふたをとつて、食べ始めた。隊員さんが、みんなで飯やおかずをよそつてくれる。まづいラーメンばかり食つていた俺達には、久しぶりの栄養食だ。飯を食べ終つてみんなで町の風呂屋に行く。鏡にうつる自分の体は、シャツをぬいでも、未だ着てゐると思われる程、真白にあとがついている。風呂から帰つてくるとみんな外出してしまつた。残つた人に自衛隊の生活ぶりなどを話してもらう。機関銃の弾の下をくぐる度胸試し、戦車での行軍など実際にやる身になるとつらいだろうが、話してもらうこつちは、慢談を聞いているようでおかしくてしょうがない。税金どろぼうなんて言つてゐるが、その組織はともかく、個々の隊員は明るく、くつたくのない人ばかりだ。隊員のある人は「なにしろ敵なんて居つこないんだから、兵隊ごっこだよ」とわり

きつてゐた。大学を出て、会社に入り上役の顔色をうかがつて生活するより自衛隊にでも入つた方がよいとも思つた。隊員さんの殆どが東北地方の農家の次・三男だそ�だ。してみると自衛隊とは、いいのいい、失業救済事業のようだ。映画でみたりする旧軍隊と違つて隊長さんと隊員の人達が、親しく口をききあつているのも好感がもつた。久しぶりのんびりとした夜をすごした。

十八日、いつもより早めに起きた。今朝も御飯の心配をする必要はない。食料係の人が「これは学生さんの分々と飯と味噌汁、おかずを持ってくれたから。ボールに入った飯は、グシャグシャでこげ臭い。大きな部屋にみんな一緒に坐つて騒々しいことだ。今日のコックは下手だとかで、殆どの人が朝食を食べない。大きなタライほどもあるカマに、飯が一パイ残つてゐる。自衛隊とはロツキードなどだけでなく御飯まで無駄にするところだ。しかし俺達は飯代が助かるとばかりに、飯盒が重くなる程つめこんだ。隊は一足先に出発した。

隊長さんの指揮で各分隊ごとにジープに分乗し、俺達に挙手の礼をして去つていった。そして何人もの人が、俺達の手に当日分の加工食つまりおやつをくれていつた。軍服を身につけ、鉄カブトをかぶつた軍装の隊員さん達は勇しく見えるが、丁度俺達の兄貴くらいのこれらの人達が血を流して殺し合う戦争なんかが、あつてたまるものかと思う。

盛岡から十五キロ、啄木が「故郷はありがたきかな」と歌つた渋民村がある。俺は啄木の歌が昔から好きだったので、この渋民村を訪ることを前から楽しみにしていた。渋民村の、道の両側の家は

啄木が歌つたとおり、うすぐら貧しい。村役場の前通り少し行ったところで、道を左に、麦畑の中の細い道を行くと石川啄木の生家跡がある。青い麦畑が崖に切れるちょっとした空地に三メートルの大の石碑がたつてゐる。その碑面には、「やはらかに柳あをめる北上の岸辺目に見ゆ泣けとごとくに」崖の下には北上川がとうとうと流れ、その向こうに、岩手山ががっしりとそびえている。山の中腹から上は灰色の雲に包まれてぼうつとしている。山の中この故郷の景色がどれだけ啄木の胸の中をしめていたことだらう。

「やまひある歓のごとき
わが心

ふるさとのこと聞けばおとなし

「二日前に山の絵見しが

今朝になりて

にはかに恋しふるさとの山

「かにかくに渋民村は恋しかり
おもひでの山

おもひでの川

「はたはたと森の葉鳴れる
ふるさとの軒端なつかし

秋風吹けば

みんなふるさとを歌つた歌だ。
「意地悪の大工の子なども、
かなしかり

戰に出でしが生きてかへらず

「肺を病む

極道地主の総領の

よめとりの日の春の雷かな

昔の友、村の人をうたつた歌も多い。世に認められない才能をもてあまし、煩悶する啄木にとつて、渋民村は、故郷は、心のよりもあつたのだと思う。柄にもなく、山に向つてぼんやりと感慨にふけつてしまつた。碑のわきに坐つて昼食、また国道にとつて返す。昔は奥州街道の宿駅として栄えたという、この渋民村はひつそりと静まりかえつてい。黒々とした集落も、やがて後に遠のいていった。

この渋民村の、いくらもない家々や、啄木の通つた小学校などには今でも啄木の面影の片りんを残す物や、面影を語つてくれる人がいるに違ひない、それなのに何故そこを訪ねなかつたのかが、今になつて悔まれる。そういう所を訪ねてこそ、我々の旅行も一そうち実したものになつたにちがいないのだが。

空は、朝出た時からのまま、どんよりと重くたれ下つてゐる。このあたりの道の石はとても大きい。ベンクをしないかとハラハラする、時々後輪から異様な音と振動が伝わつてくる。停車して点検するとスパークが三・四本はずれています。今朝出がけに、隊長さ

んが戯にベタルをふんだ時、かぎがかかつてたので、それで折れたものらしい。このくらいなら平気だと、大分前に行つてしまつたクマの後を追つた。安い変らず河原のような道だ。何度も東北本線の踏切りを渡る。小鳥谷（コズヤ）の五キロ程手前で、とうとう殆んどのスポーツがはずれてしまった。普通の道だつたら充分もちこたえる程の故障であつたが、あまりの動搖にたえられなかつたのだろう。ここは山の中、たとえ家があつたとしても、自転車屋は無かるう。折よく通りかかった人に聞くと小鳥谷まで歩いて二時間かかるという。

未だ陽は高い。とにかく行けるところまで行こうと、車をかついで歩き出した。ランニングシャツにショートパンツ、それにリュックをしょつて自転車をかついだ姿を想像してくれ。自分でもおかしくなつてクマと顔を見合せて、ニヤリとしまつた。十分も歩くと足がもつれてきた。いよいよ駄目だと、自動車をとめることにした。折よくやつてきた定期便のトラックに手を挙げて合図したが、無情にもわき目もふらずドドーと、砂煙りをあげて走り去つてしまつた。またヨタヨタ歩き出す。

又、後ろからエンジンの音が聞えてきた。曲り角を曲つて、小さな三輪車（ミゼットと/or/いうのだろう）があらわれた。これを逃がしたら大変だと、必死に手をふる。

若い運転手が心よくひき受けってくれ、小さい荷台に車を積み、俺も乗つかつて落ちないようにおさえて出発。クマとは小鳥屋の自転車屋で会うことにする。小さい荷台にのつけられた我が愛車は、ゆれる度におちそうになる。道は川ぞいに下つて行く。カーブを曲る

ごとに、クマの姿がはるか後に小さく見える。

小鳥谷は街道ぞいに細長く延びた村である。その中間あたりに自転車屋があった。この自転車屋は村の社交場なのかも知れん。店前で何人のオヤジさんが、お茶を飲みながら話をしている。日もようやく暮れかかってきた。小父さんはこれからコースの話等をしながら修理している。ノンビリしたものだ。ここから福岡までは、四十分程のこと、それならと覺悟して部屋にあがりこみ、お茶をもらつて飯盒のふたをとる。車はスポーツを全部新しくとりかえた。やつと修理の終つた車にまたがつた時、日はとつぱりくれてしまつていた。村を出て何十分か走る。と、後からすさまじい爆音がきこえてきた。さつきの自転車屋の小父さんがオートバイにまたがつて追いかけた。サテ金はちゃんと払つたはずだがと思ひながら待つていると、小父さんは、さつき俺達が飯を食つた時、部屋に置き忘れてしまつたカンキリを届けてくれたのだ。カンキリ一つでもなければ困るだらうと、遠い道をわざわざやってきてくれた小父さんに心から頭が下がつた。「元気でな」と言つて引返していく。小父さんのオートバイの次第に遠のいてゆく爆音とライトの明りを見送りながら俺は心の中に、あたたかいものがひろがつていくのを感じた。

今日は月明りもない。山の道は本当に暗い。ライトも数メートル先を照らすだけだ。ガクンガクンと石にのりあげる。穴ボコにおちる。それでもペダルは快調にまわる。左側の崖の下は、谷川が白く光つて流れている。はるか頭上を黒いものがよぎる。東北本線の鉄橋だ。あとで聞いた事だが、このあたりは、谷川に山がはえて大き

う美しい景色なんだそうだ。名前も六丈の何とかいつて、特に岩がいいらしい。やがてチラホラと、人家が見えてきた。道路わきでは人々が、お盆の迎え火をもやしている。

福岡に入る。七時半。町の中央部を国道が太く貫いている。場末のソバ屋でラーメンを食べる。公民館はもう燈が消えていた。裏にまわつてみると管理人の家族が、にぎやかに食事中だ。そこへ、俺がニュッと入つていつたのでむこうもビックリしていた。『家じやわからぬから』といふので町長さんの家を訪ねる。出てきた町長さんに、とめてくれといつたら、目的地には、明るい内に着かなくてはならんとお説教をくつてしまつた。そして「宿は旅館を紹介してやるからそこへ行け」というので、慌てて、僕達は金があまりないからと、ことわると、町長さんは「君達も社会科の勉強になることをしているのだから金はこつちで出そう」と言つてくれた。初めは狐につままれたようで信じられなかつたが、若い人がてきて、案内してやるといわれて、ようやつと現実観をとりもどし安心でグッタリとしてしまつた。まことに血も涙もある町長さんではないか。

佐藤旅館は割と大きい。が、クマのことばを借りると、将にはたご屋だ。何かざりもない四畳半に案内された。女中が『お食事は』といふから、済んだと答えたらそのままひつこんだ。「どうせ金を出してもらはなら、ラーメンなんぞ食わないでこここの飯を食えよかつた」などと、二人してむしの良いことを言いあつた。やがて女中がやってきて風呂に案内した。小さな風呂だ。汚なくてもさすがに旅館だ。風呂に案内したし、ぬるいながらお茶をもつてきた

し、蒲団をしいて、かやをつて出ていった。何にもすることがないから、早々に布団の中にもぐりこんだ。

十九日、旅館を出たのが十時、町長さん宅にお礼によつたが、町長さんは不在。よろしくお伝え下さいといつて、今日のコースに入れる。どうしたことか道の両側に人が、ずっと並んで、俺達を声援してくれる。おまわりは、道をあけてくれる。いい氣になつていたらなんと今日は、東北一周レースがここを通過するので、その見物の人出だつた。そうとわかるとはずかしい。俺達のことを丸つきり運手だと思って手をたたいて声援する奴がいるし、中にはそうでないとわかつても、ガンバレガンバレとひやかす奴もいる。ある所なんかでは、幼稚園の先生が「それ」と合図すると、園児達がフレーフレーと小旗をふり始めた。考へてもみる。自転車競走をするのに三戸まで、つまり十九キロやられたのだからたまつるものでない。三戸で警察に寄る。というのは、昨日の自転車屋の小父さんもうでつたが、ここまで来る途中でしようと中きかされた話に、この三戸から左へ、田子（タッコ）を通つて発荷峠へ抜けるコースは、近年、自転車で通つた者はいないとか。先年、慶大などつかの自動車部の学生が、自動車二台で乗り入れ、消息不明になつて捜査隊が出た、などというのが頭にあつて冒検心をそそられるとともに、少々不安になつてきた。というような事で三戸の警察に寄つたというわけなのだ。この警察は、仲々民主的である。受付のおまわりさんが、田子の警察に電話をかけたりして、まあ自転車なら何とか通れるでしょと結論を下してくれた。警察の前の道を左に、つま

り三本木へ抜ける道をまわって、十和田に行くのが一般的なコースなんだそうだ。田子の方に行くのならもう店がないだろうと、パンをどつさり買いこんだ。東京より十円も高いので二人して文句をいふた。準備も整い、勇躍十和田への道をたどる。田子までは自動車が通うから道は広い。田子のあたりで俺の車がパンク。

夏坂部落を過ぎると、我々の大地图にももう部落ははつていなか。しばらく行くと道が二つに分れている。ここでクマのいうチベットがあさんに会う。俺達の標準語はあちらに通するが、ばあさんの話はさっぱりわからない。どうやら俺達は右へ行けば良いらしい。なるほど、左の道にはタイヤの趾があるから自動車が通う、つまり満岬へ行くものらしい。おばあさんにお礼を言つて走り出す。道は急な勾配でうつそうたる原始林の中に続き瓦礫をひきつめたようだ。もう息もたえだ。しぶきをちらして流れ下る谷川にかけられた小さな橋を渡ると、道はさらに勾配を増して90度転回、今までの林がきれいで、片側は谷、片側は崖になつていて。ぐるりとまわって、山を登つて行く。ところが思わず災難が起きた。クマの車がパンクだ。とにかく平らなところまでと車を引いて登り始めた道は、はてしなく上に続いている。ふと気がつくと、どつかで水の音がする。のぞいてみると、崖の下に谷川がある。それではピニールバケツを持って崖を下り、水をくんできて修理を始める。あたりはしいんとして小鳥の声もしない。空をゆく灰色の雲の動きも早くなつた。今登つてきた道は茶色く、はるか下で左にカーブして消えている。さあ、修理完了。さらにはる。やがて山の中腹の平らなところにでた。右側は芝生、右側のはるかむこうに枯木が骸骨のよ

うに林立している。ここで小休止。牛の姿は見えないが、糞がそこにある。じしまを破つてバサバサという羽音がきこえる。見る限りだから、少々す氣味悪い。早々に腰をあげ、しばらく行くと行手に赤茶色の牛の群が見えてきた。知らないうちに牧場の中を走つていたらしい。傍までいつても一向に動こうとしない。道はこれしかない。ままよとペルを鳴らして群の中につけこんだ。奴等は慌ててドドッと動きだした。ちよつと西部劇に出てきそうな場面だ。

背の高いさくが見えてきた。チベットのおばあさんが「シャクノキヤンヌユクヲハズステ」といったのはこのことだつた。道は熊ザサの中を細く下つてゆく。未だ今日の目的地の半分しか来ていないのに、はや日が暮れてきた。小さな林をぬけると右手に人家らしいものが数軒見えてきた。歴史の教科書に出てくる立穴式住居のようだ。さては平家の落武者部落か、これは冗談だ。中に木造の家が一軒だけある。通りかかった子供にたずねると分教場だそうで、先生が一人いるとのこと、先へ進もうといふとクマを説伏させて分教場の戸をたく。マンボズボンにランニングシャツの若い男がでてきた。初めは警備員かと思ったが他にいないからどうも先生らしい。俺達の話を半分もきかないで「アア、とまりなさい」といってくれた。まず安心。教室は一つ、もちろん電燈なんかない。暗くなると石油ランプに燈がともる。とにかく飯だということにして用意にかかる。男三人何ができるのか。室の真中にデンと座つたストーブに、盛んに薪をくべる。真夏だというのにストーブを焚くとは、やはりここは北の国だ。はるばる東京から待つておおかず類をここで全うに林立している。ここで小休止。牛の姿は見えないが、糞がそこにある。じしまを破つてバサバサという羽音がきこえる。見る限りだから、少々す氣味悪い。早々に腰をあげ、しばらく行くと行手に赤茶色の牛の群が見えてきた。知らないうちに牧場の中を走つていたらしい。傍までいつても一向に動こうとしない。道はこれしかない。ままよとペルを鳴らして群の中につけこんだ。奴等は慌ててドドッと動きだした。ちよつと西部劇に出てきそうな場面だ。

部開放する。これでおかずもうかばれる。味噌汁がうまそくなにおいをあげている。君達には暗すぎるだろともう一つランプをつけてくれた。昨日は、他人様の金で旅館に泊り、今日は、ランプの下で飯を食う。俺達の旅行のおもしろさはこんなところにあるんだ。飯が終ると、雑談をしながら、先生は戸柵からウイスキーをもつてきて、グイグイ飲み始めた。俺達も何バイかつきあう。先生は高校をですぐ先生になつたんだそうだ。教員不足の時代にうまくのつたといふたという訳だ。未だ二十二、三と思われる。田舎の人は親切だという俺達の話をきいて「親切なのは、君等が東京の人だ」と珍らしさがあるからだ。年中一緒に暮していると、偏屈な島国根性丸出しの奴ばかりだよ」という先生の話が少々気になつた。くる時見たあの立穴式住居も貧困ゆえだそうだ。

二十日、朝日がキラキラとまぶしい。顔を洗う水は山からじかにカケイで引いてきた水だ。とても冷たい。出発にあたつて、先生が重い米、味噌などの必要外の食料品を買ひあげてくれた。たつた一夜を共に過しただけだが名残がつきない。

写真をとつて出発。このあたりはまったくの山だ。谷川ぞいの道を快調にとばす。急に広い道にでた。これが南からくるバスの道だ。

銚子の三段滝を通りて道は急にけわしくなる。これが名にしおう難所発荷岬らしい。一時間以上もかかつたか、汗だくなつて頂上につく。眼下には十和田湖が青くうすくもやがかかる輝いている。ガヤガヤと観光バスの客がやつてきて急にくさくなつた。商店で、リンゴをしぶつたというリンゴジュースを飲んでみる。甘酢

ぱい味は何とも言えずうまかった。

さてブレークをしめなおして坂を降りることにした。道を真直におりていくと直角に曲がる。片側は崖だからそのまま行くとスキーよろしくジャンプしてしまう。おそろしいことだ。急坂をおりきつた所が和井内だ。湖畔の砂浜で昼食をとる。澄んだ美しい湖だ。

湖畔をまわつて子ノ口に着く。子ノ口で十和田湖に別れを告げ、奥入瀬の溪流に沿つて下る。川の中に島があつたり、木が生えていたりする。前年の台風で有名な九十九島が無惨に流されてしまったそうだ。なるほど川に木が横倒しになつてゐるのが見える。道の両側の崖からは、水が滝となつて日に輝き、白銀の幕をひろげている。焼山で三本木に行くバス道に別れて、コース最大の難所八甲田にとりつく。ものすごい急坂の連続だ。大きいギヤのついていいクマは、ともすると遅れがちだ。ふと耳をすますクボッボー、ボッボー、山鳩の声だ。深閑とした山の中で聞く山鳩の声は淋しさと郷愁を心によびおこす。

降りて車をおす。又乗つてあえぎながらこぐ。悪戦苦闘だ。十和田前の山道など問題ではない。

葛温泉を横に見てさらに北進する。途中、望遠鏡を下げヘルメットをかぶりジープに乗つた東北電力の人達に会つた。これから酸ヶ湯まで行くのだがあとどの位か、とたずねると、「それは無理だ。山の中で日が暮れるぞ。葛温泉に引返しなさい」と忠告してくれた。しかし二人とも無鉄砲に「なんとかならア」と又自転車にまたがる。しかし次第に暗くなつてゆく山道をエッチラオッチャ登つて行くと不安にならざるを得ない酸ヶ湯温泉まであと十キロ平地での

十キロなら三・四十分でOKだが、この山道では平地の三倍かかかる。途中の草むらで休んでいる登山者をみつけ「コンニチワ」と近く。その人にあと五分位上に、小さな山小屋があると聞かされて大安心。少し登るとなるほどあたたく。山小屋と言つても三方を板で囲つてあるだけのアバラ屋だ。が文句はいえない。

小屋には先客が二人いた。青森の工業高校の二年生で二人ともバランスケットボールをやっているそうだ。とにかく飯だと薪を集め、今朝の飯をあたため、コンビーフをいため、カンヅメを開けて暗やみで食べ始めた。こういう食事も又楽した。

二晩程の板の間に四人仲良く、折り重なつて寝た。

二十一日、今日が最後だというのに雨が降り始めた。もう登りもあまり急でない。運沼のまわりはクッショングをひいたようにやわらかい。しばらく行くと東北大学植物研究所がある。昨日はここに泊る予定であった。地獄沼を過ぎ、酸ヶ湯からは下り、あまりの急な坂なのでブレークから黄色い煙がたちのぼってくる。途中ですごい豪雨に会う。だんだん針葉樹も數を増してきた。下るにつれて人家が見えはじめた。ここらで、生れれて初めて木になつているリンゴを見た。青森市に入る。町は自動車と馬車が半々くらいで、その為、道路はいたるところ馬糞だらけだ。町はずれで赤トンボとブヨを相手に食事をする。

これが最後のパンパリとばかりメチャクチャにふつとばした。青森——弘前間四十五キロを三時間かからなかつた。よくよく飛ばしたものだ。弘前八時着。

クマの田舎の家といふのは大きな家だ。暗ヤミでようやつとさが

手をふついてくれる。『さようなら、お世話になりました。』
リンゴ畑もだんだん遠のいていった。弘前から青森へ。東北線は不便だ。普通列車だと東京まで二十二時間つまり丸一日かかる。だから俺達のような者でも急行に乗らざるを得ない。青森の駅のホームと並んで、大きな団体の青函連絡船が、とまっている。どことなく魚くさい駅だ。やがて急行『おいらせ』がホームに入ってきた。ここまで送つて来てくれた信夫さんと別れて汽車は青森駅を東京に向つて出発した。汽車が青森から岩手県に入ると、俺達のたどつてきただ道と相前後して走る。時々現れる道のあそこ、ここと思い出の場所が車窓に走り去る。俺は、思うことをなしとげた時感じる、あの充実感に満たされ、深々と座席に座つて目を閉じる。あそこも見たかった、ここも行きたかったという所が多い。その点は計画不足だった。

汽車は仙台あたりを走つている。外は真暗なやみだ。

俺達が十日余もかけて走つた距離を汽車はたつた十五時間で走りきるのだ。文明とは大したものだと今さら感心した。これからも文明が発達するにつれて、人は最大限にそれを利用するだろう。けれどもその為に、自然を、緑の山、青々と茂る木々を、走る野の動物を、そして白い雲のうかぶはてしない空を忘れてはならないと思つた。

汽車は朝早く東京に着いた。一步足をふみ出して東京の土をふみしめた時のない懐しさと満足感とをおぼえた。故郷とはとてもそれがどんなところであつても、このように感じさせるものなのだ。

してたこの森下さんの家の玄関の戸をたたくと「直彦ちゃんが来た」と家中大騒ぎになつた。俺には何の関係もない家だから、分が悪い。風呂で体を洗つて、ようやくくろいだ氣分になる。さつそく裏のリンゴ畑からもいで来てくれたリンゴがお盆の上に山盛りになつてゐる。もぎたてのリンゴは何ともいえずうまい。

翌日、八〇〇キロのコースによく耐えてくれた愛車を念入りに手入をして弘前駅から送り出す。さて手もとに自転車がなくなると、どこかに穴があいたように空虚な感じがしないでもない。駅からの帰りに弘前城趾に案内してもらつた。現在このお城一帯は、広い公園になつてゐる。お堀にぎっしりとはえた蓮の花が美しい。

明日は、お岩木さんに登ることに相談がまとまつた。

ところが、夜半、急に腹痛におそれ、朝起きてとフランフランになつてしまつた。結局岩木山登山隊一行は、俺を残して出発してしまつた。何も知らぬ家にきて病気なぞせずともよいのにと残念がつたがしたくてなつたのではないかと自分自身をなぐさめてあきらめた。夜、この家のお姉さんと一緒に町のお医者さんに行く。見ず知らずの俺にこのようなお世話をしてくれる。大変ありがたいことだ。パンが食べたい、お粥が食べたいという俺のわがままをきいてくれて、パンやお粥を作つてくれたおばあさんは、俺を肉親同様に扱つてくれた。感謝の気持は言葉ではないあらわせない。

二十四日、昼ごろ登山隊が帰つてきた。予定通り今日帰京することにする。汽車は三時に弘前に着く。体も間もないクマをせかせて準備する。まだ少し足がふらつくが、大丈夫歩ける。リュックをかついでお世話になつた森下さんの一家とお別れする。ふり帰るとま

すがすがしい朝の大気の中を、足を一步踏み出すごとに、我家の門は近づいてくる。そして俺は玄関の戸に手をかけて、勢いよくガラッとあけた。

ただいま！

その後のこと

旅を終えて半年もたつた現在、あちこちで親しくなつた人々から俺達のところに手紙が届く。
日立の養護園で、牛乳配達をしながら学校に通つてゐる穂君は、この四月にアマチュアハム試験を受けに東京に来るとのこと。お待ちしています。

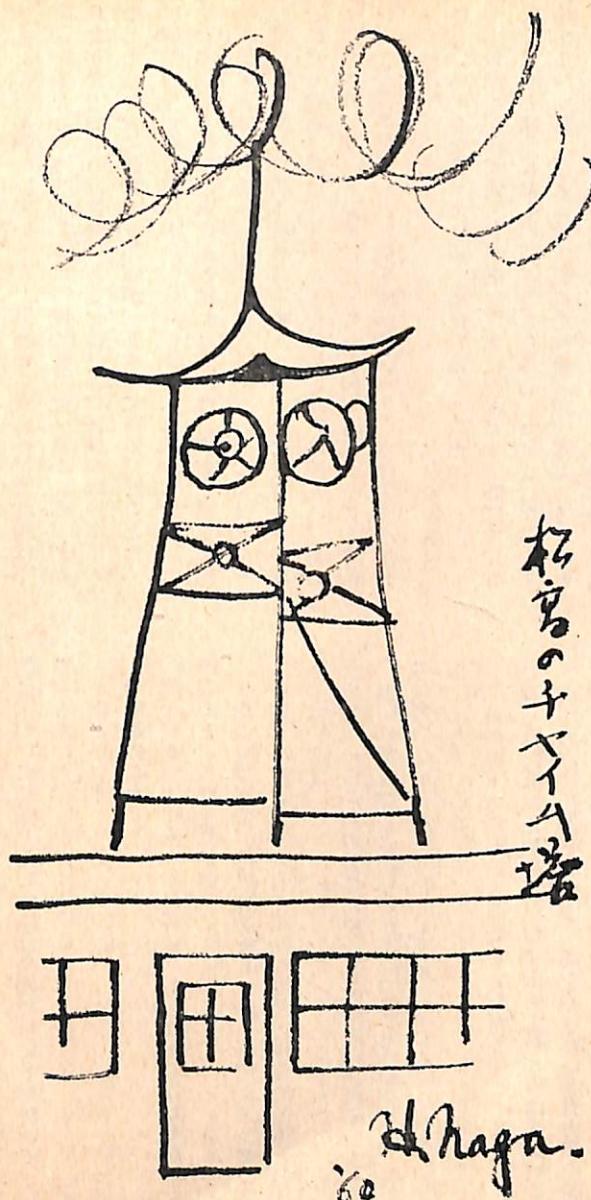
自衛隊の人からの皆さんのことを書いた手紙もおもしろい。

福岡の町役場の人からの手紙。この人は随分あわて者らしい。宛名の八〇〇キロが八〇〇メートルになつて、その上、表と裏がささまになつてゐる。
弘前の森下さんからも手紙をいただく。
遠くはなれた土地の人から手紙をもらうのは楽しいことだ。

四国の高校生から、四国一周をやりたいが貴方達の準備などについての体験を聞かせて下さいというのもきていた。外国のように、日本でもバガボンドが盛んになつてユースホテル等の設備が完備して誰でも旅ができるようになつて欲しいものだ。誰もが旅を愛し、そして旅をする。それは、すばらしいことだ。

チャイムに寄せて

卒業生から寄贈されたチャイムによつて、諸先生方の感じられたことを、思い浮ぶまゝつづつてい
ただきました。尙「卒業生に一言」という題で書いていただいた先生もいらつしやいます。



成田武雄

三年生の卒業記念としてチャイムが寄贈され、装置された。今迄のベルに比べると、柔らかな音色と落着いた響きは、聞く人にとつて、何となく安定感と信頼感を与え、心暖まる感じがする。卒業される皆さんに心から感謝をする次第である。唯、望みたい事は、在校生の諸君に対し、だん／＼暖かくなるにつれ、眠りを催すよき子守歌とならないよう、と云う事である。

前田惟義

三年生ももうすぐ卒業だ。私もこの学校へ来て満三年になる。三年生とは一年生の時少しお附合をしただけだが、がや／＼がさ／＼うるさいが毒氣のない連中ではある。その連中があの物優しい物哀しいチャイムを学校へ寄贈して行くとは傑作というより何となく可愛らしい楽しい気分になる。諸君はみんなそう云う人間達なのである。能不能、是非と云う固苦しい事を抜きにして世の中へ出てもこの気分は失わないで貰いたい。実社会は不純なものも随分多いが、よい事、楽しい事も求めている。諸君のこのような良さも世の中は歓迎してくれるに違いない。元氣で朗かに学校を巣立つて貰いたい。唯一忠告して置きたい事は楽しい事も過ぎるとおちや、らけになり易い。自分の仕事には真地目であることは決して忘れないよう。

小山恒雄

鐘の音の消えゆく空にひとひらの雲のただよい春遠からじ
校門に入るやすなはち鐘の音のころがるごとく空のしじまに

猿小屋と思ひきや
彌生の空に美しきしらべ

橋本雄司

静かなのんびりした鐘。

四宮満

生涯の歴史の中で、十八才時代の君は何時迄も、あのチャイムの曲と共に、母校の中を飛び廻っているだろうよ。

坂本夏男

騒音の音源は人の心の汚点から発して来る。騒音をまき散らし、騒音をさえ騒音と感じぬがんだ心は、悪を悪と感せず、醜を醜と思わぬ心と似ているか全く同じかである。

これは、日本中に渦巻く騒音と、その騒音に対する日本人の鈍感さとを歎いた一音楽家の言葉である。音一筋に生きる人だけに、音について言うところはさすがに鋭い。

ひるがえって我々の周囲を見ると、集合の時には餓舌の騒音があり、授業の時でさえも私語の雑音がある。（但し質問は大いになければならぬ）。三年諸君の寄贈になるチャイムは、今迄のベルのけたたましい音をなくしてくれた。有難いことである。然し私語や餓舌の騒音はまだ残っている。私は、静かに清らかに響くチャイムの音を聞いて、「人の心の汚点から発する騒音や雑音」がなくならないものかと、しみじみ思うことがある。

永浜先義

余韻を響かせるチャイムの音はギリギリと耳をつんざくべルの音よりは確かに心地よく、和らかな雰囲気で学校を包んでくれる。

夏にこれが眠りを誘わなければよいが……、と一寸心配している。

大島信六

チャイムが鳴り始めた此頃、旧来の殺伐たるベルにくらべ遙かに気持の上に心あたまる感じがする。教室における諸君達も、雑然としていた空氣から和氣藪々と往ききしている思いがする。これを機に在校生諸君は増え高校生活を、有意義に明るく希望に満ちて、運動に勉学に學園祭に青年としての意氣を燃やしてもらいたい。

記念として残された生徒諸君達は、今後いつまでも鳴り響くこの音色に祝福され、又激励されている如くにきかれて校門を出られる事でしょう。よき想い出となるべく自己の目的に向って精進し達成されん事を祈っています。

弓家田芳子

最近の世相の影響を受けて、何か私達はいつも損をしない様に——と考えて、目先の損をしないようにする事によって、かえって大きな損をしていると云う事に気付くのです。私達はあまりこせ／＼しないでもつとゆつたりした気持にならなければいけないのではないでしょうか？あのチャイムの音がそう教えている様な気がするのですが——。

のどかな田園風景

中平長治

それは物思わしげだ。

わたしに
落書きを取戻せと
響いているかのようだ。

この国のひとびとは

幽玄の歴史を歩いてきた。

いままたそれは
憂愁の空間を置いて
余韻を奏でる。

佐藤登志

チャイムタワーになる鐘の声は
春呼ぶ鳥の朝のうた

高田俊文

今迄聞きなれたベルの音とは違つて、楽しいリズムの音色は、何となく暢かな感じを受け、如何にも楽しい平和の園にいる気持になります。ですから、何時までもこの気持を失いたくありません。

菅原真静

松理探研究の鐘の声
高發展の響きあり。
緑したたる屋根の色
我わしが学舎の色を表わす。
三歳の春は久しからず。
遂に憧れの鐘と共に來りぬ。

森善男

どこへ行つても騒音にとり囲まれて神経がいら／＼して来る我々の生活中で、あの鐘の音の心にしみ通る様なひとときは、反省と静けさと落ちつきを再びよび戻してくれる。

松下富美子

永い間聞きなれたベルの音ながら、いつも北風のような冷たい響きを感じていましたが、この正月からいとものどかな春風の様なチャイムの音に変り、これで心臓がだいぶ弱らなくなると、ほっとして居ります。その変りうつかりいい気持になつていると、これはきびしい仕事始めの合図だぞ、と云うことを忘れそなります。ともかく今年の卒業生皆さん、どうも有難う御礼を申します。

三年の諸君が、卒業記念品として、チャイムを寄贈し、授業の始め終り毎に、私達は、あのなごやかな階音を聞くことになった。デリヂリ云うけたましいベルは、警告するような脅かすような響きを持つてるので、チャイムを取りつけた以後、非常時報知用、又は職員会議召集用に限られたのは、適切であるかもしだい。チャイムは字引を見ると「教会等の調律した一組の鐘（五個から十個で一組）」とある。チャイムは西洋の教会のみならず、日本の公私立の大学の講堂にも備えられるようになり、拡声器でその音が拡大される式のものは、近来各中小学校に迄普及するに到った。西洋の教会のチャイムも、日本の寺院の鐘も昼夜につき鳴らされる慣しがある。その響きの中には永遠の人間の希望の歌と、苦惱のわめきがこめられて居る様に感ぜられるのである。「近代西洋音楽から、私はあのワレ鐘の一唱以上のものを感じることはできない。」と或る有名な日本の作曲家は云つて居る。拡声器を使用したチャイムに、その様な味わいを要求することはできないが、それはそれで、機械的なベルの音よりも遙かに美しい。そして、あれはフシになつて戻るから、あれを覚えてしまつた諸君もあるかも知れない。若しそれが三年生であるならば、それは一生を通じての立派な卒業記念になることだろう。

倦まず撓ます磨け精根玉

関 恵

過去何十年間も同じような形式で挙げられる卒業式に、同じような歌をうたい、同じような歌に送られて校門を出て行く卒業生にむかって、今更又同じような餞別^{はなむけ}の言葉を述べても、彼らは「もう沢山」と顔をそむけるだろう。こちらもそういう事は飽き／＼してしまつた。しかし三年間特に受持として、学科担任として親しんだこの人達には、やはり何か一言、お別れのあいさつがしたいし、「るくーる」の編集委員もそれを書いてくれと迫る。そこで私は次のような意味を卒業してゆく皆さんに捧げたい。

「この松原高校を母校として、今、無事に高校卒業生と呼ばれる身となつた幸福を、素直に、しみじみと味わつて下さい。」と、「あたりまえの事を」と云うなけれ。国語の時間に読んだでしょう。小説『バルムの僧院』の中でスタンダールも云いましたね。「人生は逃げて行く。現在の幸福に対して氣むずかしくなつてはいけない。」とね。

大和久 鈴江

本校創立十周年の年に卒業される意義の、ひとしお深いものを感じて居ります。
若さに満ちた諸子の前途に多幸を祈ります。要領よく世の中を渡ろうなどとせず、誠実に処して行くことを希望いたします。

ク ラ ブ 紹 介

文 化 部

化 学 部

新入生の為、各クラブを、文化部・運動部の順で紹介します。高校時代の思い出となるよう、特技・趣味をいかして多いに活躍してください。

一、クラブ内容。二、三十四年度の経過。三、三十五年度への抱負。

- 一、部員二十名程、毎週月・水曜の放課後化学室で行う。
- 二、昨年の文化祭では、好評を博した液体酸素の実験を始め、その他種々の実験、展示等。又、共同研究として松高付近の井戸水の水質検査。
- 三、今年は新入部員も交えて、活発な部活動を展開していきたい。

英 語 部

- 一、部員二十余名。部会週一回。
- 二、アメリカンスクール訪問。外人講師を招いて、英会話の練習。
- リンガフォンを用いて、英会話の練習。文化祭には英語劇を演じたり、部員全員で優秀映画鑑賞。クリスマスパーティ等行っています。
- 三、日本駐在のアメリカその他の国的学生との交際を、ひんぱんにし、外国の事に関しての知識を深めたい。

数 学 部

一、部員二十名。数学の好きな人、又は数学の不得意な生徒が集つてゐる。問題を中心とし、数学の成績向上を目的とする。参考書豊富。

- 一、難問を協力して解いたり、一年生の指導、測量などを行つた。
- 二、新一、二年生の熱意と努力で、この部を増え盛んにすることを期待します。

レ コ ー ド 鑑 賞 部

- 一、形の上では、音楽部の中に含まれてゐるが活動の方は、全く異つてゐる。毎週一回音楽室に於いて、クラシックを鑑賞する。
- 又一ヶ月に一度位の割合で軽音楽を聞く。
- 二、今年度は、プレーヤー等の故障の為、余り活動出来なかつた。
- 三、来年度は、是非プレーヤーを持ちたい。又完全に独立した一つの部となつて活動したい。

- 一、日本駐在のアメリカその他の国的学生との交際を、ひんぱんにし、外国の事に関しての知識を深めたい。
- 二、日本駐在のアメリカその他の国的学生との交際を、ひんぱんにし、外国の事に関しての知識を深めたい。
- 三、日本駐在のアメリカその他の国的学生との交際を、ひんぱんにし、外国の事に関しての知識を深めたい。

生 物 部

- 部員は三十余名で、部の中は鳥類、ショウジョウバエ、植物、昆虫、発生等に分かれています。一人が二つの班をかねてもかまいません。
- 四月には新入部員歓迎の為、奥多摩へ、夏休みには植物・昆虫・鳥類の総合調査の為に富士須走及び西湖へ行きました。又、文化祭には解剖・ホルモンの研究・鳥類等で好評を受けました。
- 五月には部誌「アオミドロ」第二号を発行しました。
- 昨年、一昨年に劣らず研究内容を充実して行きたい。

演 剧 部

- 単に演劇の為ばかりでなく実生活上にも役立つ发声練習を初めとして、新劇界直輸入の各部門練習方法で適材適所、五十の瞳が毎月曜、木曜日に勉強しております。
- 古きは「夕鶴」「文法」「おもん藤太」「象の死」、新しきは「幽怪」「ルルシイヌ街事件」、なお芸能祭には部員の創作劇「流れ行くもの」を上演し、さすが演劇部……という評をいたしました。今後とも創作、翻訳劇に力を注ぎます。
- 良い物をやるには人員が必要です。ですから皆さんに沢山入部して頂いて、今年度の高校演劇コンクールで第一位をとろうではありませんか。多数の入部を切に希望します。高校生活の思い出に、実社会の順序に……。

美 術 部

- 部員二十名。自由油絵用具、石膏、その他のものを備えている。部員各自の美術教養の進歩向上と、学校全体の美術水準の向上を計る事を目的とし、放課後各自の意志に従つて自由に練習する。
- 展示会では、春に合同製作の壁画に苦心したがかなり盛大にできました。夏には芸大開放講座に十七名が参加し、油絵やデッサンに精進し大変勉強になった。文化祭に多くの作品を展示し、その成績と勉強を進めている点に於いては、高校生としてAクラスの段階にあるとおほめの言葉をちょうだいした。
- 今後、多方面から美術研究に活動し、又定期的に展覧会を開き校内美化に努めたいと思っている。

書 道 部

- 専ら楽しんで書く事を目的として毎週月・金曜日の放課後顧問の森先生のお手本、書道集等で各自練習をしています。
- 書道展に毎回出品し好成績をおさめ、校内の掲示、体育祭の賞状等に度々協力してきました。
- 上手な人の集りでなく書く楽しみを味わうための集りです。作品批評、諸研究に力を入れ、楽しいクラブにしていきたいと思います。

写 真 部

- 現在活動部員数名。暗室技術習得。暗室装備殆んど完全。撮影旅行、文化祭出品等。
- 四月のクラブ総会以来、六月に第二学区写真連盟に加入。七月に撮影旅行を計画したが都合により中止。十一月文化祭展示。各種学校行事の撮影。
- 活動部員が少ないので、新入生の入部を希望する。設備の拡大、充実に努める。

家 庭 科 部

- 部員三千名。食物・被服の二部に分かれているが、現在被服の希望者は少い。

ユネスコ部（郵便友の会）

- 部員二十余名。部会週一回。
- 郊外ピクニック。アメリカンスクール訪問。孤児院慰問。全国高校生の学校生活実態調査。他校との交歓会等。
- 夏休みには、全日本ユネスコ高校生連絡協議会全国大会に参加し、文化祭では、世界の小供の絵画展「僕と私のお母さん」実態調査の発表、世界の切手展等を公開した。
- ユネスコ部は、今年で満一才になりました。これからも一生懸命頑張るつもりです。

演 剧 部

- 単に演劇の為ばかりでなく実生活上にも役立つ发声練習を初めとして、新劇界直輸入の各部門練習方法で適材適所、五十の瞳が毎月曜、木曜日に勉強しております。
- 古きは「夕鶴」「文法」「おもん藤太」「象の死」、新しきは「幽怪」「ルルシイヌ街事件」、なお芸能祭には部員の創作劇「流れ行くもの」を上演し、さすが演劇部……という評をいたしました。今後とも創作、翻訳劇に力を注ぎます。
- 良い物をやるには人員が必要です。ですから皆さんに沢山入部して頂いて、今年度の高校演劇コンクールで第一位をとろうではありませんか。多数の入部を切に希望します。高校生活の思い出に、実社会の順序に……。

美 術 部

- 部員二十名。自由油絵用具、石膏、その他のものを備えている。部員各自の美術教養の進歩向上と、学校全体の美術水準の向上を計る事を目的とし、放課後各自の意志に従つて自由に練習する。
- 展示会では、春に合同製作の壁画に苦心したがかなり盛大にできました。夏には芸大開放講座に十七名が参加し、油絵やデッサンに精進し大変勉強になった。文化祭に多くの作品を展示し、その成績と勉強を進めている点に於いては、高校生としてAクラスの段階にあるとおほめの言葉をちょうだいした。
- 今後、多方面から美術研究に活動し、又定期的に展覧会を開き校内美化に努めたいと思っている。

書 道 部

- 専ら楽しんで書く事を目的として毎週月・金曜日の放課後顧問の森先生のお手本、書道集等で各自練習をしています。
- 書道展に毎回出品し好成績をおさめ、校内の掲示、体育祭の賞状等に度々協力してきました。
- 上手な人の集りでなく書く楽しみを味わうための集りです。作品批評、諸研究に力を入れ、楽しいクラブにしていきたいと思います。

写 真 部

- 現在活動部員数名。暗室技術習得。暗室装備殆んど完全。撮影旅行、文化祭出品等。
- 四月のクラブ総会以来、六月に第二学区写真連盟に加入。七月に撮影旅行を計画したが都合により中止。十一月文化祭展示。各種学校行事の撮影。
- 活動部員が少ないので、新入生の入部を希望する。設備の拡大、充実に努める。

家 庭 科 部

- 部員三千名。食物・被服の二部に分かれているが、現在被服の希望者は少い。

ユネスコ部（郵便友の会）

- 部員二十余名。部会週一回。
- 郊外ピクニック。アメリカンスクール訪問。孤児院慰問。全国高校生の学校生活実態調査。他校との交歓会等。
- 夏休みには、全日本ユネスコ高校生連絡協議会全国大会に参加し、文化祭では、世界の小供の絵画展「僕と私のお母さん」実態調査の発表、世界の切手展等を公開した。
- ユネスコ部は、今年で満一才になりました。これからも一生懸命頑張るつもりです。

演 剧 部

- 単に演劇の為ばかりでなく実生活上にも役立つ发声練習を初めとして、新劇界直輸入の各部門練習方法で適材適所、五十の瞳が毎月曜、木曜日に勉強しております。
- 古きは「夕鶴」「文法」「おもん藤太」「象の死」、新しきは「幽怪」「ルルシイヌ街事件」、なお芸能祭には部員の創作劇「流れ行くもの」を上演し、さすが演劇部……という評をいたしました。今後とも創作、翻訳劇に力を注ぎます。
- 良い物をやるには人員が必要です。ですから皆さんに沢山入部して頂いて、今年度の高校演劇コンクールで第一位をとろうではありませんか。多数の入部を切に希望します。高校生活の思い出に、実社会の順序に……。

美 術 部

- 部員二十名。自由油絵用具、石膏、その他のものを備えている。部員各自の美術教養の進歩向上と、学校全体の美術水準の向上を計る事を目的とし、放課後各自の意志に従つて自由に練習する。
- 展示会では、春に合同製作の壁画に苦心したがかなり盛大にできました。夏には芸大開放講座に十七名が参加し、油絵やデッサンに精進し大変勉強になった。文化祭に多くの作品を展示し、その成績と勉強を進めている点に於いては、高校生としてAクラスの段階にあるとおほめの言葉をちょうだいした。
- 今後、多方面から美術研究に活動し、又定期的に展覧会を開き校内美化に努めたいと思っている。

書 道 部

- 専ら楽しんで書く事を目的として毎週月・金曜日の放課後顧問の森先生のお手本、書道集等で各自練習をしています。
- 書道展に毎回出品し好成績をおさめ、校内の掲示、体育祭の賞状等に度々協力してきました。
- 上手な人の集りでなく書く楽しみを味わうための集りです。作品批評、諸研究に力を入れ、楽しいクラブにしていきたいと思います。

写 真 部

- 現在活動部員数名。暗室技術習得。暗室装備殆んど完全。撮影旅行、文化祭出品等。
- 四月のクラブ総会以来、六月に第二学区写真連盟に加入。七月に撮影旅行を計画したが都合により中止。十一月文化祭展示。各種学校行事の撮影。
- 活動部員が少ないので、新入生の入部を希望する。設備の拡大、充実に努める。

家 庭 科 部

- 部員三千名。食物・被服の二部に分かれているが、現在被服の希望者は少い。

ユネスコ部（郵便友の会）

- 部員二十余名。部会週一回。
- 郊外ピクニック。アメリカンスクール訪問。孤児院慰問。全国高校生の学校生活実態調査。他校との交歓会等。
- 夏休みには、全日本ユネスコ高校生連絡協議会全国大会に参加し、文化祭では、世界の小供の絵画展「僕と私のお母さん」実態調査の発表、世界の切手展等を公開した。
- ユネスコ部は、今年で満一才になりました。これからも一生懸命頑張るつもりです。

演 剧 部

- 単に演劇の為ばかりでなく実生活上にも役立つ发声練習を初めとして、新劇界直輸入の各部門練習方法で適材適所、五十の瞳が毎月曜、木曜日に勉強しております。
- 古きは「夕鶴」「文法」「おもん藤太」「象の死」、新しきは「幽怪」「ルルシイヌ街事件」、なお芸能祭には部員の創作劇「流れ行くもの」を上演し、さすが演劇部……という評をいたしました。今後とも創作、翻訳劇に力を注ぎます。
- 良い物をやるには人員が必要です。ですから皆さんに沢山入部して頂いて、今年度の高校演劇コンクールで第一位をとろうではありませんか。多数の入部を切に希望します。高校生活の思い出に、実社会の順序に……。

美 術 部

- 部員二十名。自由油絵用具、石膏、その他のものを備えている。部員各自の美術教養の進歩向上と、学校全体の美術水準の向上を計る事を目的とし、放課後各自の意志に従つて自由に練習する。
- 展示会では、春に合同製作の壁画に苦心したがかなり盛大にできました。夏には芸大開放講座に十七名が参加し、油絵やデッサンに精進し大変勉強になった。文化祭に多くの作品を展示し、その成績と勉強を進めている点に於いては、高校生としてAクラスの段階にあるとおほめの言葉をちょうだいした。
- 今後、多方面から美術研究に活動し、又定期的に展覧会を開き校内美化に努めたいと思っている。

書 道 部

- 専ら楽しんで書く事を目的として毎週月・金曜日の放課後顧問の森先生のお手本、書道集等で各自練習をしています。
- 書道展に毎回出品し好成績をおさめ、校内の掲示、体育祭の賞状等に度々協力してきました。
- 上手な人の集りでなく書く楽しみを味わうための集りです。作品批評、諸研究に力を入れ、楽しいクラブにしていきたいと思います。

写 真 部

- 現在活動部員数名。暗室技術習得。暗室装備殆んど完全。撮影旅行、文化祭出品等。
- 四月のクラブ総会以来、六月に第二学区写真連盟に加入。七月に撮影旅行を計画したが都合により中止。十一月文化祭展示。各種学校行事の撮影。
- 活動部員が少ないので、新入生の入部を希望する。設備の拡大、充実に努める。

家 庭 科 部

- 部員三千名。食物・被服の二部に分かれているが、現在被服の希望者は少い。

音 楽 部

月水金の三時半から音楽室では、楽しげなコーラスが毎週聞えてくる。それは決して素晴らしいものではない。しかし皆ビルノを聞くで楽しんで歌っている。それが我が松高の音楽部なのである。悩みの一つはピアノの弾ける人が少ない事である。だから先生のいない時は無伴奏で歌う事もある。去年の文化祭では半年掛りで練習した「美しい青きドナウ」が好評だった。今年はもう少し男子部員をそろえて完全な四部合唱をやりたいと思っている。どうぞ新一年の皆さん、音楽部へでも入って、勉強で疲れた頭を休めに来てください。

文 芸 部

読むことや書くことが好きな者の集まり、それが文芸部です。本を開けば、白から別の世界が現われ、紙を前にすれば思考の喜びがある。我々は若いのだ、それは特権であると共に、それ故に人生の経験に乏しい。文学は、そんな我々に何かを教えてくれる。又そこから汲み取り考えるべきだ。だからと言って聖人君子になるべきではない。自分の意志で行動し、行動の損得を考えなど愚だ。熱と意義だ。人生意気に感じなくてなんになろう。

文芸部は同人雑誌「たわごと」を発行している。ここには、我々の思考と感覚の一つの結果がある。作品の上手は我々にとって第二義的なものだ。心を吐露し、おしゃべりをし、笑い合うのだ。拘束されることなしに。

高校生活は短かい。その期間をより充実したものにしたいと思う人は入部されたい。我々は皆さんのが戸を叩くのを待っています。

運 動 部

バスケット部（男子）

一、各運動部中、最も活動している部だと自認している。競技自体が高度のチームワークを必要とするので、部員の結束、同学年はもとより上級生・下級生の間も暖かい気持で結ばれている。又良い先輩も多く、一緒に練習・コーチ等をしてくれる。練習日は火・木・土。部誌を作製し、練習日誌を記し反省を行っている。夏季には合宿を行う。

二、春季大会、国体予選、支部大会は二・三回戦で敗退。東京選手権には支部代表となつた。昨年の世田ヶ谷区民大会では第二位オーブン戦は月三回程度で勝率は7割。

三、主力を二年中心とし一年生の実力を高めたい。

バスケット部（女子）

一、部員は二十名。練習日は火・木・土。一年生にファイトがあり、いつも陽気で笑いが絶えず、健康そのもののクラブであります。

二、関東大会、インターハイ、と練習試合を含めて成績は三割程度です。昨年は初めての合宿を行い、チームワークの点ではクラブ随一といつても過言ではないでしょう。

三、新人戦において体力の不足と、技術の未熟を痛感したのでこれから練習を考え、上位進出をめざして大いに活躍したい。

テニス部

一、三年が主で男子十一名、女子十三名。この内レギュラー二十名で活躍しています。コートが一面なので時間制又はキャップテンの指導のもとで、おこなわれています。主に一年生は基本練習を、二年三年生は練習試合を行っています。

二、三十四年度学校対抗試合は、計七勝一引分ですが大会などの試合にはあまりふるいません。四校対抗は毎年二回行っていますが、女子は優勝、男子は三位の経験があります。

三、対抗試合を多く行い、又各大会に必ず参加し試合度胸をつけると共に、各学校との親睦を深めたいと思っています。今年の合宿は、学校ではなく郊外でやる予定であります。

陸 上 部

一、部員十三名。活動部員、少。顧問、橋本先生。昨年生れたばかりの新進クラブ。

二、校庭が四〇〇メートルラックとして用をなさないので、一学期中はグランド整備と、備品の整理に力を入れて練習量、少。夏休みの合宿以後、日大グランドを借りて日大生のコーチの下に練習に励んでいる。短距離、フィールドには良い成績を示す機会が無かつたが、長距離陣は目下駅伝に活躍中。第二学年、三位。

三、試合も少なく、目立たぬ存在であつたが来年は練習場を本校に移し、新一年（特に長距離走者）の活躍を望む。

柔 道 部

一、部員二十名（有段者七名）。練習日は月・水・木・金曜。時間は一時間半。みっちりした短時間練習で「柔の道」、身心練磨人間を磨く事を主体とする。

二、対校試合六回。城西地区大会、新人戦、暑稽古、寒稽古、夏休み合宿、三年生送別会等。夏休み合宿に於いては、自己の技を会得。対校試合に於いては、技の工夫、又広く技を知りそれに増して心の反省、技の反省をした。

三、柔道の精心をより多くの人々が知り、心に筋金が入った人を造ると言う柔道部の伝統の為に、多くの部員を集め、より誇り高き松原柔道部の発展を望んでいる。

野 球 部

一、現在部員二十名。練習日は火・水・金の三時から五時迄。土曜日は主として練習試合に於いて、チームワークとファイトでは本校随一の自信あり。

二、昨年度の成績は十一勝三敗一引分の好成績であったが、大会運にめぐまれず、残念ながらいつも支部大会の優勝を逃してしまった。しかし昨年度は三十数校参加の第三支部において、早稲田実業等と共に、ベスト四に選出された。

三、今年度は試合数を昨年の倍にし、一層のチームワークの向上をはかつて、支部大会での優勝をねらいたい。

山 岳 部

- 一、部員約十五名。週に一度先輩の指導のもとに登山技術全般にわたりての研究を行なつてゐる。
- 二、昨年は冬に雲取山及び奥秩父、春に乾徳山、夏に北アルプス穂高連峰において十日間の合宿及び八ヶ岳、秋に再び雲取山、冬に南アルプスと約七山行を行なつた。
- 三、今年度で部も四年目であるので、伝統を築いて行く上にも、又部の性質からも少しでも多く山へ行き山に親しみたいと思う。

ワンダーフォーゲル部

- 一、現在活動部員二十余名。シーズン毎にハイキング・山行等をし、文化祭に用具を展示し部誌「マツゴロ」を発行。
- 二、昨年の活動は三月に東伊豆・五月に奥高尾縦走・八月美ヶ原・霧ヶ峰で一週間の合宿・九月赤城山を予定したが、伊勢湾台風とぶつかって中止。
- 三、自力で活動出来るように製備の拡充。月に一回の行動。

ソフトボール部

- 一、私達の部は仲良くまとまっていて、家庭的な温かさに包まれています。そして一に学校、二に家庭、三にクラブ活動という基本方針でやっています。
- 二、現在活動部員二十名。
- 三、自力で活動出来るよう、月に一回の行動。

バレーボール部

- 一、私達の部は仲良くまとまっていて、家庭的な温かさに包まれています。そして一に学校、二に家庭、三にクラブ活動という基本方針でやっています。
- 二、現在活動部員二十名。
- 三、自力で活動出来るよう、月に一回の行動。

卓 球 部

- 一、昨年は顧問の佐藤竹次先生を中心に、毎週三回二時間づつの練習をして、技を磨くと共に体をきたえました。特に夏休み中に団体のソフトボール部予選に出場したことは印象深いことでした。
- 二、今年は三年目を迎えたのですから、部員の数を増し用具を備えて十分練習して春の支部大会にそなたい等、希望に燃えていました。
- 三、今年は三年目を迎えたのですから、部員の数を増し用具を備えて十分練習して春の支部大会にそなたい等、希望に燃えていました。

バレーボール部（女子）

- 一、練習日は月・水・金・土。二時間。柔軟体操、バス、レシード
- 二、アタック等。

- 一、秋季新人戦をめざして夏期合宿を行い、三勝三敗の成績に終つた。チームとしては二年が少なかつたが一年が良く頑張り、団結し気の合つた試合をすることが出来た。
- 二、現在の一年はファイトがあり技術的にもすぐれているので、練習をかかさず苦しみを分かちあい団結し、良い成績を収めてもらいたい。今年はサーブとレシード陣に力を入れたい。新一年と二年に期待をし、合宿を行ないチームの充実をはかりたい。

舞 踊 部

- 一、週に二回。舞踊家である内田裕子先生の御指導の下に基本練習創作に部員一同熱心に練習を続けています。
- 二、文化祭では『美しき人達』と題し、我々の身近にある人々愛をテーマとして創作し発表しました。
- 三、熱心に練習を続け、より良いクラップを築き上げていきたいと思ひます。又少しでも舞踊に興味をもつていらっしゃる方の入部を希望します。

編 集 後 記

- 良い文芸雑誌を、これが編集委員一同のスローガン。
○ 勉強したい?のを我慢して編集に。
○ 空腹をかかえ、冷い星をながめながら夜道を帰るつらさ。
○ せつかく書いてくれた原稿も、ページの関係上パサリ。
○ 「アノ……今日早く帰つていいでしょうか。」「どうして?」「用事があるんです」「いいわ、帰つて」
なんとやさしい先輩でしょう。
○ 天気の良い日曜まで登校とは、何の因果というものが。
○ 「アノ、スマゼン、この字どう読むのですか。」「ネエ、これなんていう字?」「図書室へ行って、チベット語の辞典持つてらっしゃい。」
誤字・脱字が多いのに驚かされた。
○ 編集委員合計二十名。実際、編集にたずさわったのは半分以下。
非協力にもほどがある。
○ 最後に編集に御協力下さった諸先生方と、生徒の皆さんに、厚くお礼をのべ、次回の『』発行を期待してベンを置きました。

発行委員
一年 田島 船水 金指 平沼 二年 大塚 石田 森本 北郷
高橋 鈴木 近藤 甘木 橋本 川上 佐藤

〃る・くーる〃

第八号

昭和三十五年三月十日印刷

昭和三十五年三月十三日發行

發行所 東京都世田ヶ谷上北沢町一丁目

都立松原高等学校生徒会

印刷所 渋谷区南平台三十五

M K 印 刷 株 式 会 社

T E L (46) 一〇〇五番

